無題

イオン水

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
無題

【Ｎコード】
Ｎ８４００Ｗ

【作者名】
イオン水

【あらすじ】
気が付いたら魔王になってた。
みんなも良く分からないけど僕はもっと良く分からない。
初めから説明すると「ふと目を覚ましたら知らない部屋で寝ていて、傍らに美人の女性が居た」
あれ？余計に意味が分からない。誰か助けて。

タイトル？そんなの考える余裕もないよ！

第1話　魔王（前書き）

このお話は一人の少年が異世界の魔王になってたと言う良くあるお話です。
内容自体もどこかで見たような話を面白く出来ない感じが滲み出ていると思います。
作者の限界です。勢いでやりました。ごめんなさい。
時間を無駄にしていい方。駄作を読んでも怒らず生暖かい目で見れる方はどうぞお読みください。

第1話　魔王

気が付いたら魔王でした。

僕達の冒険はまだまだ続く！！

応援ありがとうございました。
先生の次回作にご期待ください。

…終われる訳無いよね。
そもそも始まってもないし。

―――――――――――

目を覚ますと知らない部屋で寝ており、知らない女性が傍らに居た。

うん。これだけ話すと色々と誤解を受けそう。

でも実際の所は女性はベッドの傍らで看病してくれていただけなんだけど。

状況が分からず脳味噌がフリーズしている僕には今の状況を説明してくれる存在は有難かった。

どうやら僕は魔王の体に入ってしまったらしい。

―意味がわらないよ。

魔王といってもまだ正式な魔王ではなく、父である魔王の跡継ぎをめぐって骨肉の争い勃発。

いざ魔王を名乗って活動をしようとした時に勇者にエンカウントをしてしまい、壮絶な戦いの末に辛くも勝利を治めはしたもののかなりの深手を負ってしまったらしい。

―自称魔王（笑）

笑ったら長時間文句を言われた。うるさい。

僕が魔王の中に入ってしまった原因は勇者との戦いにある。

魔王と勇者の戦いは熾烈を極め衝突により生まれたエネルギーは大地の形を変えるほどだった。

そして戦いの果てに魔王と勇者それぞれが放った魔法の余波が異次元の世界へとつながるゲートを開くことになり、そこから精神体が飛び出して弱った魔王に入り込んだらしい。

本来なら惰弱な精神などは時間が経てば溶けて無くなるので問題は無いけど―（大アリだよ！）その後にイレギュラーが起こり僕の精神が定着して体を乗っ取ってしまったらしい。

元に戻る方法は今のところわからない。

とりあえず元に戻る方法もわからないので当面は魔王として他の魔王候補をぶちのめしながら元に戻る方法を探そうという事になった。

うん…？

ぶちのめす？

無理無理無理無理！

僕は元の世界ではただの中学生だよ？

運動も得意じゃなく勉強も中の中と下を行ったり来たり、社交性も殆ど無く「クラスに一人いる目立たない奴その３」頑張っても村人その２だよ！「今日はいい天気ですね！」しか台詞が無いモブだよ！

嫌がる僕への説得はただ一言「やらなきゃ死ぬぜ？」

勇者との戦いに負傷したために現在は隠れているけど何時までも隠

れていられる訳も無く、発見されたら刺客などがわんさか沸いてくることが予想される。

『だからやられる前に殺れ！』って事らしい。

―勘弁してください…

「一体どうやって戦えばいいんだ」と思ったら魔王の身体能力は他のものより優れているし魔力自体も失われてた訳ではないので、それで十分戦えると聞いて一安心。

よかった～

で？どうやって使うの？

そこからが大変だった。

魔力は膨大にあるので魔法の使い方さえ理解すれば使うのは簡単だと思ったのに、いくら教わっても一つも使えない。
難しい話は分からないけどどうやら魔法のバイパスが魔力に繋がっていないらしく、何で繋がらないかは原因不明。

魔力は膨大に在るのに使えないとか。。。

ならば戦闘技術はどうかというと身体能力は魔王そのものだとしても動かす僕はヘボ（悪かったね！）いので、そこら辺の魔物にも勝てない状況。

さてどうしようと困った所へ美人さんが「人族の土地へ身分を身を隠しながら力を蓄えるのはどうでしょう？」と提案した。
人族の土地は魔族の土地に比べて魔物が弱く魔王も手を出しにくい場所なので都合がいいらしいので人族の土地に行く事になった。

人族の土地に来てから『お前、こんな事も出来ないのか？」と蔑まれ、「頑張ってください～」と言いながらモンスターの巣に突き落とされる日々。

僕は身も心もぼろぼろになっていた。

実際は魔王の強靭の生命力を持っているので少々の傷なんかはすぐに回復するんだけど精神はズタボロだよ。

人族の町に来た晩に美人さんに「実は僕は魔王じゃ無いんです」と伝えたところ、『何で勝手にバラ済んだ！』と文句を言われてうんざり。

「僕は魔王じゃないけど魔王の精神も残ってはいますと言うと、美人さんは笑顔で首を傾げたが「魔王には変わりありませんから」と変わらぬ忠誠を誓ってくれた。

というか美人さんは魔王の従者だったの！？

美人さんの言葉を聞いて『今回は何とかなったが…』うんぬんかんぬん

『今後は他人に簡単に話すな！』と喚いてるのが魔王です。
魔王の声は僕にしか聞こえないらしい。
直接頭に響くので耳を塞いでも意味が無くうるさい。

美人さん「入れ替わりの事などは危険ですので他の者には話さないほうがよろしいでしょう。」
笑顔で言われたので今後は気をつけよう。

魔王『なんで我の話は聞かず、美人の話だけ聞くんだ！』

―うるさいなぁ

そうして僕は剣術に関して超一流らしい美人さんに剣術を、魔王にこの世界や魔法について（無理やり）教わる事になった。

―――――――――

世界には2つの大きな大陸と大小さまざまな島がある。

一方の島で最大勢力を持つのが魔族
もう一方の島で最大勢力を持つのが人族

2つの島の間には激しい海流があるのでなかなかお互いの土地に軍隊を送るのは難しい。
だからと言って行き来が全く無いわけではなく、多きな戦争も数年～数十年い一回は起きることがある。
世界には他にも数多くの種族がおり魔族や人族はそれぞれの大陸に偏っているが、それ以外の種族は一部特殊な種族を除いてどちらの大陸にもいる。

見た目に関しては人族と魔族の殆ど違いは無いようだ。

元々は同じ種族だったけど思想や信仰するする神の違いにより対立。

信仰する神の力を受け進化して人族に勝る魔力を手に入れた種族が魔族。

なら魔族が優位かと思ったら魔族はそれほど協調性のある種族じゃない上に身体能力に関しては、殆どの魔族が人族とさほど変わらないかちょっと上くらいのでしかないらしい。

魔族と聞いて想像する羽が生えてたり角があったりするのは魔族ではなく妖魔族といい、別種族らしけど思想が近いので魔族と共存関係にはある。
魔獣と言われるのは獣の類で殆どが知性は殆どないらしい。

種族は数が多いので全てを把握するのは難しいが大まかに分類すると「魔族側」と「人族側」の他にどちらにも所属しない「中立の種族」の３つに分かれるらしい。

―うん。これ以上何か言われてももう覚えれないから！

まぁ人族の中に魔王の僕が居てもよっぽどのことが無い限り気づかれることは無い。

ただ一箇所にとどまるのは危険なので冒険をしながら戦い方などを勉強していくことになった。

―――――――――

人族の土地に来て早数ヶ月

美人さんは最初の数日こそ剣の持ち方や構え方を教えてくれたけど「実践は練習の数百倍の価値があります～」と、笑顔でモンスターの巣に落とされた時には本当に死ぬかと思った。
危ない時は助けてくれるけど少々の危ない状況なら笑顔で見ているだけなので美人なだけにその笑顔が余計に怖い。

そんなこんなで毎日命を掛けた結果、魔法は全く使えないままだったけど剣に関しては一端の冒険者波には使えるようになっていた。

…多分。

――――――――――

人族の土地に来て半年。

冒険者として色々とモンスター退治などのクエストをこなして来た僕は、他の冒険者に一目を置かれる存在になっていた。

なんて事は無かった。

ただ「ものすごい美人を連れたガキが居る」という噂が聞こえてくるようになった。

美人さんはいつも通りの笑顔を浮かべているけど魔王が「そろそろここも潮時だな」と言ってるので別の町に移動する時期らしい。
大体そういう噂が広がりだすとよからぬことを考える人間に町の外で襲撃されたり時には町の中でも絡まれる。
美人さんが居れば対応は簡単だけど、そういうい問題に巻き込まれると色々面倒で仕方ない。

今は町から約半日の街道から少し外れた森の中で野営をしていた。
美人さんのスペックはとどまることを知らず、ナイフ一本で晩御飯を調達しておいしい料理を作る。

―美人さんって一体何者なんだろう？

聞いてみたけど「魔王様の従者です」と言われただけで、後は何を聞いても笑顔を返すだけなので聞くのをやめた。

―――――――――

2日目の晩

ぶつかり合う音と怒声に目を覚ます。

獣よけに絶やすことの無い火が消えた森の中は薄暗い。

ただ何も見えないわけではなく夜目が利くのは魔王の体質のおかげのようだ。

少し先に屈んで遠くを探る美人さんの背中が見えた。

僕「ど…」モゴ

近づいて美人さんに尋ねようとした僕の口を手でふさぎ、静かにするようにジェスチャーで伝えてくる

魔王『少し先で数人の戦闘があるな。剣がぶつかる音がするから旅人が野盗にでも襲われてるのだろう。』

そんな事まで分かるのか。

僕　（どうしよう？）

美人さん（状況を見る限り野盗ですね）

美人さん（襲われているのは商隊のようで護衛が戦っているようです）

美人さん（ただ野盗の数は多く商隊の護衛は劣勢のようですね）

魔王『ここは捨て置こう。巻き込まれるのは得策じゃない』

僕（ぇ？）

戸惑った僕に美人さんが目だけで「何か？」と問いかける。
魔王の言っていることを伝えた美人さんは少し考えてから判断は任せますと僕を見つめてくる。

魔王『今出たところで死体が一つ増えるだけだ』

僕のような弱い人間が出て行っても死ぬだけだと言うことか。
無力感に打ちひしがれる僕は美人さんが僕を見つめていることに気が付かなかった。

魔王『そうと決まればヤツラが気が付く前に移動しよう』

反応が出来ない。

魔王『早く移動しないとヤツラがこちらに気が付くかもしれん』

魔王の言葉を美人さんに伝えようと目を向けた時、いつも笑顔の美人さんが笑みを消しこちらを見つめていることに気が付き息を呑む。

「～～～～～～っ！！」

女性の悲鳴が聞こえる。

馬車の中から女性が引きずりだされたのが暗闇に浮かぶ人影でなんとか分かった。

どうやら戦闘の音は止み野盗が勝利したようだ。
逃げようとする女性らしき人影を周りの人影が突き飛ばす。

子供の僕だってこんな状況に落ちいった女性が受ける仕打ちについては大体の予想は出来る。

下卑た笑いが聞こえてくる。

倒れた女性の髪をつかんで引きずり立たせる姿を見て僕は無意識のうちに飛び出していた。

隠れていた草陰を突っ切って行く事はしない。
居場所がばれていない状況で物音をするのは愚作。
木の葉を迂回し走り出す。

―姿勢を低く足を音を立てないように！

野盗に気付かれないよう馬車の陰に隠れて見られないように近づいていく。

敵の数は……8…9

馬車の横、女性の近くに4

少しはなれたところで死体を漁っているのが５人

魔王『馬車の中にもう一人気配がある』

１０人

とりあえず女性の近くから行く

息を止め一気に馬車の陰から飛び出す

立ち居地は最後に見た位置とさほど変わっていない。
こちらを向いていた野盗が声を上げようとしたがそいつの喉に向かってナイフを投げる。
ナイフは狙った場所ではなかったが訓練の成果か右肩に刺さりＡが倒れこむ。
他の３人がとっさの事に剣を構えようとする。
女性の髪を掴んでいた野盗Ｂは背を向けていたために反応が遅れていたので背中から切り付ける。
右手でナイフを素早く引き抜き右手に居る野盗Ｃに投げる。

当たらなくても牽制になれば十分。

Cが怯んでいる隙に左手に居る野盗Dにぶつかる様に突っ込んで剣を突き刺す。

魔王『飛べ！』

剣が引き抜けずに止まった僕に魔王の言葉が聞こえ無我夢中で剣を手放し左に転がるように飛ぶ。
急いで立ち上がって見るとCが背後から僕に切りかかろうとしていた様だ。
僕が急に避けた為にCの振りおろした剣は「僕という支えを無くして前のめりに倒れるD」を切り裂いていた。

ここに来て自分の手に残る人を殺した感触に血の気が引く思いをする。

―人を殺した。人を殺した。ひとをころした、ヒトヲコロシタ・・・

魔王『しっかりしろ！死にたいのか！！』

魔王の声にはっとする。

まだ目の前に1人、周りに5人以上居るのに剣が無い状況。
ここで呆けていたら殺されてしまう。
急いで腰のナイフを取り出す。
他の連中が来る前に目の前の敵を倒すか武器を奪わないとやばい。

魔王『あせるな』

魔王の一言に気持ちを無理やり落ち着かせる。

―そんなんで落ち着くわけ無いけど！

―そういう気持ちだけでも持ってみる。

大股で突っ込んできた野盗Cが剣を振り下ろして来るのを体をずらして避ける。
ナイフを突き出したがCは後ろに引いて逃げながらなぎ払ってくる剣をどうにかナイフで受ける。
剣を押し戻しつつCに向かって踏み込む。
バランスを崩して倒れこむCに覆いかぶさるようにしてCの胸にナイフを突き立てる。

痙攣をして動かなくなったCを見て疲れと恐怖がどっと押し寄せる。

魔王『――――!』

荒い呼吸と心臓の鼓動がうるさい。

魔王『おい、気を抜くな！』

魔王の声にまだ野盗が居ることを思い出し急いで野盗Cの剣を拾い周りに注意を向けたところで、馬車に寄りかかりこちらを見ている美人さんと目が合う。
どうやら残りの野盗は美人さんが倒したらしく、僕が野盗と戦っているのを見ていたようだ。

――――――――――

美人さん「相手が油断していたとはいえ敵に察知されずに近づいたのは中々良かったですね。」

魔王『一人で突っ込んだのは大間違いだがな』

美人さんは僕より後に飛び出したはずなのに何時から見ていたんだろう？

美人さん「最初の投擲は命中精度が低いですね。減点1です。当たってよかったですね。」

―何その減点！

美人さん「2投目は牽制のつもりでしょうが、それでも急所に当てるつもりで投げないと駄目ですね。減点2」

―何点でどうなるの！？

魔王『魔法があれば牽制なんぞ考えずとも敵を葬れる』

美人さん「まだ敵が近くに居る状態で突きは判断としては良くないですね。減点3。現に抜けなくなりましたしね。」

僕が疑問を口にするより先に減点数が増えていく。

―もう止めて！僕の点数は０よ！！

美人さん「ただ背後からの攻撃を避けたのは中々の判断でした。振り返ったりしたら死んでました。」

魔王『避けれたのは我の忠告のお陰だがな』

―それはありがとう！魔王。

美人さん「その後に別の事に意識を取られたのは減点４。敵を目の前にして注意が散漫になるとやられますよ。」

魔王『全くだ。人を殺した程度で動揺なんぞして』

！！

―そうだ僕は…人を殺したんだ…

美人さん「ナイフを使った戦闘はバタバタしてよくないですね。減点5。相手がバランスをくずさなければ危ないところでした。」

魔王『本当に吊人形の劇を見ているような無様さだ』

美人さん「最後に敵がまだ残っている可能性があるのに気を抜いたのは致命的ですね。減点6…」

そこで顔を真っ青にした僕に気が付いたのか美人さんは僕を抱き寄せる。

美人さん「ただ初陣としては及第点を挙げてもいいかもしれません。」

と優しい声で囁いてくれる。

美人さん「貴方が野盗を倒したお陰で一つの命が助かりました。まずはその事を誇りに思ってください」

美人さんの体温と匂いに心が少し落ち着く。

美人さん「人に手を掛けた事に対して忘れろとも慣れろともいいません。人を殺す事に慣れるのは怖いことです。」

美人さんの鼓動が聞こえる。

美人さん「ただ相手は野盗です。罪を感じる必要は在りません。」

冷え切っていた指先に血が戻ってくるのが感じる。

美人さん「人を手に掛けた事に潰されること無く乗り越えてください。」

美人さんの優しさに心苦しさが溶けていくように感じた。

魔王『状況を利用して女に抱きつくとは…策士だな』

―そ、そんな事考えてないからね！！

―色々台無しだよ魔王。。。

第2話　首輪

小刻みに震える女性――小柄だし少女？を目の前に僕は途方にくれていた。

僕「怪我は無い？」

少女（ビクッ）

どうやら急に話しかけられて驚いているようだ。

―困ったな。

こういう時に掛ける言葉なんかわかないよ。

魔王『女へ掛ける言葉一つ知らないのか？』

―うるさいな。

魔王『仕方ない。我の言うとおりに言うが良かろう』

僕（魔王）「『賊は退治した。もう心配する事は無い』」

その言葉に少女が恐る恐ると言った感じでこちらを見る。

―いい感じだよ魔王！

僕（魔王）「『さぁ涙を拭くがよい。愛い奴よ。我が可愛がってやろう。苦しゅうない、近ｋ――』おかしいから！」

僕の（傍から見たら）一人ツッコミに少女がビクッと体を揺らす。
また警戒心を抱かせてしまった。。。
まだ魔王は何か言ってるけど役に立たないのが分かったので放置。
地味にうるさい。
どうしようか困っていたら野盗を縛り上げた美人さんが戻ってきたので少女の事は任せ、僕は賊の見張りに付くことに。

生き残りは僕が最初にナイフを指したＡと美人さんが倒した５人の計６人か。
全員生捕りとかさすが美人さん。
賊は全員気絶させられて縛られてるので見張る必要が在るのかは疑問だけど何もしないよりはマシだよね。

少しして美人さんに呼ばれる。

どうやら少女が落ち着いたらしい。

焚き火の光の中に美人さんと毛布にくるまれた少女が居る。
毛布なんてどこにあったんだろう?と思ってたら、どうやら馬車の中にあったのを拝借しているらしい。

僕「落ち着いた?」

少女(コクリ)

一瞬、体を膠着させながらも小さくうなずく。
焚き火の明かりに照らされる少女の後ろにある羽を見て「あれ?」と思う

魔王『ほう。妖精族の者か』

僕「妖精族…?」

妖精少女(ピクッ)

魔王『妖精族というのは精霊の森に住む種族で滅多に外に出てくることは無い珍しい種族だ』

何でそんな種族がこんな所にいるんだ？

魔王『大方、人間にでも捕らえられたのであろう。』

よく見ると首に大きな首輪のようなものが付けられている。

魔王『封輪か。』

封輪？

魔王『あの首輪を付けられたものは魔力を封じられる。』

美人さん「どうやら彼女は住んでいた森の付近で囚われ無理やり連れてこられたそうです。」

どういうことなの？と美人さんに目を向けると、さっきの短い時間である程度美人さんが話を聞いていてくれたらしい。美人さん優秀すぎる！

―べ、別にその間の会話が面倒だったわけじゃ無いんだからね！

・名前は妖精少女

・妖精の森付近に居るところを人間に捕らえられてしまった。

・妖精の場所は良く分からない（外に出ることが無いので地理は理解してない）

・捕まって1ヶ月くらい（眠らされてたりしたので正確な日数は不明）

・どこに連れて行かれるかは不明。

・一緒に居た人たちは私を捉えた人たちの仲間（奴隷商人の一味らしい）

全部で7人（商人が1人、御者が1人、護衛が5人）

・皆の所に帰りたい

奴隷商人の一味は全滅していた。
少女に関してどうするかだけど…

魔王『ちょうどいい。珍しいから買おう』

―うん。だまれ。

僕「この子を家まで送って上げようと思うんだけど」

美人さん「わかりました」笑顔で即答

妖精少女（キョトン）

何を言われたのか分からなかった妖精少女は僕の言ってる意味を理解し驚きをあらわす。

僕「とりあえず封魔の首輪だけど。どうにかならないかな？」

美人さん「そうですね。本来なら鍵になるものがあるはずなんですが奴隷商人はそれらしいものを持って内容なので、鍵自体は本来の目的地にあるのかもしれません。」

鍵が見当たらないのは困ったな。

魔王『なんでわざわざ外すんだ。』

―うるさいよ、魔王。

美人さん「無理に外すのは危険ですね。」

首輪自体に魔力が込められており正規の鍵以外で外そうとするのは装着者の命に関わるらしい。

魔王『このまま飼えばいいではないか』

―だから少し黙ってね。

見ていて気持ちいいものじゃないので外してあげたいんだけどなぁ。

魔王『別に鍵なんて無くても外すことは可能だ』

―もういいかげんに…え?何だって??何て言ったの魔王!

魔王『我はうるさいのであろう。黙っておるから好きにするよい』

―ごめんなさい。もううるさいなんて（余り）言わないから機嫌を直して!

魔王『……』

―本当にごめんなさい。魔王様の力を見誤っておりました。

魔王『……』チラリ

―さすが魔王様、博識！僕らに出来ないことを平然としてしまう！！

魔王『……』ニヤリ

―そこにしびれる！あこがれる！！

魔王『……』テレ

―優しい魔王様。どうか無知な私めに魔王様のすばらしい英知をお与えくださいませ！！

魔王『…仕方がないな』ニヤニヤ

―この魔王ちょろすぎ！！！

魔王『何かいったか？』ギロリ

―イエイエ。メッソウモアリマセン。

―で一体そうすればいいの？

魔王『簡単な事。我の魔力を持って首輪の魔力を相殺してしまえばよかろう』

―でも僕、魔法使えないよ？

魔王『魔法は関係ない。直接首輪に触れて魔力を注入するだけで無効化できる』

おお！

魔王『はずだ』

―確信じゃないのかよ！

魔王『お主がちゃんと魔力を出せるか分からぬからな。我がするなら確実なんだが。』

なるほどね。

美人さんと妖精少女に首輪は何とかなりそうだと伝えると妖精少女が伏せていた目を僕に向ける。（可愛い！）

ただ僕自身もやったことが無いのでぶっつけ本番じゃなく少し練習する時間がほしいということも伝える。

そして妖精少女を元に居た場所に送っていく予定だと言うと妖精少女は「お願いします」と小さな声で言ってきた。（本当に可愛い！）

―――――――――――

縛り上げていた野盗の一人を起こして尋問する。
妖精少女は馬車に居てもらっている。
尋問は美女さんがする事になった。

―僕は尋問なんて出来ないからね！

魔王『へたれめ』

―その通りだけど、うるさいよ！

野盗E「うぅ…」

美女さん「目が覚めましたか？」ニコニコ

野盗E「一体何が…はっ」

野盗Eは縛り上げられているのを理解し声を荒げる

野盗E「一体どういうつもりだ！」

美女さん「私の質問だけに答えてください」ニコニコ

野盗E「俺たちを誰だと思ってるんだ！こんなことしてタダで済むと思うなよ！！」

美女さん「一体誰なんですかね？何が起こるんでしょう？」ニコニコ

顎に手を当てちょこんと首を傾げる美女さん。
野盗Eは「どうだ！」とばかりに名前を言うが、そんな名前を僕たちが知るわけも無く美人さんは笑顔のまま。

美女さん「で、その由緒正しき野盗さんは全部で何人くらい居るんですか？」ニコニコ

野盗E「聞いて驚け。全部で１００人を超す大盗賊団だ！」

美女さん「あらあら」ニコニコ

野盗E「さっさとこの縄を解かないと俺らの仲間が容赦しないぜ！」

美女さん「そうなんですか～」ニコニコ

野盗E「へっ今更怖気付いても遅いからな」

美女さん「で、本当の所は何人なんですか？」ニコニコ

野盗E「だから１００人を超す…」

美女さん「別に本当の事を言わなくてもいいですよ？いずれ自分から言いたくて仕方なくなると思いますし」ニコニコ

野盗Ｅ「へ？」

美女さん「別に貴方に聞かなくても他にも聞く相手はまだ居ますから」ニコニコ

その後の美女さんの拷問については多くは語るまい。
ただ野盗Ｅ・Ｆ・Ｇが精神的に少し陽気になったくらい。

―陽気ナナノハイイコオダヨネ。

魔王が『美女だけは怒らせないようにしよう』と呟いたのに僕も心の中で盛大に頷いた。

―――――――――――

美女さんの誠意溢れる説得で聞き出した内容をまとめると

・本当の人数は１９人（ここに居る人数を抜いたら残り９人）

・近くの山の中腹に拠点がある

・２ヶ月ほど前に別の土地からここに流れてきた

・いつもはこの街道を通る商隊や付近の村を襲っている

・別働隊の９人は近くの村を襲っているはず

・親分は妖精少女の髪を掴んでいた男（最初に倒しちゃったよ）

――――――――――

それだけ聞くと美女さんは野盗に当身を入れて気絶させてしまう。

―笑顔がむっちゃくちゃ怖い。

奴隷商人の馬車は前が馬も無事で使えるようなので使う事にする。

人が乗る箱部分と後ろが奴隷を入れるだろう牢屋部分が連結してい

たので、生き残った野盗を縛ったまま後ろの牢屋部分に押し込む。
少し考えて一応、奴隷商人と護衛の死体も一緒に牢屋に突っ込んだ。

―もしかしたら商人の死体から何か分かって他の奴隷が助かったりしないかな～

とか思って美女さんに聞いたら「大丈夫でしょうが私たちが商隊を襲ったと勘違いされるのを防ぐためです」と言われた。

前の箱に僕と妖精少女が乗り込み美女さんが御者をする事になった。

―――――――――

夜が開け日が昇って少したってから騎乗した兵士１０人に出会う。
騎士たちは野盗を討伐する為にきた領主の兵で馬車の後ろの牢屋の話をすると死体と野盗は引き受けてくれる事に。

妖精少女については奴隷商人に連れられていた奴隷の少女で元の村

が僕たちの向かう方向と一緒なのでついでに送る旨を伝えると、当初は自分たちがと言っていた騎士も最終的には美女さんの笑顔に「お願いします」と言っていた。

美女さんの笑顔、最強ですね。

まぁ妖精少女が僕たちに懐いていたのもあるかもね。（主に美女さんにだけど）

妖精少女の羽は毛布に包まって隠していたので大丈夫。

恐怖に今だ怯えた少女を演出（殆どその通りだけど）

褒美も出るし出来ればこのまま館まで野盗と死体を運んで貰えないかと言われ美女さんが快く了承。

後で聞いたら「あそこで断ると不振に思われるから」と笑顔で言われた。納得

野盗と戦った場所、アジトの場所、残りの野党の人数、近隣の村に被害が出ている可能性を伝えたところ、討伐体の騎士たちは馬を駆ってあっという間に見えなくなった。

僕たちは後に残った一人の騎士と共に領主の館へ向かった。

―――――――

昼前に領主の館に到着。
騎士に案内されて領主に面会する。

領主「野盗討伐に協力してくれたらしいな。感謝する」

―５０代のダンディーなおじ様きたこれ！

領主ってもっとぼってりと不健康に太っていて無駄に威張ってると思ってた！

魔王『まあそういう輩は腐るほど居るがな』

―やぱりいるんだ！

領主には僕をとある地方貴族の三男で美女さんはその従者で、見聞を広げるために冒険者をしながら旅をしていると伝えた。
領主の言葉に美女さんが如才がない対応をしている。

―いいのかな任せきりで。

魔王『人間界の事は美女に任せておけば間違いなかろう』

―意外と信頼してるんだね。

魔王『……』

―あれ？照れちゃってるの？ニヤニヤ

魔王『うるさい』

領主「褒美は何がよい？」

美女さん「頂けるのでしたら奴隷商人の馬車を」

領主「あれでいいのか？」

美女さん「はい。旅に馬車があると便利ですので」

領主「ふむ」

美女さん「あと、出来ることならばもう一つお願いしたい事が」

領主「それは？」

美女さん「奴隷少女は私たちが村まで送らせて頂きたいです」

領主「私の方でも送り届けるつもりだったのだが？」

美女さん「奴隷少女も私に懐いておりますし、ちょうど彼女の村の方面に向かいますので」

妖精少女が美女さんを不安そうに見上げてギュッと服を掴む（可愛い！）
それを優しい微笑で見つめる美女さん。

魔王『綺麗だが薄ら寒いモノを感じるのは何故だろうな？』

そうだね、と心で頷いた瞬間に美女さんがチラッとこちらを見たのと目が合った

―全然何も思ってませんよええええとても素晴らしい笑顔に僕は神に祈りを捧げる勢いで――

と良く分からない言い訳を心の中で一心に唱え続ける。

―こ、心が読めるの？美女さん！

魔王『ナニモイッテマセンヨー』遠い目

魔王の声は聞こえない筈なのに同じく言い訳をする魔王。

その姿勢を弱いとは言えない。

領主「ふむ。確かに懐いているようだな。」

妖精少女と美女さんを見て呟く。

領主「よし分かった。その少女のことはそなたらに任せよう」

美女さん「ありがとうございます」

領主「他に何か望みはあるか？」

そういう領主に美女さんは僕を見つめる。ああそか。

僕「特にありません」

一応、僕が主人なのか。

魔王『一応じゃなく主人なんだがな』

全然そんな気にならないね。

その後、領主が今日は泊まっていって欲しいという申し出に「期日の迫った届け物があるので」と辞退。

では風呂は無理でもお湯を沸かすので身を清めてはというのには美女さんが笑顔で「ありがとうございます」と言う。

1刻後。

スッキリした僕が部屋で待ってると美女さんと妖精少女が戻ってきた。

妖精少女の衣服は領主さんが「子供用は無いが詰めて使ってくれ」と幾つかの服をくれたので、それを美女さんが簡易で詰めたのを来ている。

ゆったりとした服で羽が隠れるように出来ているようだ。

なんていうのかな。

身を清めて着替えた妖精少女は本当に要請のように可愛い！（妖精だけど！）

魔王『ホウ、これは将来有望な逸材だな』

―将来とかじゃなく今でも十分な逸材だからね！

その後、簡単な食事をご馳走になり領主に挨拶をし、館を後にした。

第2話　首輪（後書き）

1話で魔王で魔族の後継者争いがどうこう言う話が出ましたが当分は関わって来ません。そもそもそこまで話が続くかどうかも分かりません。

とりあえず言えることは「可愛い！」

第3話　戦士

旅の一日は日が高いうちに移動し日が落ちる前に野営する。

朝は美女さんに馬車の扱いを教わるが簡単そうに見えて中々うまくいかない。

妖精少女は馬車の中から興味津々と言う感じで見ている。

「一緒にやる？」と聞いたら小さく首を横に振って僕がやっているのをじっと見ていた。

昼からは馬車の中で妖精少女の首輪を外す特訓。

といっても手のひらに魔力を通せるようになる訓練だけど魔王が『そんなことも出来ないのか』『子供でも出来るぞ』『恥ずかしい』と言うのが煩い。

夕方頃に野営準備をする。

野営地は街道にある程度あるので通常はそこを使用する。

先客が居たり後から人が来たりする場合は要注意。

妖精少女の正体が妖精族と悟られないようにも注意しなくてはいけないけど、大体は美女さんによからぬ事をしようとする輩が出てくることがある。

誠意を持って告白する相手には笑顔できっぱり拒絶するだけですむけど、腕力にモノを言わせようとする相手には笑顔でねじ伏せる美女さん。（コワい！）

魔王『花が野花か食人花かも見分けれんと愚かな。あんなのに手を出そうとする気が奴の知れん』

貴方の従者ですよね？

食事の後は美女さんの剣術指南。これがハード。
美女さん曰く「疲れきったら夜中に何かあった時に対応できないので程ほどに」やってるらしいけど。
妖精少女はここでも興味深そうに見ている。
さすがに「一緒にやる？」とは聞かない。

その後は僕と美女さんが交代で見張りをし一日が終わる。
妖精少女も見張りをするつもりらしいけどすぐに船を漕いでしまう。
（可愛い！）

――――――――――

領主の館を出て数日。

その間のエンカウントはモンスターとの遭遇が2回。
毛皮と食用の肉が手に入った。肉はその夜に美女さんが燻製にした。

途中に寄った村で一部の毛皮と燻製肉を物品と交換する。
その中に子供服も何点かあった。さすが美女さん。
無地のワンピースだけどよく似合っていて可愛い！

そして5日程たったある日。

魔王『やっとか』

魔力を宿した手を見つめて呆然とする僕

魔王『結構な時間がかかったな』

僕「やった…」

この日、やっと手に魔力が通せるようになったのだ。

魔王『ますは第一段階クリアだな』

やっと、これでやっと妖精少女の…第一段階？

魔王『うむ。これからその魔力をコントロールできるようにしないとな。』

―まじですか！

魔王『次の段階は魔力を手のひらに集めるようにする。』

ふむふむ

魔王『その後は魔力の強度を調節できるようにいて何とか首輪を無効化できる』

―なるほど

魔王『武器などに魔力を通せるようになったら完璧だな』

―武器に魔力！魔法戦士ですね！

魔王『まぁそこらの武器なんぞは魔力を通した瞬間に砕けるがな。』

―意味無いじゃん！

魔王『うまく魔力を通せばなまくらでも少しくらいの切れ味や強度は上がるだろう』

―おお！

魔王『その脆弱な武器を壊さないように魔力が通せるようになれば首輪も外せるだろう』

―砕けるならそれで外しちゃえばいいのに

魔王『首輪に限定できない破壊は装着者も傷つけて場合によっては死ぬが？』

―練習大事だよね！

魔王『手のひらに集めることが出来たら後は微妙な調整をするだけなのであっという間だ』

―よし、がんばろう！

魔王『（多分な）』

―ん？何か言った？

魔王『何も言っておらん。さぁ始めるぞ』

もうすぐで妖精少女の首輪が外せると思うと修行にも力が入る。

魔王『力みすぎだ、もっと力を抜け！馬鹿者！！』

空回りでした。

―――――――――――

数日後

空回りは続く。
魔力を手のひらに集めることが出来ない。

魔王は『魔力をボワっじゃなくホっっという感じにすれば出来る』
と言う。

―意味がわかんないよ。

知識についてはちゃんと教えることが出来る癖に（口は悪く偉そうだけど）

感覚の話になるとなまじ苦労してない分、説明が出来ないらしい。

美女さんに愚痴をこぼしたら少し首をかしげ

美女さん「魔力は出せるのですからその魔力を手のひら全体ではなく手のひらの中心に意識をし、丸い石のようなものを掴む感じをイメージしてみてはどうでしょう？」

とアドバイスをしてくれた。

―その説明は分かりやすいけどそんな事でいいのかな？

とか思いながらやってみたら出来た。

掌に魔力が集まっている。

妖精少女はそれを珍しそうに見た後に自分の掌を眺めてた（可愛い！）

魔王『ほれみろ。言ったとりでできたではないか』得意げ

魔王の説明で出来たんじゃなく美女さんのおかげだからね！！

そこからは物に魔力を通す特訓が始まった。
さすがに剣を駄目にするわけには行かないので石や木の枝などに魔力を通す。
最初はどれくらいの量なのか分からずにとりあえずちょっと力を入れたら
手のひらサイズの石が一瞬で割れたのにはビックリした。
数日が立つ頃には物の多きが魔力の容量では無いことが分かった。
同じ場所の石でも物によって容量が違うのは不思議だ。

分かったからと言って壊さずに通せるわけではないけど。

魔王の説明は相変わらず良く分からない。
本当に感覚の説明は壊滅的に駄目だな。

駄目元で美女さんに聞いてみた。

美女さん「私は魔力自体はさほどありませんので良く分かりませんが」

僕「美女さん魔力はそれほどでもないんだ。」

美女「ええ。ドラゴンを丸焼きにする程度にしかありません」

僕「そうか、ドラゴンぇえええええ？」

美女さん「冗談です」ニコニコ

―美女さん…冗談に聞こえないから。

美女さん「魔法に関しては嗜む程度なので詳しくはわかりません。」

美女さん、この前「剣術以外は嗜む程度」って言ってたのに無理やり手篭めにしようとしたゴツイ男を3人素手で倒してたよね…？

美女さん「魔力を通すという感覚ではなく入れるという感覚なのでしょうか？」

僕「何が違うの？」

美女さん「そうですね。通すとなると流し込む感じをイメージするのですが、入れると言うのは」

とそこで目の前にある器を手に取り

美女さん「このように器に水を貯める感じなのではないでしょうか？」

器に水を注ぐ美女さん。

美女さん「一気に入れると水はこぼれてしまいます。最初は緩やかに次第に勢いをつけて入れます。そうしていっぱいになる前に止めるんですね。」

水をぎりぎりまで入れる。

美女さん「ただ水をいっぱいまで入れてしまうと少し揺れただけでこぼれてしまいます。ですのでＭＡＸまで入れるのではなくすこし余裕を持たせる感じで魔力を通せば壊れてしまう事も無くなるという事ではないのでしょうか？」

なるほど～

試しに横に転がる石を手に取り試してみる。

最初は少なめで徐々に満たしていく

石に魔力が通るのが感覚で分かる。

とすぐに石は割れてしまった。

妖精少女が割れた石を見て「おぉ～」と手をたたいていた（可愛い！）

美女さん「あら？だめでしたか？」

全然そんな事ありません。
いつもは一瞬で壊れていたものが少しでも魔力を通すことが出来たので
何となく感覚はつかめました。

魔王『だから何度もそういってたのに。これだから理解力の無い奴は』ブツブツ

―もうつっこまないよ？

―――――――――――

さらに数日。

途中、立ち寄った村が野獣による作物の被害で困っていたので退治の依頼を受ける。

妖精少女は危ないので村に居たらどうか？という村長の申し出は妖精族だとバレと困るので連れて行くことに。
美女さんがいたらある程度の脅威なんか目じゃないだろうしね。
野獣は村の東の森から来るらしい。
数名の村人と日中に東の森を探してみたがそれらしいのは見つからなかった。

夜は村長の家を間借りする事に。
野獣は深夜に現れるらしいので村人と協力して見張りに立つものの何事も無く朝を迎える。

翌日は東の森から少し南のエリアを探すもののやはり野獣は発見できず。
途中でゴブリンを発見したので倒す。

村人曰く今までこの森でゴブリンを見たことは無いらしい。
ゴブリンは群れで行動する。必ず近くに巣があるはずだ。

今まで見たことが無いということはまだ巣が出来たばかりだと思われるが、放置をすると数を増やし必ず村に被害が出るので早めに潰しておくことに。
足跡を辿っていくと崖に穴を掘った巣らしきものを発見。

森からこっそり伺うと巣の前で5匹のゴブリンと2匹の狼が争っていた。

村人に物音を立てないようにじっとしている様に指示を出す美女さん。

狼はゴブリンに傷を負わせているようだが劣勢のようだ。

それでも引かずにゴブリンに向かっていく。

一匹の狼がゴブリンの喉に噛み付く。

その狼に別のゴブリンが手にした木の棒をたたきつける。

その後も両者の戦闘は続きいたが数の勝るゴブリンが勝利を収めた。

しかし2匹の狼もただやられた訳ではなく、2匹のゴブリンを倒し生き残った3匹も満身創意の状態だった。

そこまで見て僕と美女さんが飛び出す。

驚いたゴブリンはこちらに向かおうとするものが2匹、残り一匹は逃げようとしていた。

正面にいるゴブリンが一匹向かってくるのが見える。

僕はのっそりとした動きに注意をしながら接近。

振りかぶった木の棒を持つ腕を切りつけた後にがら空きの体をな切り裂く。

美女さんを見るとあっという間に1匹のゴブリンを倒したいつもの笑顔で逃げるゴブリンを見ていた。

―あれ?何で逃がしたんだろう?

そう思ってると美女さんが村人を呼び寄せて指示を出す。

美女さん「数名私とついてきてください。ゴブリンの巣を潰します。」

美女さんはここがゴブリンの巣じゃないと判断したようだ。

美女さん「残りはここで他に居ないか確認作業をしてください」

僕は居残り組みだった。
まぁもし他にゴブリンが残っていた場合に村人だけだと厳しい、信頼されてると思っておこう。

美女さん「妖精少女をお願いします」ニコニコ

そういうと数人の村人を引き連れてゴブリンの後を追った。

ゴブリンと野獣が本当に死んでいるのか確認をすると狼にやられたゴブリンは2匹とも喉を食い破られて死んでいた。
僕と美女さんが倒した2匹も即死のようだ。
2匹の狼のうち1匹はすでに死んでいたが、もう一匹は辛うじて息

はしていた。
光を失いつつある目がそれでも僕を必死でにらんでいる。

魔王『ほう』

村人の話ではこの2匹が村を襲っていた野獣らしい。
村人は止めを刺して毛皮を剥ごうと話をしている。

魔王『トメロ』

―え?

魔王『あやつらを止めろ』

―毛皮を剥ぐことを?

とりあえず村人に止めを刺すことと毛皮を剥ぐことをやめるように伝える。
不満の声を上げるがどうにか納得をしてもらうことが出来た。
いつの間にか妖精少女が狼のそばに座って毛並みをなでていた。
血で自分の服が汚れる事は気にならないようだ。
そんな妖精少女を見ていた狼の目の光は弱っていき小さく鳴くと動かなくなった。

魔王『こやつらは戦士だ。戦士の身を汚すような事はするべきでは

ない』

―そういうものなの…かな。

狼の死体を埋める穴を掘らないとと思ったところで洞窟の中から小さな声が聞こえた。
見ると狼の子供が2匹、洞窟の入り口から飛び出した。
どうやらここは狼の巣でゴブリンから子供を守っていたらしい。
村人達が「狼だ」「子供だ」「まだ残っていた」と騒ぎ出す。
小さいうちに殺してしまおうという村人達に声がかかる。

妖精少女「この子たち殺しちゃうの？」

全員の目が妖精少女を見る。

妖精少女「殺しちゃうの？」

不安げに見上げてくる。

村人が「仕方ないんだよ」という風なことを説明するが納得されるわけもなく
妖精少女は2匹の子狼を抱き上げる。

妖精少女「かわいいそう」

どうしたものかと思ってるところに美女さんたちが戻ってくる。
どうやらゴブリンの巣があったようで、５匹ほどいたけど全部倒し巣を潰してきたらしい。
さすが美女さん。
子狼に関しては話を聞いた美女さんは少し首を傾げたが、妖精少女に「ちゃんと責任を持てますか？」と聞く。
頷く妖精少女を見て「私達が責任を持って連れて行くので任せて欲しい」と笑顔で村人に伝えた。
「村長に相談しないと」としどろもどろになる村人。
美人さんの笑顔つよ！

２匹の親狼を丁重に埋葬したいという魔王の意見を聞いた美女さんは狼の巣に２匹の遺体を入れて崩すのはどうかと提案してきた。
狼の巣が別の野獣の巣になる事もないし埋葬も出来るというのだ。

―力技だなぁ

魔王『戦士の身が汚されることの無いようになるなら問題は無い』

―いいんだ。

狼の巣に他に何もいない事を確認。巣はそれほど大きくも深くもな

かった。
親狼2匹の遺体を巣の奥に横たえた後、美女さんが洞窟の入り口上方に剣を走らせる。
それだけで入り口が崩れ埋まる。

魔王は小さな声で何かを呟いていた。
魔族に伝わる戦士を送る言葉らしい。

入り口は完全に埋まった。
洞窟全体を考えると中は空洞が在るかも知れないが、無理に掘り起こそうとしたら崩れて危険なのでもう使用されることは無いだろう。
子狼は妖精少女の腕の中で大人しくしている。
どうやら親狼の血の匂いが子狼を安心させているようだった。

村に戻って村長に狼の脅威がなくなった事とゴブリン退治を説明。
驚きの後に村長はゴブリン退治の謝礼が出せるほど蓄えが無いと申し訳なさそうに切り出した。
通常、ゴブリンの巣を潰す依頼となると規模にもよるが野獣退治の報酬の数倍もする。

僕「いえいえ。かまいません。我々は皆様が安心して暮らしていける事が最大の喜びです」キリッ

なんて事を僕が言えるわけも無く

美女さん「いえ。狼はゴブリンとの戦闘で果てました。我々はその後にゴブリンを倒しただけ過ぎませんので先のお約束の報酬でかまいません。ただその代わりと言ってはなんですが2匹の子狼は私どもにお任せください」

それでよろしいですね？と僕をみる美女さんに頷く。

―全く問題ないです。

村長も村人も僕達にすごい感謝をしていたけど、それよりも2匹の子狼について妖精少女が喜んでいたのがよかった。（可愛い！）

魔王『我の眷属として立派に教育してやろう』

得意げに2匹の子狼を見て言ってるけど、懐いてるのは妖精少女にだからね？

第４話　出会い

子狼が来て数日がたった。

順調に妖精少女に懐いているようで周りでじゃれあってる。
食事も妖精少女の手からなら食べるようだ。
最近の妖精少女はよく笑うようになったと思う。（可愛い！）
元々は良く笑う子だったのだろうけど怖い目にあって心を閉ざしてしまっていた。
子狼を助けて本当によかった。
ただその笑顔をまだ僕には向けてもらえてないけどね。

―さ、寂しくなんかないんだからね！

魔力の訓練はある程度の成果を見せつつある。
手当たり次第にそこらにある石や木の枝に魔力を通しているが、勝率は７割と言うところまで来た。

魔王『石程度で１００％じゃないというのはマダマダだな』

厳しいなぁとも思わないでもないけど妖精少女を危険な目に合わせる訳には行かない。

僕達は国境を越え新しい国に入った。
国境は兵士が多く物々しい感じだったが、特に何も言われなかった。

僕達の旅は特に問題は無く進んでいる。
たまにある野獣とのエンカウントは問題に含まれない。食糧補給になるしね。

2日目の晩に美女さんが「他の旅人などと会わなくなりました」と呟いていたのが印象に残った。
確かにここ数日、旅人も商人ともすれ違っていない。

ただそういう事もあるかな、という程度のものだった。

3日目の昼前に村を発見したので寄る。

近づくと至るところが壊れており廃村だとわかった。
村に入ると黒焦げた家などが見受けられる。
炭になった部分を見る限り燃えてある程度の日にちがたっているようだ。
壊されたり焼けたりしている家を見る限り野盗の仕業かもしれない。
野盗の5人や10人程度なら美女さん一人で大丈夫だと思うけど村が一つ潰れるような状況というのを鑑み、この場を離れたほうがいいという事になり廃村を後にする。

5日目の夕刻

争う声が聞こえて馬車を止める。

街道脇の森のほうから複数の人間が飛び出してきた。

どうやら大柄な人物に手を引かれた小柄な人物が複数人の人間に追

われているようだ。
追われているほうはどちらもフードを被っている為にどういう人物かは分からない。
相手はこちらに気がついたようで僕らと違うほうへ行こうとして小柄な人物が躓き転んでしまった為に後から追ってきた集団に追いつかれる。

「逃がすな！」「取り囲め！！」

大柄な人物は小柄な人物を庇う様に敵に剣を向ける。

―なんなんだ？

状況が良く分からない僕。

美女さん「いつでもいける準備をしてください。妖精少女は馬車に隠れていてくださいね。」

美女さんが小声で言ってくる。

追いかけ来たのは同じデザインの鎧をきた男が9人。
そのうちの一人が顎で合図を送ると2人が馬車に向けて走ってきた。
その様子を見た大柄な男がこちらへ「逃げろ！」と声を張り上げる

美女さん「2人こちらに来るようです。どうやら私達を害するつもりのようです。状況はわかりませんが仕方ありません。あの2人を助けます。タイミングを見計らって馬車から出て注意をひきつけてください。」

馬車に近づいた男に美女さんが「い、一体なんでしょう?」と怯えたような声を出す。

魔王『いつも笑顔の美女の怯えた声の顔ってどんなんだ?』

馬車で息を殺して隠れている僕に魔王の呟きが聞こえる。

―うわ~、どんな顔だろう?

緊張感溢れるシーンなのにもう僕は好奇心が一杯で仕方ない。
もう敵に発見されてもいいから見に行っちゃおうかな。
というものすごい誘惑に駆られながら我慢する。

鎧男「旅人か?」

美女さん「は、はい」

鎧男「女か・・・悪く思うな」

その声を聴いた瞬間に僕は馬車から飛び出す。
鎧2人はこちらを振り返り警戒をしようとしたがその隙に美女さんが2人を切り伏せていた。

―くそ！

魔王『残念ながら美女の顔は見えなかったな』

―本当に！じゃなくて！！

美女さん「行きます」

笑顔で僕に告げて走り出す美女さんに僕も続く。
囲まれていた人物は7人のうち1人を切り伏せていたが人を一人を庇って戦って居るために至る所から流血していた。
だがいまだ倒れることは無く6人を威嚇しながら隙をうかがっているようだ。
小柄な人物も剣を構えてはいるがあまり使えそうな感じではない。
周りを囲んでいる鎧のうち何人かがこちらに気がつき仲間に警告の

声を発する。

美女さん「助太刀します」

短く発した美女さんと僕は近くの鎧男にそれぞれ切りかかる。

大柄な男「・・・感謝する」

そういうと僕と剣を合わせている鎧男を後ろから切り伏せ小柄な人物の手を無理やり引き、僕と美女さんの間を抜けると小柄な人物を隠すように反転して鎧男に退治した。
先ほど大柄な男が切った1人と、一瞬で美女さんが1人を切り伏せていたので残りは4人。
4対3では劣勢と見たより男達のリーダーらしき人物が「引くぞ」というと全員背を向けて走り出した。

背を向ける一瞬の隙に美女さんが距離を詰めリーダーらしき鎧男の背中をばっさり。
その行動にぎょっとして1人の動きが止まった瞬間を見逃すことなくあっさりと切り伏せる美女さん。

―容赦ない。

残り2人は気がつかなかったのかどうか分からないがそのまま走っ

て逃げていった。

「ふぅ」と一息ついて剣の血のりを払う美女さん。
ただ鞘に収めることは無く剣を半身で隠すように立つ。

美女さん「状況が良く分からないのですが説明いただけますか？」
ニコニコ

大柄な男「あ、ああ・・・」

美女さんの笑顔に若干押され気味の大柄な男。
僕と美女さんがまだ抜き身なのを確認し自分の剣を収める。
それを見た美女さんが剣を収めるのを横目で見ながら僕も剣を収めた。
大柄な男はフードから顔を出すと若くきこえる声よりナイスなミドルだった。

大柄な男「まずは助け立ちして頂き感謝の念に耐えない」

美女さん「いえ、成り行きですから」

大柄な男「詳しい説明をしたいが時間が惜しい」

美女さん「戻ってきます？」

大柄な男「来る」

「ふむ」と笑顔で首を傾げる美女さん

美女さん「野盗じゃないですよね。」死体をチラリ

大柄な男「うむ。この国の騎士だ」

美女さん「巻き込まれました？」

大柄な男「すまない」

美女さん「ではまずはここを離れましょう。充てはありますか？」

大柄な男「距離はあるが・・・」

美女さん「説明してくださいね？」

あれ？

僕の良く分からないうちに話が進んでる。

魔王『脇役だから仕方あるまい』

何！その衝撃の事実！？

―――――――――

馬車に戻って妖精少女に大丈夫という事を伝える。
妖精少女を見た大柄な男は「こんな幼子が大事無くてよかった・・・」と呟いていたので案外いい人なのかも知れない。

自己紹介での僕達の関係は僕は貴族の３男で見聞を広げる旅をしている。
美女さんはその従者で妖精少女は旅の途中で出会った孤児で分け合って一緒に旅をしているという説明をした。
どちらかと言えば美女さんの従者が僕という感じだけど黙っておいた。
相手は大柄な男と子供と名乗のる。
御者は僕と大柄な男が勤め馬車の中に美女さんと妖精少女と子供が乗り込んみ大柄な男の指示により移動した。

馬車の中と外だが布一枚なので話す分にはあまり問題は無い。
妖精少女は少し子供のことに興味を引きながらも美女さんに引っ付いており子狼をひざの上に乗せている。
子供はフードを目深く被りひざを抱えているが妖精少女の手元の子狼を見ているようだ。

大柄な男「この国の現状はどこまでご存知で？」

美女さん「殆ど知りませんね。」

どうやらこの国は前王が崩御して第一王子が後を継ぐ予定だったが体感直前に暗殺されてしまったそうだ。
その後、病弱な第２王子と第３王子のどちらが王になるかで取り巻きに寄る争いが起こったが第２王子が病死（というが本当は不明）の為に第３王子が帝位についた。
しかし政は自分を支持した貴族に任せ贅の限りを尽くし、貴族も自分達の富と権力の為だけに政を行うようになり国が荒れていった。

第３王子即位１年後、今から約４ヶ月ほど前に密かに準備を進めていた第４王子と第２王女は、共に民衆の為に立ち上がるべくクーデターを起こすも裏切りに合い負けてしまう。
第４王子も第２王女も何とか逃げ出す事が出来たようが今は行方が知れず大柄な男と小柄な人物はクーデター加担者として追われている状況らしい。

大柄な男「我々は各地に隠れ力を貯めながら時期を待っている状況です。」

なるほどね～。物語によくあるパターンだ。

僕「じゃぁもしかしてそっちの小柄な人物が第2王女だったり」

まぁ子供と名乗ってたので明らかに違うけど。

何気ない気持ちで言った僕の冗談に大柄な男と子供がピクリと動く。

魔王『ほう』

美女さん「そうだと面白いですね。なんでそう思うんです？」

ん～僕の昔読んだ本ではどうだったかな？

僕「だってたった二人に正規の国の騎士が追っかけて来るんだよ。大げさな」

美女さん「でもクーデターの主要メンバーならありえるのでは？」

僕「うん。でも捕まえず殺そうとしたり目撃者を消そうとしたりするのは生きていて欲しくないけど騎士が殺害した事が噂になるのはまずい人物という事になる。」

美女さん「なるほど」

僕「大柄な男さんも自分の身を盾にしてでも子供を守っていた。屈強の戦士である大柄な男さんが明らかに弱いであろう子供をそこまでして守るとしたら、よほどの重要人物なんだろうしね」

美女さん「もしかしたら自分が巻き込んだ相手をたとえそれが誰であっても見殺しに出来ない性格なだけなのかもしれませんが？」

僕「そうなんだけどね。でももし途中で出会った見知らぬ子供だとしたら騎士がそこまで執拗に狙うかな？」

大柄な男「というと？」

馬車の空気が少し変わったことに気がつかずに僕は自分が読んだ物語の内容を話していた。

僕「だってもしただの子供なら大柄な男さんを殺した後に口封じでも何でもすればいいのに、騎士達は大柄な男さんではなく子供を優先的に執拗に狙っていたように見えたよ。」

大柄な男「もし仮にこの子供が重要人物だとして、何故王子ではなく王女なのだ？その理由は？」

僕「ん～あるにはあるけど・・・」

大柄な男「ぜひ聞いてみたいな」

僕「国の王子ともなると少しは剣術位は習っているはず。それにも関わらず剣を扱うのが不慣れな感じがした」

大柄な男「ふむ」

僕「それと手を引かれていて自分の走りが出来ないとはいえ走りなれていない感じがもう一つ」

大柄な男「・・・」

僕「でも一番の理由は・・・」

そこまで言ってちょっと馬鹿らしい理由過ぎるかな?と思い口を濁す

大柄な男「理由は?」

僕「え～っと・・・」

今まで自分が読んでた物語と照らし合わせてしたり顔で話していたことが急に恥ずかしくなる。

振り返って馬車のほうを見ると全員が僕を見つめていた。

子供ですらフードの奥から鋭い目を向けている。

ううぅ・・・女の子呼ばわりした事に怒っているのかな。

子供の目を見つめ「冗談だよ」という感じで笑いながら

僕「だって王子様もいいけど、どうせ助けるなら可憐な王女様のほうがうれしいから」

場の空気が死んだ。

見つめていた子供の目が大きく見開かれる。

―ああ、呆れられた・・・

馬車のガラガラという音だけが大きく聞こえる。

大柄な男「っぶわっはははははははっははは」

大柄な男が大笑いをしてくれる。
止まっていた空気が動き出す。
笑っていてくれてありがとうございます。助かりました。

魔王『鈍いのかそうでないのか・・・』

いつもは「うるさい」で片付けるけど空気を読めずしたり顔で読んだ物語と照らし合わせて妄想をしゃべってたのは自分なので今日は甘んじで受け取る。

魔王『やはり鈍いだけか』

―やっぱりうるさいよ。

何回も言わなくてもいいじゃないか。

魔王『やれやれ』

大柄な男「素晴らしい推理でした」

それだけ大笑いしていただければ幸いです。

大柄な男「どうでしょう?彼らなら信用できると私は思いますが」

と大柄な男が馬車の中の子供に話しかける。

子供「爺に任せる」

子供は僕を見つめた後に大柄な子供に向かって囁いた。

大柄な男　改め　爺「真にすばらしい推理でした。」

クエスチョンマークで一杯の僕に爺が言う。

大柄な男「私はこの国で騎士団団長を勤め上げた後に第2王女付きの近衛騎士隊長をしておりました。そしてあちらにいらっしゃるお方が・・・」

子供「自分で自己紹介をします」

そういいながら取り払ったフードの中から１０代の綺麗な少女が出ていた。
僕より少し上かな？

子供「あなたの仰るとおり、私はこの国の第２王女です。」

あまりの超展開に思考が尽いていけずにただ第４王女の目を見つめてしまう。

魔王『お前が予想した通りじゃないか』

―そうだけど！

美女さん「あらら。あまりの美しさに目を奪われているんですか？」

ただ見つめ続ける僕に美女さんの楽しそうな声がし第４王女が恥ずかしそうにつっと目線をそらす。

―違いますから！あまりの展開にフリーズしただけですから！！

無駄にあわあわする僕。
美女さんはもっと早くに気がついていたのかな？
もしかしたら最初からかも知れないと思ってしまう所が謎だよね。

魔王『最初からだろうな』

妖精少女は「当たった～すごい」と目を丸くして手をたたき僕を賞賛していた（可愛い！）
ちょっとほっこりした。

魔王『そればっかりだな』

―妖精少女故、致し方なし！

第４王女と爺は別の拠点にいる所を襲撃され逃げてきたて隠れながら落ち延びているたところ発見されてしまい、これまでかと思った時に僕たちに出会った。
これからの方針を聞くと

爺「出来れば姫にはこのまま一度国外に出たほうが安全なのだが・・・」

子供　改め　姫「民を見捨てることは出来ません！」

という姫の強い希望によりとりあえず信頼できる者の所へ向かう予定らしい。

爺「勝手で申し訳ありませんがその者の場所まで行って頂けないでしょうか？」

爺曰く、このまま国境へ向かっても先ほど逃げていった者たちが戻ってきて捕まるかもしれない。
もし関所に着いたとしても馬車の形などの手配書が回っている可能性が高いので信頼の置ける者の所まで行って頂いたら新たな馬車を用意させる。

悪くない申し出だけど問題はその人が本当に信頼できるのか？とう問題。
行ってみたのの敵が待ち伏せしていて捕まるというのは勘弁して欲しい。

爺「それは大丈夫です。奴は昔に私と一緒に騎士団にいた者ですが領地に戻った後も登城の度に姫に会いに来られてました。間違いなく姫の味方をしてくれる男です。」

姫「幼い頃は会うたびにお願いをして騎士の話をしてもらいました。」

懐かしそうに目を細める姫。

爺「あやつは頑固者です。上が変わった程度で姫への忠誠は変わらない男です。」

爺にも翁にも姫は孫のような存在なのかな？
チラリと見ると美人さんがいつも通り微笑んでいた。

僕「分かりました。その方の領地へ向かいましょう」

頷く僕に爺は腕を掴んで振り回しながら「ありがとう」と何度も言った。
美人さんは相変わらずの笑顔で、妖精少女はいつの間にか美人さんの膝枕で寝ている（可愛い！）
姫を見るとつっとすぐに目線をそらされてしまう。

―嫌われてしまったかな・・・

―そう言えば魔王自身も自分の国では王位を争っているのにはずなのに他の国の内乱に巻き込まれるなんてちょっと笑えるね。

魔王『そうだな・・・』遠い目

―なんか色々ごめん！

第5話　お兄ちゃん

街道を外れ森の中を移動していたが日が暮れ視界も悪くなったので野営をする。
追われている為に火をおこす様な事は出来ない為に干し肉でおなかを満たした。
夜の見張りは僕と美女さんと爺で2人交代で行う事に。
姫は丸一日走り回ったらしくすぐに疲れて寝てしまった。
妖精少女は子狼と一緒に寝ている。
一人で寝るときは毛布に丸まって団子のように寝るのは種族的な寝方なのか個人的な寝方なのか興味は付き無い。

美女さんとの見張りのときは「ついでに夜間戦闘の訓練しましょう」と言われ軽い気持ちで同意したら「じゃぁたまに投げるので避けてくださいね」と頭に小石を一杯ぶつけられた。
魔王の『鈍すぎだな』という声がうるさい。
爺と2人の時はたまに会話をする程度で特に何をするというわけでも無かったので魔力特訓をした。
早く魔力制御が出来るようになって妖精少女の首輪を外してあげたい。

翌朝、日が出る前には出発。
姫は自分一人寝入ってしまった事を恥じ入っていたが「疲れを癒し万全の体制を整えるのも旅では大事な事です」と笑顔で諭されていた。
御者は美女さんと爺が交代で行う。まだ僕はうまく出来ないので役に立てない。

昼前に一度馬を休ませたが日が沈むまで移動をし2日目の野営を行った。

見張りを行うと言う姫と休んでくださいという爺とで言い合いになった（と言っても爺は及び腰だった）けど姫の意思は変わらず今日は試しに行うことになってしまった。
さすがに姫を1人にカウントできるわけも無いので美女さんと同じ時間を担当する事になた。
その話を聞いていた妖精少女が「じゃあ私も」と言っていたが1刻もしないうちに寝てしまっていた。（可愛い！）

昨晩と同じように美女さんと一緒のときは小石を頭にぶつけられた。
姫は当初は少しの物音でも反応をしていたけどすぐに落ち着いた。
途中からは僕と美女さんを眺めていたが「投げてみます？」という美女さんの申し出には「え、いえ、いいです」と少し慌てていた。
爺との時も昨日と同じように魔力制御をした。

3日目の朝も同じく日が昇る前に出発する。
出発して数刻、森が開け小さな泉があったのでそこで早めの休憩を取る。
そこで今後の方針を話し合う事になった。

ここまで来ると馬車で移動すれば昼前には森を抜ける。
その後は草原を数刻走れば目的の館は見えてくるらしい。
ただ敵も翁を頼ることは予想しているはずで必ず兵を配備していると予想され、さすがに領地内にあからさまな兵を配置出来ないとは思うが馬車で突破するのはかなり難しいと思われる。

爺「姫たちにはこの場で待機してもらってこの先は私一人で向かおうと思います。」

その言葉に姫が声を荒げようとするのを爺が手で制す

爺「お聞きください。森を抜けた所の兵士もそうですが、もし館にたどり着いても一安心と言うわけではありません。」

翁は捕まり館に敵がいる可能性は0ではない。
なので爺が一人で館に向かい確かめた方がいい。
森を抜けてからでも爺の足で半日ちょっとあれば館に付く。
すぐに戻ってくれば1日ちょっとで戻ってくれるはず。

爺「ですのでもし1日半たって戻ってこない場合はすぐにこの場を放棄し逃げてください」

姫「!」

美女さん「もし逃げるとして、当ては?」

爺「・・・近くにはありません。もし逃げる場合は国境を越えて隣の国へ亡命してください。」

美女さん「隣国へ亡命して姫の身は安全なのですか?」

姫「隣国には第一王女のお姉さまが嫁いでおります。」

爺「あの方なら姫を悪くはしないでしょう」

方針は大体決まった。

魔王『またお主は何も言っていないな』

―悪かったね！

美女さん「話は分かりました。ただ幾つか提案があります」

爺「どういった内容でしょう」

美女さん「私も同行しましょう」

爺「いや、しかし」

美女さん「敵は姫様と爺の2人組みを探しています。もし発見された場合に爺のみだと姫様を探して森を捜索される危険性があります。」

僕「なるほど。そこで美女さんが同行して目くらましにするんだね。」

魔王『うまく話しに割り込んだな』ニヤリ

―うるさいよ！

美女さん「マントを被れば少々の身長差は誤魔化せるでしょう」

爺「しかしこの先は危険だ」

美女さん「私はこう見えても結構強いですよ？」

爺「いえ、それは最初に助太刀頂いた際に理解してますが」

姫を守って欲しいと爺の意見に美人さん「2人の方が生存率が上がります」と笑顔で押し切った。
出発は森を抜けるときに暗いほうが言いと言うことで日が落ちてからになった。
人は滅多に来ない場所らしいけど念のために泉から少し離れてぱっと見ても分からないように馬車に偽装を施す。
昼間での間に近くに危険な生き物が居ないかを探したが居ないようだった。

僕「美人さん」

美人さん「どうしました」

僕「1日ちょっととはいえ僕と妖精少女と姫だけになる状況を考えたら妖精少女の事は伝えた方がいいと思うんだけど」

少しはなれた所で姫と一緒にじゃれ合ってる子狼を一緒に見ている妖精少女を見る。
数日だけど妖精少女も姫に対してはあまり警戒心を抱いていないようだ。

魔王『お主よりは懐いているな』

―そんな気はしてたけど煩いよ！

美女さん「そうですね。お二人なら信頼できると思いますし、当分一緒に行動する事になりますので話して起きましょうか。爺はうすうす感じていたようですが」

―さすが年の功というやつなのかな。

美女さん「だからと言って魔王様の話はしませんので注意してくださいね」

―キヲツケマス

姫と爺に妖精少女の事を伝えると爺は納得がいった感じで頷いた。
姫は妖精少女が奴隷商人に捕まっていた話を聞いたときは少し悲しい顔をしていたが、話を聞き終わると笑顔になり美女さんの後ろに隠れていた妖精少女の頭を優しくなでてあげてた。

昼からは馬車の周りに簡単なトラップを仕掛ける。

とはいえ何かが近づいたら音が鳴るようなものと、足を取る程度のトラップではあったが何も無いよりはマシだった。
その後は日が暮れるまで順番で仮眠を取る事になった。

夕方に簡単な食事を取り一緒に取り、日が陰りだす頃に美女さんと爺が出発した。
爺は僕の手を取り「姫を頼みます」と頭を下げた。

――――――――――

魔王『そろそろ良いかもしれないな』

掌の石を眺めて魔王が言う。
やっと魔力の制御が出来るようになった。

魔王『だからと言ってまだまだだからな。これからも精進を怠るな』

―うん。うん！

妖精少女は昼寝をしたためいつもより遅くまで起きてるので僕は妖精少女を呼んだ。
姫と連れ立ってくる妖精少女。

僕は警戒されてます？

僕「魔力の制御がうまく出来るようになったので首輪が外せるよ」

妖精少女「ほんと？」

僕「うん。ただ僕が触るけど少しの間じっとしていてもらえるかな」

妖精少女（こくん）

僕「じゃぁこっちに来てもらえるかな」

音を立てずに近づいてくる妖精少女。

僕「顎を上に上げて」

僕の言われたとおり僕の前まで来て一生懸命顎を上げる。（可愛い！）

魔王『今なら何でも命令できるな』

―そうだn、しないからね！何を言うんだ！

魔王『緊張を紛らわそうと思っただけなのだが・・・』ドン引き

僕「じゃぁ少し我慢してね」

僕は妖精少女の首輪を両手で包む。傍から見たら少女の首を絞めてるという少し危ない図である。

包んだ掌から指輪に向かって魔力をゆっくり注ぐ。

薄く青く光る首輪に姫が息を呑む。

魔力の量を調節しながら魔力を注いでいると「パキッ」という音が聴覚でなく感覚で聞こえて首輪の明かりが消えた。

魔王『上出来だ。』

首輪の魔力を相殺することが出来た。

魔王『後は首輪を石のように砕いてしまえ』

―よし

再度少し魔力を込めると「ピシ」という音を立てて首輪にヒビが入った。

後は腕の力を使うまでも無く妖精少女の首から首輪が外れた。

僕「もう大丈夫だよ」

僕がそういうと一生懸命目を瞑って我慢していた妖精少女は目を開け自分の首に首輪が無いのを確認する。
そして首から首輪が無いのを確認すると目から涙が溢れ出した。
姫が後ろからそっと抱き寄せると姫にしがみついて声を出さずに無く。

―良かった。

少したって落ち着いた妖精少女は僕のほうに走ってきた。

僕「どうしたの？」

妖精少女「えっとね。ありがとう」

その一言で今までの苦労が全て吹っ飛ぶのを感じた。
妖精少女はまだ僕の前で何か言いたそうにしている。

妖精少女「ありがとう、お兄ちゃん」

―ぐは！ナニナニナニナニ！何なのこの可愛い生き物は！＃○＄％□＆

魔王『何語を話しているかわからん。落ち着け』

あまりの衝撃に新しい信仰に目覚めそうになる僕に魔王のツッコミが入るが、もちろん僕には届いてない。

「ふおおおぉぉぉぉぉ」と叫びそうになるのを我慢してたらこちらを見ている姫の存在を思い出す。

暗いから表情まで見えないけど微動だにしない。

―ちょっとドン引きしてる？

魔王『してるかもな』

一気に現実に帰ってきました。

妖精少女の頭をなでながら「どういたしまして」というと妖精少女はうれしそうに笑った。（可愛い！）

その後、妖精少女に魔法が使えるようになったけど実際に何を使えるのか聞いてみた。

妖精少女「隠れるのと風と水とお話できる」

魔王『ほう。精霊と話せるのか』

姫「精霊とお話が出来るなんて素敵ですね」

僕「今できる？」

そう聞くと「うん」と頷いた妖精少女は指を立ててくるくる回して
僕に指を向ける。
なんだ？とその様子を見ていた僕の首筋に風が流れる。

僕「びっくりした」

魔王『それほど強い精霊を呼べるわけでは無い様だな』

姫「風を起こせるのですか。水の妖精はどんなことが出来ますか？」

妖精少女「ん～水をゆらゆら揺らせる」

僕「風で何かを切り裂いたり水で攻撃したりは？」

妖精少女「出来ない」

姫「妖精族は争いを嫌うと聞きます。精霊をそのように使おうとは
思わないのでしょう」

魔王『そういうのはちゃんと契約を結ばないと無理だしな』

僕「それでもすごいなぁ」

誉められた妖精少女は「えへへ」と笑みを浮かべる（可愛い！）
姿消しも試してもらったが良く見たら全く消えるわけではなく薄っすらとは見えるようだ。

魔王『力が上がればもう少ししっかり消えるし、周りのものも姿を隠せるようになろう』

―すごいなぁ

その後も首輪が外れたうれしさでテンションの高い妖精少女は子狼と風の妖精で遊んでいたが急に眠ってしまった。

姫「疲れて眠ったようです」

僕「久々に魔力を使ったし仕方ないね」

・・・・・・

やばい！姫と2人きりって初めてだけど何を話していいかわからない！

沈黙が痛い。

魔王『適当に話せばよいではないか』

―そんな事言われても、元の世界ですら女の子となんて殆ど話さなかったから良く分からないよ！

魔王『情けない。仕方ないな、我が話すきっかけを作ってやろう。我の言うように話してみるが良い』

僕（魔王）「『寒くないか？』」

姫「え、はい」

僕（魔王）「『そうか。まだ夜は肌寒いから無理はするな』」

姫「そうですね」

僕（魔王）「『よければ我が暖めてやろう。苦しゅうない、ちk』このネタ前もやったからね！」

きょとんとする姫。

僕「あ、あははは、なんてね」

―魔王のばか～

姫「ふふ・・・」

―笑ってくれたぁぁぁぁぁ。

魔王『ほれみろ。うまくいった』

―もう魔王の手は借りないからね！

その後は途切れ途切れだけど会話は出来た。
姫と言うことで緊張したけど話してみたら普通の女の子で安心した。

魔王『普通の女の子とやらとも殆ど話をした事無いのであろうに』

―そうだけどさ！

話の内容は「王宮はどんな所」とか「いつもは何してるの」とか。
姫も「どんな所を旅してきたのか」や「どういう冒険をしてきたのか」を聞いてきた。
どんな所というのはそれほど記憶に無いので冒険についてはゴブリン退治の話をした。
こういう話は姫は向かないかなと思ったけど、ゴブリンとの対決の時には真剣な表情で食い入るように話を聞いてくれていた。

―ゴブリン退治の話で僕の活躍を5割り増しで語ったくらい大目に見てもらえるよね？

魔王『１０割は増していただろうに』

―うるさいよ。

―――――――――

夜の見張りにるいては美女さんが事前に「夜は若（僕の事）に任せて、翌朝に若が仮眠取る時にお願いしますね」と笑顔で言い含めていたので問題は無かった。

姫が眠って数刻、僕はいつもの日課の魔力制御の特訓をしていた。

―やっぱり一人で起きてるのはやっぱり寂しいなぁ

魔王『我が付き合っているではないか』

―そうだけどちょっと違うんだよね。

魔王『仕方あるまい・・・む？』

身を寄せて眠る姫と妖精少女を見る。
と、その傍らで寝ていた子狼が2匹とも急に身を起こし遠くを見る

―どうしたんだろう

魔王『何かくるぞ！』

―え？

魔王『かなりの数だ。戦闘の準備をしろ！』

僕は物音をさせないように急いで寝ている2人のところに行くと寝ている姫を揺すり起こす。

僕（姫、起きてください）

姫「え・・・」

僕（し！静かに。何者かが集団で近づいてきているようです）

はっと起きる姫。

僕（馬車の中に隠れていてください）

姫（私も戦います）

僕（いえ、妖精少女をお願いします）

カラン。音系トラップが静かな夜の森に響く。
僕は剣を抜き馬車を静かに下りる。

魔王『結構な数がいるな』

―追手かな

魔王『わからん』

相手は音系トラップの存在を知ると気配を消そうともせずに近づいてきた。
カラカラカラ。幾人かは音系トラップを踏んで音を鳴らしてしまうが気にしない。

―多い！

少なくとも面前に１０人以上いる。
全員が抜き身で警戒しながら近づいてくる。

謎の男「何者だ」

僕「そちらこそ何者だ」

震えそうな声を虚勢で何とか押しとどめる。

謎の男「何者だ」

僕「旅のものだ。そっちは野盗なのか？」

謎の男「嘘だな。旅人なら何故野獣避けの火を焚かない」

僕「寝ている間に消えてしまって」

魔王『囲まれたな』

謎の男「それも嘘だな。火を焚いた後はどこにも見当たらない」

―っ！

謎の男「本当の事を話さないようなら仕方ない」

周りの男が殺気立つ。

魔王『くるぞ！』

馬車を背に回りこまれないように気をつけながら対峙する。
謎の男の指示で1人の男が向かってくる。
振りかぶった剣を受け止める。
剣を絡め取られそうになるのを透かして流す。
体が泳いだ男の胴を切りつけようとした所、横から別の男に攻撃されそうになり断念して剣で受ける。
目の前の男を剣で押し返しすぐにもう一人の剣を受ける。
「ほう」と謎の男が一言呟く。

魔王『来るぞ！避けろ！！』

剣を受けて止まったままの視界の隅にもう一人が剣を振りかぶるのが見える。

―避けられない！

自分の体に迫り来る剣を睨み付ける事しか出来なかった。

第5話　お兄ちゃん（後書き）

9／21　「爺さん」→「爺」に修正。

第6話　美女

森から街道を伺うと歩哨がいた。
やはりここら一帯は警戒されているらしい。
数はそれほど多くは無いが月明かりの為に遠くまで見渡せる。
誰かが街道を横切るとしてもすぐに見られてしまうだろう。

横を見ると同行者が上を指した後に小さく「雲」と言った。
どうやら月に小さな雲がかかろうとしているらしく、少しでも暗くなった時に行こうというのだ。
ゆっくり流れる雲が月にかかろうとする直前に兵士が立ち止まってしまう。
目配せをすると相手は頷いて「兵が動いたら行って下さい」と森を引き返していった。

雲のお陰で辺りが暗くなった事により街道を抜けるのに好都合な状況にもかかわらず動けないことに焦燥感が募る自分の心を叱咤する。
屈みながら兵士を見ていると離れた場所で草が擦れる大きな音が聞こえた。
兵士がそちらに向かう。
全員の注意がそちらに向いて歩いていくのを確認すると音がならない様に飛び出し街道に向かって走り出した。

一心不乱に街道を横切るとそのまま背を低くし走り抜ける。
街道から少し離れた場所に背の高い草むらを発見しそこに隠れるように回り込みながら地面に伏せた。
弾む呼吸を押し殺すようにしながら街道を伺うと一人の兵士がこちらに明かりを向けていた。

明かりといっても紙などで作った丸い筒を倒したものに蝋燭を立てて居るだけのものなので、それほど遠くは照らせる訳ではない。だが隠れている立場からすると「もしかしたら衣服の一部が見える位置にあるかもしれない。何かが光に反射するかもしれない」という恐怖と、身じろぎするのは自殺行為だという理性に挟まれて時間の流れがいつもより遅く感じる。

少しの間あちこちを照らしていたが何も見つける事が出来ずに仲間の元に戻っていく。
小さく息を吐いた後に同行者はどうしたのか心配になった。
あの音はその同行者が起こした音である事は間違いない。
もしかしたらあの音のせいで見つかってしまうかもしれない。

身を伏せたまま兵士の声に必死に耳を傾ける。
何を言っているのか分からないが警戒しながら音が鳴った辺りに近づいているようだ。
見つからないでくれという思いに兵の声が微かに聞こえる。
必死で声を拾うと「ウサギ」「驚かせて」等の単語が聞こえてきて見つかっていないだろう事にほっとする。

月が出てきて少し明るくなる。
兵は移動を開始したがこれではまた街道が渡りにくくなってしまう。
同行者が街道を渡るのをどう手助けしようか考えていると近づいてくる影が見えた。
ぎょっとして見ると「お静かに」という風に指を口に立てた同行者がいつもの笑顔で近づいてきた。

爺（いつのまに？）

ニコニコ笑う美女殿に疑問をぶつけたいがここで声を上げるわけにも行かず指で街道から離れる方向を指す。
ニコリと笑った美女さんは街道のほうを向いて屈んだままソロソロと後ろに向かって進みだした。
街道に立つ人物が認識できない距離まで来ると「行きましょうか。方向は？」と笑顔で告げてきた。
指を刺すと「日が昇るまでにある程度進んでしまいましょう」と背を低くして走り出したので慌てて追いかけた。

街道から一切見えない場所に来るまで屈んで走っていたが、その後は普通に走り出した、
街道を渡ってからずっと走り続けている。
もともと急がないととは考えていたので不眠不休で向かうつもりだった。
ただ美女殿は女性なので体力なども考えて最終的には背負ってで進むつもりで出発した。

しかし実際はどうだろう。
先ほどからすでに3刻ほど走り続けている。
しかもペースが速い。
年老いたとはいえ体力ではそこらの若者に負けないと思っていたが、その自分が息を乱しているというのに、笑顔を絶やさず息もさほど上がっているようには見えない。
目の前に森に覆われた丘が見えてきた。
それを見た美女殿は「あそこで一旦休みましょう」と笑顔で告げて丘に向かって速度を落とさずに走っていった。

荒い息を抑えながら水を口に含む。
美女殿は「ふぅ」と汗を拭ってはいるが息を乱しているようには見えない。
空を見ると月が上に見えるので夜明けまでまだまだ時間はある。

美女殿「館まで後どれくらいありますか？」

爺「ここで3、4割というくらいでしょうか」

美女殿「このまま行けば今日中につけそうですね。」

爺「そうですな」

美女殿「まだ行けますか？」

美女殿が笑顔で聴いてくる。
今は刹那の時も惜しいのは確かである。
一度小さく深呼吸をした後に頷く。
それを見た美女殿は笑顔で「参りましょう」と言うと走り出した。

――――――――――

まだ日も変わっていないうちに館の前に立つ。
出来るだけ早くとは考えていたが翌朝までにはと思った距離を今日中に付くとは思わなかった。
途中、短い休憩や歩いたりしたものの予定の時間の半分以下くらいでついた。
息を整え館に近づく。
まだ敵か味方か分からない状態なので美女殿には隠れておいてもらう。
領地の門の前に来ると門の中に立っていた若い兵士が「用が無いなら立ち去れ」と言ってきた。
2人いるが残念ながら見知った顔ではない。
前に訪れたときには門番など居なかった。
時期が時期なので念のために警戒しているのか、敵の手に落ちて居るのかはわからない。

「領主の翁に面会したい」と伝えると「こんな時間に?」と不振がられてしまった。
用があるなら明日、日が昇ってから出直せと言ってくる。

―どうやら翁はまだ健在で敵の手は回ってないようだな。よかった。

知り合いだからこんな時間でも問題なく合ってくれると伝えても素気無く返される。
仕方ないので伝言だけでもお願いできないかと伝えても同じ返答だ。
せめて伝言さへ伝えてもらえれば何とか鳴るのに困ったなと思っていたら、館のほうからもう一人の兵士が歩いてきた。

兵士「どうした」

若い兵士「この老人が翁に合わせろとしつこくて」

兵士「こんな夜更けにか？」

近づいてくる兵士の顔をみて笑いがこみ上げるのが自分でもわかる。
彼は翁に付いて私に何度か合ったことがある。兵士隊長をしている男だ。
彼も私の顔に気が付いたようで若い兵士の一人に翁へ伝える用に指示を出すと「姫はご無事で？」と聴いてくる。
手短に状況ともう一人同行者が居る事を伝えると兵士隊長は「信頼が置ける者ですか？」と聴いてきた。
私が頷くと兵士隊長は門を一人分だけ開けるようにいう。
門が開いている間に美女殿を呼んだらいつの間にか門の影に隠れていたようで笑顔で出てきた。
兵士隊長はいきなり現れた気配に驚いているようだ。

顔には出さないが私もかなり驚いた。
美女殿は本当に得体の知れない人物である。

館に入ると翁が寝間着姿で剣だけもって現れた。

翁「姫は！」

爺「領地の境に見張りの兵が多かった為に領地には入らずに隠れて頂いておる」

翁「そうか！ではすぐに少数精鋭を送り姫の無事を確保しよう」

さすがと言うかなんというか、全て説明しなくても話が通じる。
急いで兵士達に集まるように指示を出し始めたがすぐに翁の息子の現領主が姿を現すのを見て兵への指示を引き継がせた。
姫の迎えをする兵士達の選抜や姫を乗せる為の馬車の用意を始める。

「それで姫と別れてからどれくらいの時間が―」と翁が言った所で１０代後半の若い男が現れる。

若い男「爺殿が来られたと聴いたが」

翁「来るのが遅い！もしこれが敵襲だったらどうする！！」

現れた若い男は現領主の長男で翁の孫になる。
立派な体格で武芸においては同年代では敵うものはそうそう居ないぐらいに秀でているとは翁に聴いていたが、さすが全身から自信が満ち溢れていい男である。
ただ近年はその事で慢心をして思慮に欠けると嘆いてはいたが。

領主長男「戦ならすぐに来ますよ」

翁「気構えがたらんと言ってるんだ！」

煩い爺だとばかりに肩をすくめる領主長男

領主長男「姫を迎えに行くのでしょう？」

翁「今、行くものを選んで準備させている」

領主長男「俺も行きますよ」

翁「お前はいかんでいい」

自分以外に適任が居るのか？と自信満々に言う領主長男
行く、行かなくていいのやり取りを見ていた美女殿が発言する。

美女殿「私も参りますので私の馬もご用意頂けますでしょうか？」

領主長男「なんだこの女は」

美女殿「若の従者の美女と申します。姫様と爺様には途中で出会い共に行動をしておりました。」

美女さんが礼節を持って自己紹介をするも領主長男は鼻で笑う。

領主長男「ふん、女子供は黙っていろ」

爺「美女殿になんて事を！」

領主長男「足手まといにしかならん」

客人に対する長男領主の無礼な物言いに翁が顔を真っ赤に怒鳴りつけようとした時

美女殿「翁様」

翁「孫の無礼、許してくれ」

美女殿「気にしてませんので。馬はご用意頂けますか？」ニコリ

翁「お主もいくのか？危険だぞ」

爺「美女殿は中々の手馴」

翁「ほう」

領主息子「ふざけるな！姫の救出を遠乗りか何かと勘違いしているのではないのか！？」

美女殿「領主息子様こそお城へのパレードと勘違いされておりませんか？」

領主息子「なんだと！」

笑顔の美女殿の台詞に領主息子が憤怒に染まる。

美女殿「姫様の救出が危険なことを貴方は理解していない」

領主息子「なんだと！」

美女殿「では貴方の考える救出方法を述べてください」

領主息子「何で貴様なんかに」

翁「面白い、言って見ろ。よければお前に指揮を取らす」

領主息子は「救出の指揮」という言葉を聴いて自身と期待を満ち溢れさせて言葉をつむぐ。

領主息子「兵を率いて姫の下へと駆けつけここまでご案内するだけだろう。途中、国王軍との戦闘も予想されるが街道に居る数はたかが知れている。向かってくれば蹴散らせばいい」

美女殿「貴方はその程度の理解で救出に出向くという」

笑顔の美女殿を中心に温度が若干変わった。

気配を察した兵士隊長がとっさに剣を抜こうとするのを翁が止める。

美女殿「貴方の蛮勇は周りを巻き込む」

領主長男「なんだと！」

美女殿「言い直しましょう。貴方の無知蒙昧が姫を殺す」

領主長男「知った風な口を！」

美女殿「正直にいいますと、この国の人間でも無い私は姫様がどうなろうが知ったことではありません。ただ若を危険にさらす状況となると見過ごせません」

笑顔の美女殿から発せられる凄みが少し増す。

真横にいる私は美女殿の気迫に一歩後退し柄に手をやるのを堪えるが、ここ数日の美女殿を見て感じた人柄からはかけ離れた物言いに繭を寄せる。

翁は「ほう」と再度声をもらし兵士隊長は驚きの顔を隠せない。

少し離れた場所で兵士の指揮を取っていた現領主と一部の兵がこちらを向く。

常人には気がつけずともひとかどの者なら気がつく程度の殺気。

それに気がつく者が何人か居ることに頼もしさを覚る。

―それを真正面に受けて動じない領主息子はよほどの大物か、それとも―

前者であれば良かったのだが様子を見る限りでは、何かを気がついてはいるが怒りが大きくて見逃してしまっているらしい。
翁もまだまだだという感じで肩を少し落とした。

領主息子「女と思って甘く見ておれば！国の大事を何と心得る！！」

美女殿「私の国ではありませんので巻き込まれてなければ知った事ではありません。」

領主息子「これが翁の客ではなく男なら決闘を申し込んだ上で切り伏せているところだ！」

無礼な態度は取っても客人に手を上げるのは不味いという理性は残っていたようだ。
だが沸騰寸前の所に美女殿は笑顔で火に油を注ぐ。

美女殿「あら？女に負けるのが怖くなりましたか？」

領主息子「なんだと！」

美女殿「井の蛙（かわず）に大海を教えてあげましょうと言っているんです」

領主息子「爺殿、貴方の連れですが教育がなっていない様なので指導を付けたいのですが、よろしいですか？」

怒りを殺しきれない様子で私に告げる領主息子。

チラリと見た美女殿はいつもの笑顔を浮かべていた。
剣を抜こうとする領主息子を止めようとする兵士隊長に「やらせておけ」と翁が含み笑いで言う。
どうやら領主息子程度では相手にならない事を読んでいるようだ。

爺「どうやらこの娘はお転婆で仕方が無い。よろしく頼みます」

領主息子「許しが出た。女だからと言って容赦はせん！腕の一本くらい覚悟しろよ！」

美女殿「殺すくらいがいいですよ？後で『女だから手を抜いた』とか言われても面倒ですし。時間もさほど掛けられませんので、さっさとお越しください。」

憤怒に染まった領主息子が振り下ろした剣を受け止める。

―片手で！

あの細腕にどれだけの力があるのか分からないが笑顔で片手で受け止めたのだ。

美女殿「あら？本気で来られるのではなかったのですか？」

決して今の一撃は気を抜いたものではなかった。
その台詞に腹を立てた領主息子は剣を両手で掴むと力任せに振り下ろした。
今度はそれを受け流す。

やはり片手で。

状態が流れて蹈鞴(たたら)を踏むがすぐに美女殿に向き直り両手で剣を振り下ろす。
それをまた片手で受け流し、蹈鞴を踏んでまた振り下ろす。
今度は流されても体が泳ぐ事無く何度も剣を打ち付け始める。
それを片手で左右に流していた美女殿は領主息子が打ち疲れた所を狙って剣を絡め取った。

剣が床に落ちる音がする。
館におる人間は全て、今起こった事に息を呑んでいた。
領主息子は決して油断しても女の細腕にいなされて剣を奪われるような腕ではない。

美女殿「もうお終いですか?」

領主息子自分の手から剣が無くなった事に呆然としていたが美女殿の言葉を聴いて「手が滑っただけだ!」と言い剣を拾いなおす。

美女殿「では今度は私から向かってもいいですか?」

領主息子「おう!女などには後れを取らん!」

それを聴いた美女さんは無造作に距離を詰める。
そして片手で無造作に鞭でも振るうように左右に剣を振るいだした。
その全てを領主息子は受け流しながら笑みを浮かべる。
今度は美女殿が疲れたところを剣を絡め取り、雪辱を晴らそうとでも思ったのだろうか。

領主息子「そこそこやる様だが所詮は女と言った所だな」

美女殿「あらあら。ではスピードを上げましょうか」

領主息子「む」

美女殿の剣を振るう速度が上がる。
領主息子は驚きながらも捌く。

美女殿「まさかこれ程度で終わりだと思ってませんよね？」

そう言うとさらに速度を上げた。
笑みは完全に消え必死の形相で剣を裁く領主息子。

美女殿「頑張りますね。ではもう少し上げましょう」

領主息子「っ！」

さらに速度が上がる。
何回かに一回の確立で裁ききれなくなってきている。

美女殿「頑張らないと死にますよ？」

さらに速度を上げる剣を前に元々裁ききれなくなっていた上に焦りと疲労で半数以上が体に迫る。
だがどの剣戟も体を傷つける事無く衣服だけを切り裂く。

どれだけの時間をそうしていただろうか。
実際はさほどの時間では無いが領主息子には永遠に感じただろう。
疲労で尻餅を付いた領主息子の目の前で剣を止める美女殿。
呆然と見上げる領主息子を見て一歩下がって剣を収める。

―まさかここまでの者とは

美女殿「貴方は私が言葉に込めた殺気を気付くことが出来なかった」

―最後まで息も切らさずとは

美女殿「私を女と思い侮り実力を見抜こうとしない浅慮が貴方を何度も殺しました。」

全身の服に付く傷1つ1つが本気なら死に繋がっていただろう。

美女殿「貴方一人が死ぬなら問題はありませんが、領主息子と言う立場ではそうは行きません」

美女殿はこれを伝える為にあのような態度を取ったと言うのか。

美女殿「貴方行動には兵士や領民の命が掛かってます。貴方の浅慮が彼らを殺す事もあるのです。」

領主息子は美女殿の笑顔から目が離せない。

美女殿「考える事を。聴くことを学んで下さい。目に見えるものだけに囚われず、他者の言葉にも耳を貸しその上で決して鵜呑みにせずに自分で判断できるよう」

領主息子「……」

美女殿「自分の損得だけじゃなく周りの状況を考慮して結果を予想しながら動けるようになれば、貴方はいずれ素晴らしい領主様となれるでしょう。」

翁がよく言ってくれたとうれしそうに「よく言ってくれた」何度も頷く。

美女殿「よき領主様になって民や兵を導けるよう、ご精進致して下さい。」

そう言うと「無礼を働き申し訳ありません」と笑顔で優雅に腰を折った。

第7話　救出

ゆっくりと笑顔を上げて姿勢を正す美女殿はまるで歌劇の一幕を切り取ったような雰囲気だった。
誰もがその姿に声を出せないで居ると翁が拍手をしながら美女殿に近づいた。

翁「素晴らしい腕だった。そしてよう言ってくれた」

美女殿は笑顔で軽く会釈する。
翁はまだ尻餅をついて呆然とする領主息子を見て言う。

翁「大海は知ったか？」

領主息子ははっと我に返ると立ち上がる。
色々思うところが在るのだろうがこの場から逃げ出さないだけの矜持はあるようだ。

翁「美女殿の言った意味は理解できたか？」

領主息子「…はい」

翁「美女殿に敗れた事に屈辱を感じておるのか？」

領主息子「……いえ」

心中は穏やかではないが怒りを露にするほど愚かではないようだ。

翁「もしその事を恥に思うおなら間違っている。恥に思うべきは見た目に騙されて本質を見抜くことが出来なかった己を恥じよ」

領主息子「…」

翁「まぁワシもこのような見目麗しい女子が居たら騙されてしまうだろうがな」

豪快に笑いながら「どうじゃ？うちの孫の嫁に」と翁が言うのを「私には仕えるべき主がいますので」と笑顔で流す。

翁「蛙（かわず）は大海を知った。ならやるべき事は分かるな？」

領主息子「はい」

領主息子の目に恥を飲み込み変わろうとする強い意思が宿る。
今の気持ちを忘れずに邁進すれば将来が楽しみだ。

領主息子「美女殿、数々の無礼お詫び申し上げる」

美女殿「私のほうこそ差し出がましい事を申しました」

領主息子「いえ。目が覚めました。貴方の言うとおりでした」

気持ちを入れ替え生まれ変わった領主息子にはもう美女殿を見下したりする気持ちは無く、まるで師事すべき師を見るような眼差しになっている。

周りの兵士達も同じような目で美女殿を見ていた。

―というより教祖とか神を見るようだな

同じ事を思っていたのか翁は私を見た後に繭を少し上げ「まるで宗教じゃな」と呟いた。

もしかしたら新しい宗教がここに生まれたのかもしれない。

翁「さて準備と選抜はどこまで進んでおる」

現領主に声を掛けるとはっとしながらも「ほぼ終わっております。もう出れます」と言った。

現領主も例外では無かったようだ。

選ばれたのは兵士隊長を含めた３０人。

街道付近まで進み、一部の人数で姫を救出する。

残りのメンバーはもし敵に発見された時のための護衛要員である。

爺「翁が行かないとは予想外だな」

翁「本当は行きたいがワシもしなければならない事があるからな」

爺「ほう？」

翁「ワシらだけでは数が足りん。集めねばならん」

爺「大丈夫か？」

翁「幾人か前から連絡を取ってる信頼できる者達がいる。連絡を取れば２０００くらいは集まろう」

時間を掛ければ領民などからも兵を募れば一領主でも１０００を越える兵を集めることが出来るだろう。

だが兵は何も常時金がかかる。

領主が抱える専属の兵士となると普通は５０名から多くて２００程しかいない。

少ないところは１０数名という小規模領主もいる。

中には一声掛ければ５０００以上を集める大領主もいるが、それは自分の一門の領主や貴族の私兵を集めてであり、個人で数千もの兵を持つ領主は居ない。

王宮だけは別格で幾つかの騎士団等を抱え、全部集まれば万を越えるかもしれない。

翁の領主は国境に面しているが隣接国とは第一王女が嫁ぐぐらいの良好な関係が築かれているのでそれほどの兵数は居ない。

それでも有事の際は最前線となる為に３５０名の騎士を召抱えてお

り、武具なども豊富に揃えている。
数十年前、まだ隣国と緊張感にあった時は最大で６００名近く居たらしい。

翁「皆、今の国のありように心を痛めているものばかりだ。必ず呼応してくれる」

国の混乱を憂いている者は意外と多い。
先のクーデターの時も手は貸さなかったがクーデターが旨くいけばいいと思っていた者も居ただろう。間に合わなかっただけの者も居たかもしれない。
その後の国の荒れように危機感を抱いいる者も多いはずだ。。
このまま内部からの腐敗を止めないと内外部両方からこの国は死んでしまうだろう。
その事を理解している者達が手を貸し手くれたら今度こそいけるかもしれない。

翁「領主息子よ。今のお主なら何故お主が選ばれないか分かるか」

領主息子「はい」

翁「そうか。反論は無いな」

領主息子「はい」

翁は満足に頷くと美女殿に振りかえる。

翁「お願いがあるのだが」

美女殿「出来る程度の事でしたら」

翁「領主息子を連れて行ってもらえんだろうか」

姫「わかりました」

領主息子が驚きの顔で美女殿を見る。

翁「感謝する。領主息子よ」

領主息子「はい」

翁「美女殿に付いて色々学べ。盗めるものは何でも盗んでこい」

領主息子「はい！」

翁「美女殿、よろしく頼む」

翁は軽く頭を下げそう言うと、自分も他の領主に連絡を付る為に動き出した。

―――――――――

王女救出部隊が集まった。
よく見ると美女殿のさっきの反応した者は殆どおり、全部で３０名だった。
「指揮をお願いします」という兵士隊長が私に言ってくるのを首を「私より適任者がいる」振って否定し横を見る。。
兵士隊長も美女殿を見た。

爺「お願いできますか？」

美女殿「他の人がいいと思うのですが」

領主息子「貴方なら依存は無い」

「困りました」とさほど困った風でもなく呟く美女殿に他の兵士達も頷く。

―やはり信仰に近いな

爺「他のものも依存は無い様だし。頼みます」

美女殿「では、やれるだけだけやってみます」

館を出る前に地図で姫たちの居る場所とその近くの街道を確認すると作戦を話し出した。
日が昇ると街道を抜けにくくなってしまう為、ここからは時間の勝負だ。

美女殿「まず１０名の騎士がこちら（地図上で目的地と９０度方向が違う方向）へ出発してもらいます。」

爺「この館も監視されてると？」

美女殿「２人か3人は居るでしょうね。１刻ほど走ったら2人一組に分かれて４方バラバラに分かれてここ（目的地の街道から少し離れた場所にある林）へ向かってください。もし追われている人がいたら数刻ほど走った後に大回りをしてこの館に帰還してください。指揮は兵士隊長様お願いします。」

兵士隊長「様はいりません。了解しました」

美女殿「次は少ししして１５名と馬車に出てもらいます。方向は最初の１０名と逆の方へ行ってください。１刻ほど進んだら適当な場所に隠れてください。指揮は爺様お願いします。」

爺「わかった」

美女殿「隠れる場所は周りの開けた場所にある小さな茂みなどがいいですね。少ししたら１０名はそのまま先へ進み最初のメンバーと同じように半刻ほどで２人一組で散ってください。」

爺「馬車は？」

美女殿「馬車は場合によっては邪魔になるので無理には連れて行きません。１０名が出発して半刻たったら馬車と共に目的地と別の方に移動し３刻後に大回りで館に戻ってください。」

美女殿「領主息子様と最後のメンバーは半刻後に私と共に目的地方向へ向かいます。１刻ほど進んで追われてそうなら国境方面に方向転換して途中で同じように２人一組で分かれ、後は同じやり方で。全員の目的地はここ（街道から半刻ほどの距離）です」

美女殿が指差した場所を確認し全員が頷いた。

美女殿「鶏鳴の始め（１時頃）に集まりをを見て街道を越えるメンバーを決めます。遅れた人はここに待機になるので頑張って時間までに集まってください。」

時間との勝負である。

美女殿「皆さんお願いしますね」

笑顔で告げる美女殿に皆は敬礼した後、行動を始めた。

一組目の部隊が館を出た。少し待って私達も出発する。
馬車を無理が無い程度に急がせながら一直線に走る。
半刻進むも適した場所が見当たらすにもう少し進む事になった。
途中、開けた場所にある小さな林を見つけ入る。
追われているかは今の状況では分からない。
５名を選び追手に十分に気をつけるよう言い馬車を任せて先を急ぐ。

２刻ほどして最初の手はず通りに２人一組に分かれる。
追手の気配は無いようなので目的地へ向かって向かった。

目的地の林に着く。
美女殿と領主息子と兵士隊長はすでに着いており、他の幾人かの兵と共にいた。
１０名ほどが目的地に付いているようだ。
その後も兵がぱらぱらと集まりだし鶏鳴前までに全員が揃った。
迎えに行くのは美女殿、私、領主息子と兵２名。
兵士隊長には「日が昇りだしても戻らない場合や発見された場合は館に戻るように」と伝え、この場を指揮してもらうことになった。

徒歩（かち）で街道に向かう。
未だに数名の歩哨が居るが闇が濃くなったお陰で見つからずに街道は渡れそうである。

美女殿が街道の向こうにある小さな岩を指差す。
あそこに行けと言う事らしい。
歩哨の位置を確認し、私が先に行く。
出来るだけ低く音を立てないように走り岩の後ろに隠れる。
すぐにもう人一人の兵士が来た。
岩は小さく2人が隠れるがやっとなので兵に奥の森へ隠れるようにいうと音を立てずに移動する。
次の兵も同じように伝え領主息子も森へと消えたのを確認して私も森へ隠れる。
奥へと伝えると領主息子は「美女殿は？」という顔をしたがすぐ後ろに美女殿が居て驚きの声を上げそうになる。

街道から十分離れてから走り出す。
もうすぐ目的地という場所で美女殿が皆に姿勢を低くして下がるように合図をする。
少し戻った所で美女殿に話を聞く。

爺（どうしました？）

姫（知らない兵が居ます）

爺（！！）

姫（姫と若が無事なのか分かりませんが数が多いようです）

領主息子と兵は無言でどうするかの判断を待っている。

姫（結構の数が居そうですが、とりあえず様子を見てまいります。）

「少し待っててください」というと美女殿は気配を消して目的地の方へと向かった。

第8話　少年

僕を切りつけようとしていた男が何かに弾かれたように転ぶ。

妖精少女「お兄ちゃんを助ける！」

仲間が急に転んだことに意識が行った相手の剣を押し戻しそちらをみると
妖精少女が馬車から身を乗り出し指を突き出していた。

僕「隠れてるんだ！」

魔王『もう遅い！』

妖精少女に走り寄ろうとした所、別の男に妨害されてしまう。

―このままでは妖精少女が！

姫「私が守ります！」

妖精少女の前に庇うように立ち懸命に剣を掲げる姫。
２匹の子狼も健気に２人の前に立ち威嚇をする。

―だめだ！

この集団は普通の野盗なんか足元に及ばないほどの使い手だ！
姫では手も足も出ないうちに殺されてしまう！！

揺れる剣先を懸命に敵に向ける姫。

―だめだだめだ！

目の前の敵に阻まれ2人に届かない。
姫ににじり寄る男達。

―このままでは守れない。どうすれば！

魔王「後ろから来るぞ」

自分の身すら守れない。

姫「私が相手になります！」

懸命に震える声で叫ぶ姫の声がより一層僕を焦らす。

―何か手は！

魔王『後ろからもくるぞ！』

姫に切りかかろうとする男が見える。
僕は無我夢中で鍔迫り合いをしている相手を力任せに押した。
すっるとバターでも切るような感触で相手の剣が2つに切れる。
あまりの事に驚く相手の男をそのまま押し倒し姫に向かって走る。

―間に合わない！！

謎の男「待て！！」

その一言に全ての男が動きを止める。
良く分からないがその隙に姫の前に躍り出た僕は剣を突き出した。

謎の男「もしかしてその声は第2王女様では！？」

黙っている僕達を無視して謎の男は剣をしまうと跪く。
すると周りの男達も剣を収め跪いた。
根元から折れた剣を突きつけた僕は何がなんだか分からずにキョトンとする。

姫「貴方達は？」

謎の男「私は第４王子直属の騎士隊長です。」

信用して大丈夫かな?と姫を見ると頷いた。

姫「確かにあの顔は第４王子と一緒にいる所を何回か見たことがあります。」

騎士隊長「姫とは知らずご無礼を働いた事をお許しください」

姫「このような暗闇の中では仕方ありません。誰も―」

と周りを見渡して負傷者が居ないことを確認し

姫「誰も怪我をしなくて幸いでした」

しっかりと話す姫を見てさっき僕と話していた普通の女の子が遠くへ行ってしまったように感じた。

―ちょっと寂しいな

と思ってたら姫が震える手で僕の手をそっと握ってきた。

見知った顔だったとしても先ほどの恐怖は中々消えないのかも知れ

ない。
僕も何も言わずに姫の手を握り返した。

魔王『いい所すまんが、何時まで折れた剣を突き出してるのだ？』

―べ、別に忘れていた訳じゃないんだからね！

―――――――――――

謎の集団は第４王子直属の騎士団らしい。

騎士団長「爺はどちらに？」

姫「翁の所へ支援を要請に行きました。」

騎士団長「お一人でですか？」

姫「いえ手馴れたものが一人、一緒に向かいました。」

騎士団長「そうですか。ああそうだ、まずは我々の陣営へお越しください」

その申し出に僕を握る姫の掌に力が入る。

魔王『用心しろ』

―どういうこと？

魔王『顔見知りだとしても敵である可能性はぬぐえない』

―第４王子付きの騎士団長なのに。

魔王『脅されたり敵に降ったりしているかもしれない。』

―そんな事が。

魔王『ありえない事ではない。相手の話に乗らず様子をみろ』

力が入る姫の手を優しく「大丈夫だよ」と伝える為に優しく握る。

伝わったかは分からないけど。

僕「いいでしょうか？」

騎士団長「何か？」

僕は騎士団長に自己紹介をする。
とある地方の貴族の三男で見聞を広める為に旅をしている。
妖精少女の正体は羽が隠されておらず精霊魔法を使ったのを目撃されているので隠しようが無く、旅の途中で出会って一緒に旅をするようになった僕の妹のような存在と説明。
そして爺と共に向かったのは僕の従者であることを伝えた。

僕「僕達は爺達が戻るまでここを離れる訳にはいきません」

騎士団長「それは何時頃戻られる予定なんでしょう？」

僕「一昨日の夜に出ましたので早ければそろそろ戻ってくるかと」

僕の嘘に姫の掌が震える。
もし相手が敵に通じている場合はこの事を聞いたときに何かの反応が見られるだろう。
出来るだけ警戒していない風を装いつつ周りの騎士も注意深く観察する。

騎士団長「分かりました。では我々も合流して待ちましょう」

騎士団長は少し考えるそぶりを見せるもすぐに頷いて周りの騎士達に指示を出す。

魔王『まだ安全と決まったわけじゃない。油断はするな。』

―わかった。

慌しく一人の騎士が森の奥へ走って行く。
周りに注意を払いながら姫に小声で話しかけ知り「合いでも敵になっている可能性もあるので気を抜かないように」と伝えるとすぐに小さく頷き返してきた。
その可能性を姫も考えていたようだ。頭がいいなぁ。
僕は折れた剣を鞘に戻し姫の剣と交換してもらう。
そうしていると騎士団長が近づいてきたのを感じた2人は僕の近くに寄ってくる。
妖精少女は服のすそを、姫は剣の交換に離していた手を握ってくる。

騎士団長「すぐに我々の仲間が参ります」

―相手は友好的な感じだがもし敵ならこれ以上増える前に逃げたほうがいいのかな?

警戒心を露にした僕達を見て騎士団長が肩をすくめる。

騎士団長「安心してください。私達は味方です。」

魔王『まだ信用は出来ない』

騎士団長「といっても今のような敵の多い状況では難しいかもしれませんが、これからこられる方にお会いになれば信頼していただけると信じております。」

―この流れからしたら第４王子か。それとも別の信頼できる人物か？

魔王『捕まえた美女と爺を目の前にして降伏を強制してきたりな』

―なんでそんな怖いことばかり思いつくの。

魔王『魔王だからな』

―確かに！

魔王『ただ、そういう最悪の状況も想像できないと様々な対処法は思いつかない』

―魔王がまじめなことを言ってる。

魔王『我はいつも真剣だ』

―――――――――――

少しすると数人の人物が僕達の馬車に近づいてきた。
その人物をみた姫はハッと息を呑む。

姫「第４王子！」

大人に囲まれた相手は少年だった。

魔王『ほう、あれが』

―僕と同じくらいの年だね

魔王『だが威厳は奴のほうが数段上だな』

―悪かったね。

第４王子と僕は互いに自己紹介をする。
どうやら先ほど走っていった騎士にある程度話は聞いていたようで、
妖精少女を見ても驚くことなく微笑んでいた。
その笑みはどこと無く姫に似ている。

王子「姫姉さまを助けて下さったそうで、お礼を申し上げます」

僕「い、いえ」しどろもどろ

王子「君もありがとうね」

妖精少女にも礼を言う。
王女の後ろから王子を眺め「うん」と呟く妖精少女。
どっちが守られてるのか分からない。

姫「よくご無事で―」

王子「姫姉さまこそ」

お互いに今までの状況を話す。

王子は裏切りの事実を知り姫の救出へ向かうも間に合わず、逆に敵の前面におびき寄せられ追い詰められて逃げ落ちる結果となったらしい。
何とか騎士団長を含む２０名ほどの騎士と逃げ切ることが出来き身を隠しながらか信頼出来そうな領主の館を極秘裏に回っていたらしく、翁の所に向かう途中だったようだ。

姫は急な裏切りで背後から攻撃を受け動揺している所を敵に攻撃され挟撃の形となり軍は瓦解。
逃げ延びて山の麓に拠点を構え仲間達と時期を探っていた所、居場所がばれてしまい攻撃を受けた。
みんなは姫の脱出の時間を稼ぐ為に敵と奮闘をし、その間に爺と２人で脱出した。
その後は一時撒いたと思った敵兵に見つかり追いかけられている所

で僕達に出会ったらしい。

お互いの話が終わった後に爺がもうすぐ戻ると言うのは嘘で、早くても明日の夜けぐらいだと説明する。
それを聞いた騎士団長は「あの場合は当然でしょうな」と僕の嘘に頷いてくれた。

戻ってくるまで丸1日あるということで騎士達は野営の準備を始めた。
とはいえ天幕などがある訳でもない。
人数も居ることだし見張りも十分つけると言うことで火が2つほど焚かれた。

小さな光を見た姫がほっと息を吐く。

王子「見張りは騎士達が交代で行いますので今日はゆっくりお休みください。」

姫「ありがとう」

王子「ただ我々より信頼のおける人物が居るようですが」

王子は未だに繋いだままの僕と姫の手を見て笑顔で言う。
それを聞いて繋いだままだったのに気が付いたのかぱっと手を話で俯く姫。ちょっと残念。
僕は気が付いていたけど手を離すのが惜しくて黙ってただけなんだ

けどね。
と、あいた僕と姫の手を掴み「私も繋ぐ」と言う妖精少女（可愛い！）

王子「暖かい飲み物を用意させますのでどうぞ火のそばへ」

笑顔の王子に促され焚き火へと歩みを進めた。

――――――――――

姫と妖精少女は女性と言うことで馬車で寝る事になった。
僕は馬車の横で剣を振りながら一人考える。

―まさか第４王子と出会うとはね。

魔王『確かに低い確率ではあったが同じ相手を目指しているなら必然と言えよう』

―でもこんな幸運があるなってまるで物語みたい

魔王『だがそういう幸運にも恵まれているからそこ何かを成し遂げることが出来るんだ。だからそこ後に語り継がれるのだろうがな。』

―確かに

剣を振ってると騎士団長が近づいてきた。

騎士団長「鍛錬ですか」

僕「はい」

騎士団長「剣は誰に教わったのですか？」

僕「従者です。今、爺と共に行っている」

騎士団長「さぞお強い男性なのでしょうね」

―あれ？美人さんは女性だって言わなかったっけ？

魔王『言ってないな。面白いし黙っておこう』

騎士団長「よければお相手いただけませんか？」

僕「あ、はい」

別の事に気を取られていた僕はつい返事をしてしまった。
さすがに妖精少女と姫が寝ている横で剣をぶつけるわけにも行かず
少し離れた場所で向かい合う。

騎士団長「闇夜の戦闘経験は？」

僕「少しだけ」

騎士団長「そうですか。では軽く流しましょうか」

騎士団長は軽く剣を構えると僕に笑いかけた。

魔王『いきなり来るぞ。下がるなよ』

―え？

魔王のつまらなそうな一言に聞き返そうとした瞬間に騎士団長は一気に距離を詰める。
僕は魔王の「下がるな」という一言を信じてすぐに前に出る。
前に出た僕に軽く歯を動かした騎士団長は剣を振り下ろしてくれる。
それに剣を合わせながら押しつぶそうとする騎士団長の力に負けないように押し返す。
ふと「力押しだけでは引かれたときに体が泳いで危ないですよ」という笑顔の美女さんの言葉が浮かび力を少し緩める。
急に僕が力を緩めた事に体が流れそうになりながらも力の方向を変えて僕を突き飛ばそうとする騎士団長。

その力を流しつつ互いの体の位置を入れ替える。
彼我の距離はどちらかが一歩踏み出せば剣が届く。

―待つ必要は無い！

僕は一歩踏み出し剣を振るう。
僕の剣を弾いて切りかかりそれを剣で受け流し再度剣を振い、弾かれ、流され、避け、受けられる。
互いの剣が何度も何度も重なり合う。
互いの剣が弾かれた瞬間に距離をとる。
気合を貯め再度飛び込もうとした時

王子「そこまで！」

声に動きが止まる。
見ると王子と姫と妖精少女がそばまで来て見ていた。

―あれ？寝ていたんじゃ？

魔王『近くであれだけ騒がしければ冬眠中の獣でも飛び起きるだろう』

―そんなに煩かった？

一歩引いて剣を収める騎士団長を見て僕も剣を収める。

王子「素晴らしい剣術ですね」

僕「いえ、ありがとうございます」テレ

騎士団長「いえ、騎士団にもそこまで使えるのは中々いません」

王子「これほどの使い手がいたとは」

騎士団長「彼に剣を教えている従者殿はさらにお強いらしい」

王子「なんと！」

僕を囲んで褒め称える王子と騎士団長。

―誉められ慣れてないのでもう勘弁してください。

魔王『これぐらいでいい気になるな。』

―その毒舌の所為だからだからね！

周りで見ていた騎士にも解散が告げられる。

どうやら見張り以外の者は僕達の仕合を見ていたらしい。

ものすごく恥ずかしい。

騎士団長「騎士の剣を押すだけで2つにしましたが、あれは？」

―魔力の事は言っても大丈夫かな？

魔王『それくらいならかまわんだろう。珍しいとはいえ人族でも出来る奴はいる』

僕「剣に魔力を通して切れ味を増やしました」

騎士団団長「魔法剣士なのですか！」

僕「いえ、そんなすごいものではなりません。」

持ち上げられるのが照れくさくて頭をかく。

妖精少女が「お兄ちゃん強かったね」と膝に抱きついてきた（可愛い！）

姫は少し離れたところで見ていたが僕と目が合うと「そろそろ寝ましょう」と妖精少女を呼んで手を引いて行ってしまった。

―嫌われてしまったかな

魔王『…なぜそう思う？』

―目を合わされるとそらされるし、近くに行くと身を強張らせるし

魔王『そう思うならそうなのではないのか』

―そっか。。。

凹んでる僕に魔王の「やれやれ」という雰囲気が伝わってくる。
呆れなくてもいいじゃないか。

―少しくらい仲良く出来たらいいな

魔王『ソウカ。ガンバレ』

―ありがとう魔王

滅多に無いあまりにも優しい言葉に勇気付けられる。
激しい運動で乱れた呼吸は戻りつつある。
目を瞑って馬車に寄りかかる。火照った体に夜風が涼しい。

―美女さんと爺は無事かな。

そう思ったときに騒然とした音が聞こえた。
すぐに駆け寄ってくる王子と騎士隊長。

騎士団長「見張りをしていた兵が人影を見たようです」

僕「敵ですか?」

騎士団長「分かりません。ただ用心は必要です」

緊張した瞬間、周りの兵が剣を抜いた。
一人の人物が歩いてくる。

美女さん「ただいま戻りました」

僕「美女さん！」

周りの兵は緊張を解かないものの笑顔で悠然と歩く美女さんに困惑している。

騎士団長「お知り合いですか？」

僕「爺さんと一緒に行った人です。こんなに早く何かありましたか？」

美女さん「無事戻ってきました。爺様と他の兵も居ます」

僕「もう行って返ってきたの！？」

明日の夜になるんじゃなかったの？とい疑問に笑顔で返す。
手短に王子と騎士隊長に挨拶をすると「とりあえず皆さんを呼びますね」と言い騎士隊長と数名の騎士を連れて森の奥へ消えていった。

第9話　溜息

合流した爺は王子を見るとすぐに腰を折り「よくぞご無事で」と涙を流さんばかりに喜んだ。
一緒に来た領主息子という人と2人の兵も膝を折る。
姫も起きたらしく、半分寝ぼけた妖精少女の手を引いて現れた。

首輪が無い事と羽を隠していない事をみた美女さんは何も言わなかったがある程度察したようだ。
姫にも長い礼を尽くそうとしていた領主息子は「時間は余りありませんよ」という美女さんの一言に短い礼をして共に後ろに下がった。
すぐに情報交換をする。

とりあえず翁の方は話がついて何人かの信頼できる人物に連絡を取ってくれているらしい。
街道には歩哨が居る為に兵を待機させ一部の兵で来たらしい。
王子の方も幾人かの領主と話は付けており翁を頼ろうとしていた矢先に僕達に出会ったという事を伝える。

王子「姫姉さまと爺はこのまま翁の元に向かってもらった方がいいと思う」

姫「王子はどうするのですか？」

王子「僕は話を取り付けている領主の下へ行き、姫と翁が立ち上がるのに呼応して兵を挙げます」

姫「一緒に翁の所へは？」

騎士団長「兵が集まらないうちに一箇所に集まるのは危険です。」

爺「王子が話を付けている領主というのはどこですか？」

騎士団長「こことここと―」

地図に丸と三角を付けていく指揮団長。

騎士団長「丸が協力を必ず得れる領主。三角が兵は出せないが国王側には付かないと約束を取り付けれた領主です」

王子「三角は状況によっては兵を出すでしょう」

爺「丸の兵を集めると１５００と言ったところですか。」

騎士団長「２０００近くはいくかと。三角は１０００を越えないといった所ですね」

領主息子「翁も２０００は集めると申しておりました」

爺「合わせて４０００集まるかどうかという所か。後はどれだけ味方に付くかだが」

僕「敵はどれくらいの数が居るんですか？」

王子「近衛騎士団１０００名、白の騎士団２５００名、赤の騎士団２０００名、黒の騎士団４０００名、それに国政を掌握している有

力貴族の一門とその取り巻きが１００００名で合計２００００といった所ですか。」

魔王『ものすごい物量差だな』

騎士団長「それに王宮に頭を垂れる者達が数千といったところですね。」

美女さん「多いですね」

騎士団長「そうですね。周りの領主を取り込んで増強しないと厳しいですね」

僕「一つ質問があるんですがいいですか?」

手を上げた僕にみんなが注目する。

王子「どうぞ」

僕「何で3つの騎士団で兵数に差があるんですか?」

王子「黒の騎士団は先のクーデター後に新設されました」

騎士団長「我らを裏切った褒美でのし上がったヤツが騎士団長に任命されてたんです」

騎士団長が苦々しく言う。

美女さんは僕を笑顔で見つめてる。

僕「人物像は？」

王子「有力貴族達に迎合する小物ですね。」

姫「私も何回か合ったことがありますが、纏わり付くような嫌な視線を送る人でした。」

騎士団長「大事な場面で自分の出世の為に王子と姫を裏切った忠義の欠片も無い屑です」

僕「嫌な奴なんだね。ごめん。話を逸らしましたね」

本当におぞましい事を思い出すように言う姫に「嫌な事を思い出させてごめんね」と言うと姫は少し微笑んで「たいしたことはありません」と言った。
それに安心して僕は騎士団長に先を促す。

騎士団長「ヤツは有力貴族に取り入り有力貴族と反発気味だった白赤両騎士団長を幽閉して両騎士団の兵を自分の騎士団に組み込んだのです。」

僕「それで黒だけ数が多いんですね。今の白赤の騎士団はそれで誰がまとめているの？」

爺「白赤両騎士団の団長に自分の子飼いの者を置いているそうです。」

僕「不満が多いだろうね」

騎士団長「素晴らしい両騎士団長を幽閉して、あのような能力が無いヤツラが上に立ってるという状況に怒りを感じている者は多いでしょう」

僕「じゃぁ何で誰も不満を言わないの？」

騎士団長「言えば自分は投獄されるのが目に見えてますからね」

僕「なるほどね」

―これは案外しけるかもしれない？

僕「兵を挙げるとしてすぐに騎士団が来ると思う？」

騎士団長「私ならここ（王都までの間にある大砦を指差す）に騎士団を配置しますね。ここは王都へ行く兵を止める事が出来ます。」

僕「なるほど」

騎士団長「そうして周りの領主に呼びかけて兵を集めながら敵が来るのを待ち受けます。

爺「定石じゃな」

魔王『つまらん手だ』

―なら魔王ならどうするんだ？

魔王『大砦まで行きまわりの領主から兵を徴収する』

―一緒じゃないか

魔王『その後は大砦の防衛兵を残して全力で敵を蹂躙する！待つなど好かぬ！！』

―なるほどね

僕「黒の騎士団長の人間性を考慮に入れてどう動くと思う？」

王子と騎士団長と爺が考え込む。

爺「いくらあ奴が愚かでもこの大砦の重要性は理解できるだろうから大砦までは来るな。」

王子「小心者なので３つの騎士団全部を全部連れてくるでしょうね」

僕「小心者なんですね。じゃあ８５００を連れて来たとして、半分以下の約４０００の兵に対して篭ってしまうかな？」

騎士団長「小心者ですからね。その大人数でも篭って出てこないでしょう」

王子「多分出てこないでしょうね」

僕「本当にそうかな？」

王子「といいますと？」

僕「４０００と半分の上にその軍隊には王子と姫がいるんだよ？」

僕の言葉に王子と爺と騎士団長の三人が思案する顔になる。

僕「２人を捕らえるなり仕留めるなりしたらものすごい武勲だよね。そんな武勲を虚栄心の塊の人が頬って置くかな？半分以下の兵数だよ？」

爺「確かにそれは出て来ざるを得ないですな」

王子「それでも自分を危険にさらすような真似はしないんじゃないかな？」

騎士団「白赤合わせて４５００、近隣の領主を合わせてこれを使って来るでしょうね」

僕「自分の５５００は出さない」

騎士団長「出しません。自分の騎士団は傷つけないようにし、両騎士団で取った武勲を自分の手柄にしようとします。」

爺「いっそ両騎士団の数を減らして、いずれ自分の騎士団に吸収して１つにしようとか考えるじゃろうな」

僕「なら都合がいいね」

笑う僕に「どういう事だ？」とみんなが首を傾げる。

僕「相手が両騎士団を出してくれるんだから取り込もう」

ぽかんとする一同。
美女さんだけ相変わらずの笑顔だけど。

僕「両騎士団は騎士団長を幽閉されて怒りを覚えているからね」

騎士団長「その騎士団長の命を盾にされているので、こちらに靡く事はありませんよ」

僕「別に僕らと共に戦ってもらう必要は無いですよ」

王子「どういう事でしょう？」

僕「両騎士団の今のトップは騎士団に受け入れられていないと思います」

王子「そうですね」

僕「なのでその2人を倒して残りの騎士団には傍観に徹してもらいましょう」

王子「は？」

僕「王宮は騎士団長の命を盾に取っていますよね」

爺「そうですな」

僕「実際に処刑すると思いますか？」

騎士団長「もし両騎士団が裏切ればするでしょう」

僕「今のままだと出来ませんよ」

爺「どういうことですかな？」

僕「今は両騎士団で４５００、黒の騎士団の一部もあわせると５００以上の兵が両騎士団を慕ってます。その状況で処刑すれば、それだけの兵を敵に回すということです」

僕の台詞に感心する王子と爺と騎士団長。
姫がじっとこっちを見ている事に緊張する。
美女さんが微笑んで見ているのは僕を査定しているようでもっと落ち着かない。

魔王『美女は確実にそうだな』

―だよね！

僕「ですので敵に回れば処刑されますが、戦闘放棄なら処刑しよう

が無いんです。」

王子「なるほど！黒の騎士団も奴の子飼いは１００程度で他は元々両騎士団の騎士。それが傍観を決めたら勝機はあります！」

―それだけしか子飼いが居ないの！？

魔王『張子の虎だな』

僕「とりあえず当面は２つの騎士団をおびき出す方法を考えましょう。あまり大砦に近ければこちらが危ういのですが、適度の距離でいい場所はありますか？」

騎士団長「大砦から馬で半日ほどの距離に小砦があります。大砦を取れない状況では拠点にするに適した場所はここですね。」

僕「爺、翁の場所から小砦までかかる時間は？」

爺「そうですな。朝から向かって１日といった所ですか。翌日には小砦につくでしょう。ただ翁もまだ兵を集めて居ないと思いますので集めるのに２日見て３日ですかな」

僕「王子が兵を集めて着く時間は？」

騎士団長「今から向かって兵を集めるのに３日。小砦まで２日で５日目には付けるかと」

僕「小砦の兵数は？」

騎士団長「２００という所でしょう」

僕「近隣領主が小砦を守る可能性は？」

爺「あっても５００には届かないでしょうから、全体で７００といった所ですね」

僕「王宮から騎士団が小砦に来るまでの時間は？」

王子「翁が兵を集めているのが伝わるのに１日。出陣の準備などがあるので先発隊で数百ほどが飛ばして到着に半日。本陣が大砦に来るのは３日後くらいですね。」

僕「爺。一日で落とせますか？」

爺「厳しいですが出来るでしょう」

僕「翁の兵力でどうにか先に小砦を落としておくので、ここで合流しましょう」

王子「はい」

僕「ではその後の方針はあった時にきめましょう」

そう言うとみんな慌しく動き出した。

「ほう」と息を吐くと姫と目が合った。

調子に乗って話していた事に恥ずかしくなって照れ笑いを浮かべると「そんなことはありません」と言ってくれた。

姫「本来なら関係ないのに一生懸命考えて下さってありがとうございます」

僕「いえ、気にしないで下さい。」

姫「何もお返しできませんが、この国が平和になった時は出来る限りの事をします」

深々と頭を下げる姫に困惑する。
そこまで大した事を考えてるわけじゃないのに！
一生懸命な姫を少しでも助けたいと思っただけなのにそういう事を言われてあせった僕はつい口を滑らせた。

僕「じゃぁ僕は姫と仲良くなりたいです」

姫「え？」

―何をいってるんだ、僕は！

僕「えっと、一国の姫に対して大それた事ですが、僕は姫と仲良くなりたいんです」

魔王『一応、我も一国の王子ではあるんだがな』

―確かにそうだった！

姫「えっと、あの―」

僕「妖精少女とかとは笑っているのに僕とは目を合わせてくれない

のが悲しくて。こういう形で言うのはどうかなとも思うんですが、出来れば仲良くできたらなぁ…とか思ってみたりして」

あせって取り繕うとして口を滑らせまくった僕の台詞は尻窄(しりつぼ)みになる。

―何を口走ってるんだ～～～～

姫「嫌ってなど、その、あの、私も緊張してしまって…」

僕「え？」

姫「あの、よ、よろしくお願いします、」

僕「本当ですか？やった～」

魔王『まさに、大　逆　転　！』

―なにそれ？

魔王『わからん。何となく言わねばいかぬ雰囲気だったのだ』

うれしさに姫の手を掴んで握手をすると姫は「あ、あの、準備がありますので」と顔を真っ赤にして走っていってしまった。

恥ずかしいといってたし、手を繋ぐのはいきなりだったかな？

魔王『まさかあそこであぁ来るとは。鈍いと思っていたがやるな』

―まさか僕もあんな事を言ってしまうとは思わなかったよ

魔王『まぁ結果的には良かったのではないか』

―そうだね。友達になりたいとずっと思ってたし

魔王『は？』

―出来れば仲良く話せる位に友達になりたいよね

魔王『…姫の気持ちを確かめたのではないのか？』

―そんなつもりは無かったけどね。結果的に僕の事を嫌ってないって分かってよかった。

魔王『やはりお前はダメだ』

―え？何で？

魔王『いや、逆にすごいよお主は』

―まぁ僕自信も姫と旨く仲良くなれてすごいと思うし信じられないよ。

魔王がため息をつく。

最近増えてない？

心配事でもあるのかと思ってよくよく考えたら、魔王の国も後継者争いで大変だったのを思い出した。

―早くここの問題を片付けて妖精少女を送ったら魔王の国の事も考えようね

魔王『そうだな』

そういうと僕も急いで準備を始めた。

第１０話　気迫

姫が街道を越えた瞬間につんのめる。
静かな夜に小さな音が響く。
それは小さな音に関わらず意外と響き歩哨の耳に届いたのかこちらに歩いてくる姿が遠く見える。
後ろを走っていた僕は姫に覆いかぶさり「静かに、動かないで」と小さく言う。
今居る場所は街道から見えるか見えないか微妙な場所。
もしかしたら見付からないかもしれない。
足音が近づいてくる。
ちょっと離れた場所に立ち止まり周りを見ている。
早く立ち去れと思ったときに「ん?」と一人が呟いた。
明かりがこちらに向けられている。
「どうした」と言う声に「あれが気になって」と近づいてくる足音。

―見付かった

姫に「このまま」と言うと足跡に集中する。
近づく足跡。柄に手を掛ける。
相手が近づいて覗き込む気配がした瞬間にぱっと起き上がり相手を切り裂く。
近くに居たもう一人も剣を抜こうとする前に切り伏せて周りを見る。
１０歩ほど先に2人。
一人が抜刀してこちらに向かう後ろでもう一人が笛を取り出し吹こうとする。
あれを吹かれると周りから兵が集まってくるだろう。

ナイフを投げようとするも一人が向かって来たので剣を避けれすれ違いざまに切り裂きそのまま走る。

―間に合わない！

そう思ったときに背後に美女さんが立ち笛を咥えた兵の首を一瞬で捻じ曲げた。

笛の音は「ひょ」と微かに鳴ったが近くの僕でも聞こえるかどうかだったので周りに知られる事は無いだろう。

すぐにみんなが集まってきた。

妖精少女は街道を越えた先の草むらから顔を覗かせている（可愛い！）

その場で待っているように言われたようだ。

美女さんが皆に兵に死体を移動するように指示する。

僕も一人運ぼうとするのを爺は「私が」と死体を担ぎ「姫をお願いします」と言われる。

震えている姫に「大丈夫ですか？」と声を掛けると「私のせいで見付かって―」

僕「姫、立てますか？」

姫「みんなが危ない目に―」

僕「姫」

震える姫。よほど怖かったのだろう。

ここで優しい言葉でも掛けられたらいいんだけど、こういう経験が全く無い僕には出来そうにも無い。
姫の方を揺する

僕「大丈夫です。問題ありません」

反応が無い姫の顔を両手で掴み多少強引に掴み顔を覗き込む。

僕「聞こえてますか？」

姫「ッ！」

僕「他の兵に知られる前に対応できました。まだ大丈夫です。」

「殺した」という言葉は避ける。

僕「ただここに居ると他の兵に見付かります」

動かない姫に僕は心を鬼にして言い捨てる。

僕「これ位で怯えないで下さい。今までも多くの人が犠牲になりました。これからもっと血が流れます。知り合いの血も！それでも貴方は毅然としなければならない立場なんです！！」

姫は目を大きく見開き同様に揺れる。

僕「僕（たち）が貴方を（友達として）支えます。貴方は一人ではない。だから辛くとも負けずに前に進んでください。」

姫が驚きに目を開き強い意志が宿る。
その顔は高揚している。

―元気が出て良かった！

魔王『…わざとだよな？』

―もちろん発破をかけてやる気を起こしてもらう作戦だよ

魔王『もう聴かん』

―何だというんだ。

立ち上がる姫に手を貸す。

死体は街道から外れた草むらに隠した。
美女さんが街道上の争った後や落ちているものを処分して近づいてくる。
「日が昇るくらいまでは時間が稼げると思います。急ぎましょう」

そういうと他の兵の待機する場所に向かって走りだす。
待機している兵はすぐ近くに居た。
美女殿が手早く馬を受け取る。

―馬なんか乗れませんけど！

とか言える感じでもなく馬を渡される。

魔王『私は乗れて居たんだ。その体を持つお主も乗れる』

―そうなんだ！よし！

他の人のやり方を見て同じように乗ってみる。

―乗れた！

魔王『本当に乗れたのか！』

―ぇ？

魔王『まさか本当に乗れるとは』

―言い切ったくせに確信なかったの？

魔王『まぁ美女の訓練で体が動くようになって来たからな。元々体が覚えている事が出来だしても可笑しくないとは思っていた』

『結果良ければ、だ』と笑う魔王に馬の操作を簡単に習う。
ちょっと歩かせて方向転換して止まる。
軽くその場で駆け足で回る。

―いけるかな？

魔王『走り出したら後は馬のリズムに合わせろ』

―できるかな

と爺が「姫を乗せてください」と僕の所に姫とくる。
2人乗りはしたこと無いし（本当は乗るのも初めて）だし「そういうのは爺とか美女さんの方がいいのでは？」と聞くと、美女さんは妖精少女を乗せているし爺は敵の追手があった場合に指揮を取るので姫を乗せられないと言う。
では別の兵にと言うと「おいそれと姫の体を若い男に触れさていいと思うんですか！」と怒られた。

―僕も若いんだけど

とりあえず他に姫を乗せる相手は居ないらしい。
「僕でいいですか？」と聞くと姫は頷いたので手を持って引き上げ

る。
爺が後ろから足を支えて何とか馬に横乗りじゃなく跨った。
―あれ？後ろにのるんじゃ？
魔王『これから飛ばすのに後ろに乗ったら振るい落とされるかも知れんだろう』
―そういうものか
なんかこんなに密着したらどきどきするな、いや今は非常時そんな事を考えたらでもいい匂いがする様な―
出発の号令が聞こえ美女さんを先頭に走り出す。
僕も「行きますね」と姫に声を掛けて出発する。
意外といけそうかも、とか思っていたら周りがどんどんスピードを上げていく。
姫が前で馬の揺れに体を揺らしていたので片手で肩を掴む。
片手で姫を支えながら操作は難しかったのでそのまま僕に背を預けるように誘導し腕をおなかに通して固定する。
姫が何か言ってるけど風の音でよく聞こえないが多分、馬の速度に驚いているんだろう。
どうにか安定しそのまま領主の館まで休みなしで走り通した。
―――――――――――

昼遅くになってやっと目を覚ます。
疲れと久々のベッドと言う事もありぐっすり寝てしまった。
明け方に着いた僕達は翁と現領主に面会した。
簡単な自己紹介を行うと「お主が美女殿の主か」とまじまじと見られた。
妖精少女の事も正直に話すと「妖精族を見ると幸運が訪れると言われておる。縁起がいいな」と翁が笑った。
どういう言い伝えなのか気になって後で聞いたら「嘘じゃ。ああでも言っておったら妖精少女を蔑ろにする奴はおらんじゃろう」と翁は豪快に笑った。
このおじいさんすごい。

王子に会った事を伝えると翁はものすごく喜んだ。
王子たちの計画を聞いて頷いていた翁と現領主は「騎士団を篭絡する作戦」の発案者が僕だと知って「さすが美女殿の主となるほどの人物だ」と感心していた。

―なんでこんなに美女さんの評価高いの!?確かに色々出来てすごい人ではあるけど!

魔王『一回、しかも短時間しか会っていない筈なのに何があったんだろうな』

美女さんの謎がまた一つ増えた。

他の領主達の伝令は全部送ったらしく早いものは戻ってきているらしい。
すぐに兵を準備してこちらへ向かうようなので昼ごろには集まりだす、と言う。
塀を出す領主達に再度、２日後の朝に出発するのでそれに間に合わないようならまた連絡をくれるように早馬を飛ばす。
行き先は念のためにまだ伝えない。

まずは休息を取ろうという話になり、僕達は部屋を宛がわれ久々のベッドで眠った。

そうして起きた？時前（１５時頃）に話は戻るのである。
と言っても「何がる」と言うわけではない。
やる事が無かったのでいつもは寝る前に行う美女さんの剣術指南を受けていただけだ。

美女殿に中庭で剣術指南を受けていたらいつの間にか人が集まってきた。
姫もどこからか用意された椅子に座り、妖精少女を膝に乗せて見ている。
爺や翁や現領主の他まで警備以外の全員が来てるんじゃないだろう

か。
なんかものすごくやりにくい。
「いろいろな人と剣を合わせるのはいい事です」という美女さんの同じく見に来ていた領主息子と手合わせをする事になった。

美女さんの開始の合図でお互いに間合いを詰める。
領主息子さんは見た目とは裏腹に力任せな攻撃をお行う事は無く、細かい剣捌きを見せてくる。
しかし一つ一つの剣に重さが無いためにそれほどの脅威ではない為に、剣を捌きつつ隙をうかがう。
こちらの隙を見てぱっと離れた領主息子は納得いかないという感じで何回か件を振った後に「もう一度お願いする」と剣を構えた。
剣を構えながら様子の変化に今回は間合いを詰めずに様子を見る。
剣を構えていた領主息子がじりじりと間合いを詰める。
と一気に間合いを詰めたかと思うと先ほどより大降りで剣を振ってきた。
受けようとして剣の重さに受けから流しに変える。
急に変えたせいで少し体制を崩しそうになる所に相手の剣が迫る。
それを流しながら体制を立て直す。
剣質が変わった事へで戸惑ったが3合4合と合わせる内にこちらが本来のスタイルだと気がつく。
このままでは押し負けるのを待つだけだ。
どうにか手を出したいが相手の剣が重く次の一手が出せない。

魔王『気迫を出せ』

答える事も出来ずに剣を弾く僕に魔王が言う

魔王『手が出せないなら気迫を出せ』

どういうことか分からず防戦一方になる。

魔王『手が出なくても相手の急所や隙がある場所に一瞬だけ切るという気迫を出せ。場所は見なくていい』

どういうことか分からないが言われたとおりにする。
だからなんなのだと言う感じで特に何があるというわけでの無く、
防戦一方の僕。

魔王『気概が足りない。手合わせだと思うな。相手を殺す気でいけ』

と言われてもよく分からない。
領主息子の攻撃に後ろに下がりそうになる

魔王『相手をにくい奴だと思え！撤けたら妖精少女や姫がひどい目に合わされてしまう相手だと思ってやってみろ！』

捌くのが辛くなりつつある。

魔王『お前がやられたら2人はどうなるかな。普通に殺される程度なら良いが、妖精少女はまた奴隷になって首輪生活かもな。』

もし追うなったらと思うと血の気が引く思いがする。

魔王『姫は確実に陵辱されるだろうな。もしかしたら妖精少女もされるかも知れん。妖精族は珍しいからな。歪んだ趣味を持つ奴もいるだろう。』

もしそうなったらと思ったら怒りがわき、歪んだ趣味を持つ奴という言葉で怒りが一気に冷める。

―そうなったら殺す

魔王『お前が負けたらそうなるかもな』

―なる前に殺す！

剣が捌き切れずに引きそうになる所と半歩踏み込む。
相手は剣の間合いを乱され半歩下がる。
少し剣が乱れた時を狙って気迫を畳み込む。
場所は逆手の首筋。
下がりながらも剣を振っていた領主息子が一瞬何かに反応しかけつつ剣を繰り出す。

捌きながら別の場所を切る！」という気迫を送ると一瞬そこに意識を取られるようで動きが遅れる。

―次はやる！

振り下ろした剣を捌いたときに相手の「剣を持つ手首を切り落とす！」という気迫を打ち込むと相手が手を引い瞬間に前に出る。
それを察して後ろに引く相手を逃がさないようにさらに前を出て剣を突き出す。
相手がさらに後ろに逃げようとするがこちらの手が早い。
相手の胴に剣先が刺し「そこまで！」

美女さんの声に剣を止める。
そこで相手が妖精少女と姫を狙う変態ではなく領主息子だと思い出す。
僕が剣を胴に突き刺そうとし、領主息子は剣をなぎ払おうと構えている所で止まっていた。
どうやら僕の一手の方が先に届く状態である。

魔王『のめり込み過ぎだがいい気迫だった。怒りではなくアレが出来るようになれ』

剣を引いて収めるとお互いに礼をすると大きくため息をつく。
「さすが美女殿の主だ。」と領主息子が握手を求めてくる。
だから美女さんは一体何をいたんだろう。

美女さん「中々の気迫でした。相手に押し負けず前に出たのも良かったです。ただ全ての剣を流すのは良くないですね。何手か受け止めるべき瞬間がありましたが捌くのに必死で見逃してしまってます。ああいう時に受けて押し返すなりして相手の体制を崩しに掛からないとダメですよ」

美女さんの聞きながら先ほどの戦いを思い返す。
確かに全て捌くと変化が無く防戦一方になってしまうかもしれない。
でもどこら辺が受ける時だったのかは分からないという事は余裕が足りないという事だろう。

美女さん「全体を通して中々良かったですね」

僕「ありがとうございます」

領主息子「もしよければ私にもお教え願えないだろうか」

その申し出に美女さんは笑顔で首を振る。

美女さん「私は弟子などは取りません」

領主息子「しかし若には教えているでは無いですか？」

美女さん「若は弟子ではなく主です。そして私は若の従者です。」

領主息子「どういう事ですか？」

美女さん「従者として若の身の安全を守るのが使命です。ですので若には自分でも身を守れるように私の出来る事をお伝えしてるだけです」

領主息子「弟子ではないと？」

美女さん「違いますね」

領主息子「どうしてもダメですか？」

美女さん「良い悪いじゃなく、弟子を取るような事は無いだけです」

周りにも聞こえるように言っていた美女さんは「だた―」と言う。

「若の相手をして頂けるのは助かります―」と。

美女さん「私達がいる間の話だけですけどね」

その後も旅に着いて来るというのは無しですよ、と美女さんは微笑む。

領主息子はあきらめた風で「よろしくお願いします」と一例をして下がった。

その後、兵士隊長も「お願いします」と言ってきた。

美女さんの「では時間を区切って仕合ましょう」という一言で手合わせする事が決まった。
兵士隊長は領主息子と同じくらいか少し上の腕前のようで全然反撃の糸口が掴めないまま美女さんの終了の合図を聞いた。
かなり息も上がり疲労もたまっている。
にも拘らずその後も爺と現領主と兵士3人まで相手にさせられた。
5人程相手をして1勝、2敗、2引き分け。
爺に負け現領主は引き分け。
意外と強い現領主。

兵士隊長に「こちらで水が浴びれますよ」と井戸に案内してもらい上着を脱ぎ捨て水を浴びる。
ついでに喉を潤すと冷たい水が気持ちい。
一息ついて空を見ると真っ赤に染まっていた。

―こんな夕日は初めて見た

元の世界ではもちろん、こっちに着てからも夕日をゆっくり見るのは初めてだ。
着たばかりの事は夜の静けさと星の多さにビックリしたがすぐに飽きてしまった。
「どうしたんですか?」と声を掛けられ振り返ると姫が居た。

僕「空が真っ赤なので見てました」

姫も夕日を見上げる。

僕「燃えるような夕焼けというのはこういう事を言うんですね」

姫「そうですね」

初めての感動に姫が相槌を打つまで声を出していっている事に気がつかなかった。

―恥ずかしい。

「燃えるような夕焼けというのはこういう事を言うんですね」とか一体お前何者！

「燃えるような」とか！

「燃える」が「萌える」だったら「萌えるような夕焼け」ってどんなだよ！

夕焼けに萌えるってレベル高すぎだろ！

魔王『萌えとはなんだ？』

―説明難しいよ

魔王『そなに難しい一言なのか？』

―少なくとも僕には無理だ！

萌えとはなんだろう？とか良く分からない事を考え逃げようとしていた僕に「お疲れ様です」と姫が乾いた布を渡してくれる。
お礼を言って体の水分を拭き取りながら夕焼けを見上げる。

―あれ？これってよく聞く「部活上がりに女の子がタオルを差し出す」という夢の場面じゃない？

魔王『ぶかつあがりとたおるとは何だ？』

状況を理解して舞い上がっている僕は魔王の台詞が聞こえていなかった。

第１０話　気迫（後書き）

誤字修正　笛を加えた　→　笛を咥えた

第１１話　新興宗教

布を受け取り体の水滴を拭きながらテンションが上がっている僕に背後から声が掛かる。

美女さん「思ったより元気そうですね」

僕「え？」

美女さん「呼吸は戻りましたか？」

僕「あ、はい」

美女さん「では馬上剣術の稽古を行います。」

―マジですか？

マジでした。

美女さんの馬上剣術は熾烈を極めた。

まずはお互い騎乗状態での剣の振り方や馬の動かし方、相手が剣のときと槍の時を叩き込まれる。

というか何度も叩き落される。

美女さん槍も使えるんだ。

その後は相手が騎乗の場合を教わる。

相手がどのような攻撃で来るのかを剣と槍で。

その次は自分が騎乗で相手が勝ちの場合。
止まらず動き回る事と乱戦でも敵を近づけないようにと叩き込まれるというより叩き落される。

美女さん「一対一ならともかく戦場では落馬したら周りの兵士に取り囲まれて死にますよ。自分だけではなく馬も守るように動いてください」

美女さん「乱戦の時はどこから来るか分かりませんよ。周りにも意識を抜かず敵を馬に近づけない！」

美女さん「相手だけを攻撃せずに馬にも攻撃してください。馬を倒せれば半分は倒したも同然です。だからと言って止めを刺すまで気を抜いてはいけません」

美女さん「あまり近づきすぎると馬に蹴られて死にますよ。騎手に届かないなら馬を狙ってください」

美女さん「攻撃の最中も馬の動きを止めない。絶えず動きながら攻撃しつつ優位な位置取りを心がけてください」

美女さん「体だけで避けない。馬ごと動かないと次には動けなくなりますよ。」

美女さんの指導は容赦なかった。
周りで皆が見ている。

兵士隊長が「いいか！今の言葉を忘れるな！」と言い兵士達が頷く。
何なのこれ？

一人の兵士が呼ばれて騎乗する。
「今回は馬への攻撃は無しで」と言うとお互いに間引きされた剣を持たされて手合わせさせられる。
どうやら相手はさほど剣術が旨くないようで何とか出来ているが馬の操作に気を取られ攻撃が出来ない。
何とか攻撃をしようと思ったら美女さんが抜き身で寄って来るのが見えたのでさっと馬を動かして背後を取られないようにする。
すると美女さんは元の位置に戻る。

―何なの？気を抜いたら来るの？

何回か僕が攻撃しようとしたら美女さんは近づいてくる気配を出し、それに気がつき位置を変えると元にも戻るを繰り返す。
攻撃しようとした時に毎回来るわけではなく、何回に一回の割合で来るのはランダムなのか何なのか。

魔王『分かったぞ』

―何が？

魔王『美女の動きだ』

―何？

魔王『お主が馬を止めて攻撃しようとした時だけ来ようとしている。動き回れというのを実践できて無いからなのでは無いか？』

試しに何回か動きを止めて攻撃しようとしたら美女さんが動く気配がした。

―当たりだ！

魔王『止まるとラスボスが来るぞ』

魔王にラスボス扱いされる美女さん。

―否定できない。

馬の動きを止めないように意識を集中しすると相手の死角を付けそうになる機会が増えてきた。

と思ったら2人目が追加された。

どうやら2対1のようだ。

攻撃をすることは出来ずに剣を弾きながら馬を移動させまくる。

背後を取られないように動く捌く動く捌く。

気がついたら3人目が来てた。

2人でも精一杯なのに3人は無理！とか思ったけど、馬の体が大きくて3人同時には来れない。

ただ3人目が退路を邪魔するように入れ替わるので旨く逃げれない。

このまま捌いていても無理なので剣を受け止めて押し返して隙を作る作戦に出る。
捌きの中に受け止めて弾くという動作も入れる。
左の兵士が体を崩した瞬間を狙って馬で当たりながら囲みを突破する。
逃げるわけにも行かないので2人が来るのを待ち構えたところで「そこまで」という声が掛かる。
先ほど押した兵士は落馬は免れたようだ。

美女さん「馬が止まってしまっていたのに気が付いてよかったです。もう少し気がつくのが遅ければ私が言って叩き落してました」

―魔王GJ！

魔王『ぐっじょぶ？』

―いい仕事したって意味だよ

美女さん「馬は守らなければなりませんが、囲まれそうな時などは相手を崩すのにもっと馬を当てて行かなければ行けませんよ」

―なるほど。

兵士隊長（少し離れた場所で）「忘れるな！相手を崩すのに馬を当てるのも有効だ！」

兵士達（少し離れた場所で）「はっ！」

美女さん「囲まれる前に相手の輪の外に出るよう心がけてください。

再度囲おうとするのに連携が乱れたりするのでチャンスです。外へ外へですよ」

兵士隊長（少し離れた場所で）「分かったか！外へ外へだ！囲まれるな！！」

兵士達（少し離れた場所で）「はっ！」

――……

美女さん「対峙した状態で回頭させる時は大回りではなく小回りで素早く行って下さい。相手より遅かったら体制を整える前に来ますよ」

兵士隊長（少し離れた場所で）「回頭は小さく素早くだ！相手に遅れるな！！」

兵士達（少し離れた場所で）「はっ！」

美女さん「少し煩いですよ」

兵士隊長（少し離れた場所で）「静かにしろ！」

兵士達（少し離れた場所で）「はっ！」

だから何なの？このコント。

美女さん「とりあえず今日はここまでにして明日にしましょう。明日は朝からしますよ」

僕「マジですか？」

美女さん「まじです。明後日には戦になります。全然時間が足りません」

そうだった。
明後日以降は戦が始まるんだ。

美女さん「ですので明日はもっとびしびし行きますよ」

少しはなれた所で「よし！今までの内容を忘れぬよう訓練開始だ！」と言う兵士隊長の言葉に兵士が「はい！」と答えて騎乗すると訓練を始めた。
何だこの士気の高さは。

――――――――――

晩御飯はなかなか豪勢だった。

翁が「姫がおられるから料理係も張り切ったのだろう。戦場では贅沢できないからせめて我が館にいる間だけでもな」と笑った。

夜は魔法の講義だが妖精少女も勉強したいと言い出した。
どうやら昨晩のピンチに何か思うところがあったようで「お兄ちゃんを助ける」と言っていた（可愛い！）
魔力の制御に関しては後は実践しながら精度を上げていくだけなので僕の口を介して魔王が精霊に付いて講義する事になった。
どうやら精霊について知っておくことは無駄では無いらしい。
美女さんと爺は僕の講義を笑顔で眺めている。
意外な事に姫が興味津々に妖精少女と聞いていた。

僕（魔王）『まぁ「人族でも魔族でも波長の合う妖精が居たら使えるし、理論上は気に入られれば上位精霊とも契約を結べるから」な』

姫「魔力が無い私でも妖精と契約できたりするのでしょうか？」

僕（魔王）『「契約に魔力の多さは関係ない。確かに魔力を多い方が好まれる傾向にはあるようだが、魔力が無くても問題は無い（な）です」』

姫「なるほど」

僕（魔王）『「そもそも生きている限り魔力が0と言う事は（無い）ありません。」』

姫「そうなんですか？」

僕（魔王）『「魔力の源は精神力（だ）です。これはどんな生き物でも持っている生そのものだ。無ければ死んでいる」』

頷く姫と首を傾げる妖精少女。

妖精少女にはもう少し分かりやすく言わないとダメだな。

「博識なんですね」という姫に笑って誤魔化し続ける。

僕（魔王）『「その精神力を魔力にどれくらい変換できるか、それを魔法と結びつけるかどうかが魔法の有無に繋がる。」』

姫「変換と繋ぐ事ですか」

僕（魔王）『「これぱかりは感覚だから教えようが無い。それで変換効率で魔力の大小が生まれる。中には魔力は甚大でも魔法が使えない（馬鹿者「うるさいよ！」）者や、魔力ではなく法力に変える者もいる（しな）ようです」』

姫「魔法と神法は一緒なんですか？」

僕（魔王）『「元は一緒（だ）です。感覚で覚えるか、神の声で目覚めるかでの違いに過ぎ（ない）ません。」』

姫「と言う事は両方使える事もあるんですか？」

僕（魔王）『過去には居たようだがものめずらしい程度（だぞ）ですね」』

姫「そうなんですか？便利そうですが」

僕（魔王）『「確かに使える術は増えるのは便利ですね。（しかし）でも精神力の総量はそうそう変わらない。両方使えると言う事は精神力を２つに分けるという事になる。」』

姫「どういう事でしょう？」

精神力と言うのは魔力と法力の源ではある。
だからと言って消費したら精神力からいくらでも補充するというわけには行かない。

大きな器に水が一杯満たされている状態をイメージする。
器が人のキャパシティであり水が精神力である。
器の大きさは人によって大小さまざまあり、その大きさはそうそう変わらない。
もちろんその中に貯まる精神力も器の容量を越える事は無い。

その器の一部を区切った中身が魔力や法力で使える精神力となる。
その区切りの大きさが変換率とも最大魔力や法力とも呼ばれる。
区切る範囲の大きさはも人それぞれで基本的には変わらない。

その区切りに入った精神力は魔力か法力のどちらかに変換される。
魔力と法力は精神力の使い方が違うからである。
そして魔法などを使うと区切りの中の魔力は無くなっていき、枯渇すると魔法が使えなくなる。

いくら区切りの外に精神力があっても区切りの中に無ければ魔法は使えない状態になる。

区切りの中の失った魔力はどうやって回復するのか。

それは休息を取る事により区切りの外の精神力が溜まり、それが溢れて区切り内に流れ込む事によって回復していく。
だから休みを取らなかったり体調を崩したり、精神的に弱っている時は回復しにくい。

では魔力と法力を同時に使った場合はどうなのか。

先ほど言ったとおり2つは使い方が違うので一緒に出来ない。
なのでそれぞれに区切る必要がある。
しかし器に空きがあろうが区切りは一つしか出来ない。
一つの区切りをさらに細かく2つに区切る事になる。
片方が枯渇してももう一方から分ける方法は無い。
だから両方覚えるのは単純に使える魔力を減らしてしまう事に繋がる。
しかも2つの大きさは選ぶ事が出来ないので、場合に拠っては得意な方が容量が小さくなってしまう事もある。

ただ魔力は何時、何処でどの様に目覚めるかは分からず、法力に至っては神の気持ち一つなのでどうしようもない。

―長いよ

魔王『仕方あるまい。事実そうなのだから』

このままでは妖精少女が寝てしまう！
一応、うんうんと頷いているけど本当に理解してるんだろうか？
妖精少女か飽きないように簡単に話さなければならない。
でも同時通訳だとあまり考えて話せない。辛いところだ。

――――――――

精霊は火・水・土・風・光・闇の６つあり、精霊王、上級、中級、下級の精霊に分かれている。
それぞれの属性の他に光は正の感情、闇は負の感情を司ると言われている。

基本的に精霊はどこにでも居るが大抵は下級精霊である。
妖精少女に協力してくれているのもそうであろう。
ただ水の中などに火の精霊が存在できないように、基本的にはそれぞれ属性と対する場所では数が少ない。
逆に自分の属性の場所、水なら湖、火なら火山などの場所にはそれぞれの属性の妖精が多いだけではなく中級の妖精も居たりする。

上級や妖精王クラスになると妖精界と呼ばれる別の世界に居て自らこちらに出てくる事は無い。
各地にある特定の場所のみで交信することが可能だが、人ではなかなかたどり着けない場所だったりする。

妖精と契約をし力を借りるのには精神力が必要だが妖精少女のようにお願いして力を借りる場合には一切必要ない。
ただ力を借りるのは相手に気に入られないと無理だし、借りれる力も周りのものを利用するだけなのでそれほど多くの力は使えない。
頑張っても妖精少女のように風の力で相手をよろめかす程度が精精である。

契約を結ぶのはまずは相手に認められる必要がる。
その上で契約を結ぶのだが、精神力に魔力や法力とは別の区切りが出来る。
これが精霊魔法を使う為の霊力になる。
霊力は同じ属性の精霊なら同じく切りで区切りで使う事になる。
この多きさも精神の器以上は大きくならないし、魔力や法力とは一緒に出来ない。

ただ魔力と法力と違い霊力は新たな契約で増える事がある。
だからと言って下級と数多く契約を結んでも増えるわけで無い。

例えば呼び出すのに霊力3が必要な下級精霊と契約を結ぶとする。
その時に最大霊力１０の容量が出来た。
霊力１０のうち3で呼び出して残り7えを使って下級精霊で出来る

精霊魔法を使う事になる。

次に同じ属性の霊力４の下級精霊と契約を結んだとする。
その場合は最初に契約した際にできた最大霊力１０で十分呼び出せるので霊力は増えない。

霊力ある１０あるので4と3の2つの精霊を呼ぶ事も可能だ。
２つの精霊を呼ぶ事により
だが使える霊力は残りの3になるのでそれほど多くの精霊魔法は使えなくなる。

霊力が増える状況はどういう場合か。
それは最大魔力１０の状態で霊力２０必要な同じ属性の中級と契約を結んだ時である。
１０では呼び出す事も出来ないので最大霊力が５０に増える。

気をつけないといけないのが精神力の最大値以上の契約を結んでしまった場合である。
精神力の最大値が１００の時に呼び出すのに霊力１５０のが必要な上級精霊と契約を結んだばあい。
最大霊力は１００までしか増えない。
その状態で霊力１５０の上級精霊を呼んでも霊力が０になるだけで呼ぶ事は出来ない。

気をつけないといけないのが説明しやすいように霊力を数値にしたが、実際は感覚でしか分からない。
なので自分の最大値は分からないし精霊を呼び出すのに必要な霊力もどれくらいか分からない。

僕（魔王）『「精霊に気に入られるのはどうしたらいいのかは分か（らない）りません。」』

姫「そうなんですか？」

僕（魔王）『「精霊と契約を結んだ事も無いし、精霊は（我々）僕達とは思考が違うから（な）」』

妖精少女「でもお兄ちゃんの周りには多いよ？」

魔王『ほう』

僕「え？そうなの？」

うんと頷く妖精少女

―多いのか。なんでだろう？

姫「見えるんですか？」

僕（魔王）『「霊力を持つと精霊を見れるようになるらしい。霊力が低いと上のクラスの精霊は見えないが気配を感じるくらいは出来るだろう。」』

姫「では妖精少女は霊力を持っていて妖精が見えるんでですか？」

僕（魔王）『「妖精族は昔から妖精と強い結びつきを持っている。

住んでいる森にも多くの精霊が住んでおり幾人もの精霊使いが居るだろうから、小さな時から触れ合ってわずかでも霊力が付くのは理解できる。そういう種族性が精霊に好まれる要因の一つかもしれない」

「精霊が見えるなんて素敵ですね～」と呟く姫。
妖精少女が「えへへ」と少し得意げにする。（可愛い！）

僕（魔王）『「霊力が無くても日頃から意識をしていたらいつか精霊から語りかけてくるかも知れないな」』

姫「そうなんですか！頑張ってみます」

僕（魔王）『「妖精少女が精鋭と契約を結ぶ方法だが」』

妖精少女「うん」

僕（魔王）『「精霊の属性の強い場所で精霊に語りかければ後は精霊が判断してくれる（だろう）よ」』

姫「そんな事でいいのですか？魔方陣を描いたり必要なものがあったりとかは」

僕（魔王）『「中級までは必要(ない)ありません。上級以上は場所(だの)だったり儀式が必要(だがな)ですけどね」』

なるほどと頷く姫と「今度やってみる」という妖精少女。

ここら辺に精霊が集まる場所はあるのだろうか？

とりあえずは今日はここまでと言う事にし、それぞれの部屋に戻った。

第１２話　小砦攻防戦

翌朝から続々と兵が集まってる。
姫と爺は翁と現領主・領主息子と共にに挨拶に来る領主に面会で大忙しだ。

僕は美女さんの指導の下、馬上剣術の訓練と言う名のしごきを受ける。
その後ろでは美女さんの言葉に過剰反応する兵士隊長と翁の兵士達。
本当に意味が分からない。
僕に声援を送る妖精少女に注目が集まっている気がする。

昼は姫や翁達と新たに来た領主と昼食を行う。
挨拶をすると意外とすんなり受け入れられた。
どうやら姫を助けた事や騎士団の無力化などを考え事で評価されているらしい。
ちょっと照れる。
妖精少女に関しては翁が言ってた「妖精族を見ると幸運が訪れる」という話を理解しているらしく「出会えて幸運です」と言っていた。
どうやら他の領主にも早馬で話は通していたらしい。
それで兵士達は妖精少女を見に来ていたようで一安心。

夕方には館を立つ為に昼は訓練を行わず集まった領主や各兵士隊長達と作戦を話し合う。
僕と美女さんは姫と一緒に本隊にと言われたが美女さんの一言で翁の兵を１００名程預かり遊撃部隊となった。
妖精少女は姫の移動用馬車に乗る事になった。
姫は移動の際は馬車を使うが戦場では馬に乗り兵士を鼓舞するそう

だ。
目標の小砦攻略の作戦を話し合い解散となる。

―――――――――

日入（にちにゅう、１８時頃）翁の館を出発する。
集まった兵は約１７００名。
間に合わなかった領主達は途中で合流する事になっており、もう４００程増えるらしい。
後はどれくらい静観を決めている領主を取り込めるかといった所である。

現在集まっている者の殆どが騎乗している為に進軍スピードはなかなか速い。
通過する近隣の領主にドンドンと通過の挨拶と参軍の呼びかけを行う。

内容は
「国の乱れを憂いて姫を旗頭に兵を挙げた」
「近くを通過するのに挨拶しないのは失礼だと思い、急だが挨拶だけでもさせて頂く」
「我々が勝利した暁に国を腐らせる逆賊を一族も加担したものも厳罰に処し国を正しい方向に導く所存」
「もし国を思う気持ちがあるならば一緒に兵を率いて戦わないだろ

うか？」
「勝てば今回の戦の功績に見合った以上のものを与えるつもりである」
「まずは小砦攻略を考えているが、ここが一番の正念場になると思われる」
「ただ王子も別方向から兵を率いて小砦に合流する事になっているので、小砦を落とせば後は問題なく勝てるだろう」
「王子も王女も今回の国の後輩に本当に心を痛めており、勝利した暁には国賊の一族とそれに加担したものの財産を全て没収し国の復興に当てる事を決定している」
「もちろん国難に何もしない者や我が身可愛さで代わりに勝ち馬に乗るような節操の無いものも国の荒廃に加担したとして資産の一部を差し出してもらうし、よりよい国作りの為に立場も改めさせてもらう」
「もし我々の勝利が聞こえて来たならば多くは報いる事は出来ないと思うが駆けつけてください」

簡単に言うと
「とりあえず今から戦争しに行くけど一緒にどう？今から参加してくれるなら勝った時に頑張り次第で褒章考えるけど。敵対したら全部財産没収の上にお家断絶、傍観したままでも財産の一部と利上げと身分を下げたりするけどね。ちなみに一番しんどいのは小砦だから。そこで王子たちも来るから勝利は確実だけど、これ以降に来た奴は小砦攻略に参加した者より確実に功績は低いね。」
と言う事だ。

そんな「敵対したら」とか「傍観でも」とか過激な発言してもいいのかな？とも思ったけど魔王が『どうせ撒けたら全て終わりだ。それなら過激な事を行ってでも周りの奴に発破をかけて引き込むしか

あるまい』と言うので納得した。
『敵に情けをかけることも無い。勝てば一族郎党皆殺しは基本だ』
と言うのはどうかと思うけど、中途半端にして後々反乱を起こされても困るので仕方ないらしい。

夜に野営を行う。
僕の天幕は姫の天幕の横にあるもので爺と一緒に使う。
美女さんと妖精少女は姫と一緒の天幕で休む。
さすがに大所帯だと見張りをする兵がいて夜も休めるようだ。
ただ戦場ではあるので夜襲などには気をつけないといけない。

日が昇る頃には起きて移動の準備を行う。
すぐに準備を終了、移動を開始した。

―――――――――――

?時（ほじ、１６時頃）に砦まで1刻ほどの距離に付く。
兵士の数は３０００まで膨れ上がった。爺と翁の脅しの効果が出ている。

兵士が隊列を組む。

本陣は姫、爺、翁　約１５００
右翼は現領主　約７００
左翼は領主息子、兵士隊長　約７００
遊撃は僕と美女さん　約１００

小砦には敵領主軍はあまり集まっていないようだ。
居ても元居た小砦兵と敵領主兵を合わせて５００居るかどうかのようだ。

まだ騎士団は到着していない。
原因はわからないが居ないなら小砦を攻めやすくなるので、それはそれでいいかと気持ちを切り替える、

戦が始まった。
右翼と左翼で砦を半方位しながら近づいて弓を射掛けては離れてを交互に行う。
嫌がらせでしかない。
左右に敵が寄ったときに本陣の部隊の一部が城に取り付こうと近寄るそぶりを行う。
相手は援軍が来るまでは持ちこたえようと必死で弓を射掛けてくるが盾に阻まれてそれほどの損害は受けない。

小砦への敵領主軍の援軍は実は来ていた。
ただ取り囲んでいるこちらの軍に気がつき行動が取れなくなってい

た。
そこにこちらから兵と使者を送る。
内容は「よく参軍してくれた！さあ一緒に小砦を落とそう！！」というものである。
敵として来たのを知っていながら。である。
そうしてここに来るまでに他の領主に伝えたのと同じ内容を伝え「一緒に勝利の栄光を！」と押し切る。
「自分は国王軍側だ！」と言えば自分より数の多い本陣に襲われ全てを失いという恐怖から否定できないまま反国王軍側へと祭り上げられる。
無理やり反国王軍側に仕立て上げられたにも関わらず「今、小砦を攻撃している所ですが、来たばかりで兵もお疲れのようですので今回は後方で休まれた方がよろしいのでは？」と言われる。
本来なら参加したくない戦になった場合には相手の言い分に頷いて兵力を温存し、時機を見て領地に帰ればいい。
だが今回に関しては姫だけでこれだけの兵が居るのに後に王子の兵も来る。
国王軍が勝てばいいがもし負ければ傍観していたらまずい。
もしもの時は「ここでやら無いと功績は殆ど認められない」という気持ちと、適当に戦闘に参加して体裁だけ保って後は状況を見て勝ち馬に乗ろう、という打算が働いて「このまま参戦する」と言っていた。
そうして国王軍側として着たのにも関わらず丸め込まれ反国王軍になった領主達は次々と左翼と右翼に割り振られていった。
反国王軍は丸め込んだ領主達を信用はしていなかった。

わざと右翼も左翼も弓を射掛けて逃げると言う消極的な行動を取っていた。
丸め込まれた領主軍はここに組み込まれ一緒に「これ位なら自分の兵はさほど被害が出ないか」と消極的な行動を取る。
どんんどん取り込まれる領主達が左翼と右翼に組み込まれるたびに、元々居た反国王軍の兵士達が気が付かれない様に少しずつ右翼と左翼から抜けて本陣に戻る。
半分以上が元国王軍派の領主の軍になり、国王軍派の援軍も途絶えだした頃に右翼と左翼がいつもより深めに小砦に近づき弓を掃射する。

目を疑ったのは小砦の兵士である。
自分達の援軍として着てくれるという約束だった領主達が裏切り反国王派に付いたばかりか、先陣を切って攻撃して来るのである。
小砦の指揮官は怒りに顔をゆがめて裏切り者の領主の旗を狙えと叫んだ。

元国王軍派の領主達も急に小砦からの猛攻に驚き必死で応戦する。
そうなるともう国王派、反国王派関係無く自分を攻撃するものは敵である。
特に自分達を狙い攻撃して来るのである。
信頼関係はすれ違いにより敵対が決まった。
こうなればもう相手を倒すしかない。
「壁に取り付け！」という指揮官の声と周りの兵士の動きに合わせて一緒に壁に取り付くべく前進した。

僕達別働隊は戦場を離れ本陣後方に居た。

魔王が騎士団が不在がどうしても解せないというのだ。
その事を美女さんに伝えたところ「もし隠れているなら本陣への急襲しかないでしょう」と言うので大回りをして本陣後方に配置し隠れる事にした。
今は美女さんが5騎程連れて偵察に行っていた。

美女さんが戻ってきた。
赤白合わせて２００名ほどの兵士がいるらしい。

そのうち５０名ほどが陽動の為か離れて移動したのでそれを狙う事になった。

５０名を背後から１００名範囲を狭める。
魔王の『これ以上は確実に悟られる』の一言に他の兵に合図を送る。
すると５０名の隠れる場所の前を斥候を装って美女さんと数名の兵士が通りかかるふりをする。
隠れながらどうするかを合図で話し合う騎士達。
「やり過ごそう」という結論に出たあたりで「ん?」と美女さん扮する斥候が何かに気がついた振りをする。
その瞬間に飛び出そうとする騎士達の背後から僕達が一斉に飛び出

し騎士達を取り押さえる。
出来るだけ殺すなとは言っていたが、何とか全員無事に取り押さえたようだ。

捕まえた兵士は４５名
全員を武装解除して縛って馬に乗せ連れて行く。
向かう先は残りの約１５０名の騎士の場所。

少しはなれた見渡しのいい場所で縛った騎士を座らせ兵士で周りを囲んで見張る。
僕と美女さんは数名の騎士とともに４５人の中で一番偉いだろう騎士を縛ったままつれて１５０人の騎士の下へ向かった。

僕達が近づくと約１５０名の騎士が殺気立つ。
十分な距離を取って話しかける。

魔王『交渉は堂々と威厳を持って、そして相手には主導権を渡さず自分に有利に進めるのだ』

―そんな難しいことはできないよ。

魔王がそんな事をいうので「こういう時にどういえばいいのか分か

らなくなってしまった」
それで出た一言が

僕「こんにちは」

返事は返って来ない。

僕「責任者の方と話したいのですが」

そういうと一人の人物が名乗り出た。
赤の騎士団中隊長と言うらしい。

僕「お話を聞いてもらえますか？」

赤の騎士団中隊長「人質を取ってか？降伏なら受け入れない」

僕「人質は話を聞いてもら手段なだけで降伏を勧めに来たわけじゃ…ないわけもないか」

赤の騎士団中隊長「どういうことだ？」

僕「とりあえず他の４４名も全員生きてます。」

赤の騎士団中隊長「全員無事だと？」

僕「少しくらい怪我をしている人もいるので無事ではないですが、元気だと思います。お話を聞いてもらった後は全員解放します。」

赤の騎士団中隊長「何が目的だ」

僕「話を聞いてもらうことです。僕の話を最後まで」

赤の騎士団中隊長は話してみろと促す。

僕「赤と白の騎士団には戦に参戦せず傍観して欲しいんです」

赤の騎士団中隊長「何を馬鹿な事を」

僕の言葉を一笑する赤の騎士団中隊長。
その赤の騎士団中隊長に僕は「騎士団長が投獄されているのに笑ってられるんですね」と言うと赤の騎士団中隊長が殺気を放つ。

僕「助けたくは無いですか?騎士団に正式な団長を迎えたくないですか?」

赤の騎士団中隊長「…」

僕「僕達が国王軍を倒せば騎士団長は開放の上で騎士団長として復帰してもらうし、恥知らずの黒の騎士団長一味も処刑しますよ?」

赤の騎士団中隊長「…どうやって勝つと言うんだ」

僕「そのために赤と白の両騎士団には戦闘に参加せずに傍観して欲しいのです。」

赤の騎士団中隊長「だが団長の身の安全をちらつかされて戦闘を強制されるとどうしようもない」

それに関しては裏切ったらまだしも傍観では処刑できないという根拠を説明をする。

赤の騎士団中隊長「…たしかに理屈は通っている。だがそれでも団長の命をかけることは出来ない！」

僕「どちらにしてもじりじりと戦力を削られ、脅威で無くなった時点で処刑されてしまいます」

赤の騎士団中隊長「っ！！」

周りの騎士団も僕の言葉に悔しそうに唇をかむ。

どうやらみんな薄々気が付いてはいた様だ。

座して団長の処刑を待つか、打開できるかもしれない案にのるか。

僕「姫も王子も赤と白の騎士団とは争いたくないと考えてます」

赤の騎士団中隊長「……」

僕「それは手ごわいと言うのもありますが、両騎士団が国にとって必要だからです。こんな無駄な戦いで消耗していい存在ではありません」

赤の騎士団中隊長「姫と王子の気持ちは心から光栄に思う」

僕「ですのでこの案に乗ってもらえませんか？」

赤の騎士団中隊長は僕を見つめ「それで交渉のつもりか？」と聞いてきた。
良く分からない僕は首をかしげ「お願いなんですけど」と言うと赤の騎士団中隊長が少し笑った。

赤の騎士団中隊長「…私では判断が付かない」

僕「ではこの話を上に上げてください。あ、でも黒の騎士団団長や領主の手勢にはやめてくださいね」

赤の騎士団中隊長「分かった、赤の騎士団副団長に話してみよう」

僕「白の騎士団にも伝えて欲しいのですが」

赤の騎士団中隊長「赤の騎士団副団長が白の騎士団副団長にも話すだろう」

「大丈夫だ」と頷く赤の騎士団中隊長。

僕「そういえば白の騎士団の先発隊は来て無いんだろう？」

赤の騎士団中隊長「王子側の軍隊の足止めに行かされている」

まさか僕の独り言に答えが返ってくるとは思わなかった。
もしかしたら赤の騎士団中隊長は僕の意見に傾いてくれているのかもしれない。

赤の騎士団中隊長「貴殿の意見は聞いた。赤の騎士団副団長にも必ず伝えよう。」

僕「お願いします」

赤の騎士団中隊長「だが何もせず戻ると疑われかねない。それは団長の命に関わる可能性があるので出来ない」

僕「う～ん…ではここで戦闘しましょう」

赤の騎士団中隊長「何？」

僕「正確には僕達とであって戦闘になって痛みわけしたと言う事で」

赤の騎士団中隊長「……」

僕「向こうに小さな怪我をした騎士も居るので丁度良いですね」

赤の騎士団中隊長「捕虜を解放すると？」

僕「話は聞いて貰いましたからね」

赤の騎士団中隊長「捕虜を解放した後の貴殿らに襲い掛かる可能性があるぞ？」

僕「それなら大丈夫だと信じてます」

赤の騎士団中隊長「これくらいの数は対処できる兵士達だと？」

僕「いえ。赤の騎士団中隊長をです」

彼は騎士団長を敬愛している。
その騎士団長を守る為、助ける為に僕は害する必要は無いと感じている。

赤の騎士団中隊長「――っはは！まいった！」

僕（？？？）

魔王『男にも効果ありか』

―なにが？

赤の騎士団中隊長「分かった！必ず伝える。捕虜の変換も感謝する」

そういうと騎士団たちは剣を収めた。
僕達は捕まえていた騎士団達を解放し武器を返す。
赤の騎士団中隊長が去り際に「貴殿の名前は？」と聞いてきたので
「若と言います」と伝えた。
赤の騎士団中隊長は頷くと騎士達を連れて小砦とは別の方へ去っていった。

赤の騎士団を見送った僕に美女さんが「お疲れ様です」と微笑む。

僕「あんなので良かったのかな？」

美女さん「大丈夫です」

魔王『交渉としては最低だったが、結果としては上々だ』

2人の言葉にほっと息をつく。
あ～怖かった。
いつ切られるかと心臓どきどきしてたよ。

ふと戦場から響く声が大きくなったので見てみると壁に取り付いた兵がはしごをいくつも掛け、小砦の壁を乗り越えているのが見えた。

魔王『決まったな』

美女さん「塀を越えればもう決まったようなものですね。時間の問題です」

僕「結局、小砦攻略は参加しなかったね」

美女さん「でもそれに匹敵するくらいの功績は挙げたと思いますよ」

僕「だと良いんですけどね」

美女さん「さぁ戻って姫に報告しましょう。きっと心配で倒れそうになってますよ」

確かに自分の命を掛けた博打の結果に関しては、どうなったか心配で仕方ないと思う。

美女さんと魔王が『「勘違いしてる気がする」』という。

僕「そうだね！早く戻らないと失敗と勘違いするかもしれない！」

僕達は本陣へと急いだ。

第１３話　願望

小砦は陥落した。
小砦の指揮官と生き残った領主達は投降。
どうやら小砦には４５０名の塀が居たらしいが生き残ったのは２６０名程だった。
犠牲者は殆ど領主の兵で、反国王軍が塀を乗り越えて来るのを止める事が出来なくなった時点で指揮系統が壊滅し混乱し各自が独自で動いた結果、同士討ちもあったようだ。

それに対して反横行軍は戦闘が終わった時点で動ける兵は３２００。
戦闘中に来た元国王軍の領主達を取り込んトータルで３８００まで膨らんだ。
犠牲の約６００の内の7割が元国王軍領主の兵であった。

捕まえた領主は今度の対応として「国賊」として財産、領地、爵位は没収と伝えると膝を折って許しを乞うた。
それを無視しして牢屋へ送る。

小砦の指揮官は昔から小砦を守っている人物である。
本人は「生きて虜囚の―」とか言ってたけど、よくある「死ぬほうが不忠義だ！」というので自害は留まった。
ただ今の状況で小砦の指揮官に復帰するのは混乱を招くとして、指揮を副官に任せ自室に自主軟禁となった。

僕「その行動も自己満足だと思うんだけどな」

美女さん「そういう儀式をしないと動けない人もいるんです」

面倒な人は多い。

戦争は奇麗事だけじゃない。

小砦にいた領主の一族を捕らえに領地に兵を派兵する。
その兵は元国王軍領主の兵だ。
元々同じ国王軍だったのだから家族ぐるみの付き合いがある場合もあっただろう。
「これは踏絵じゃよ」と翁はいう。
国王軍に寝返るか反国王軍のままでいるかの踏み絵だ。

領地に向かう領主と兵に姫直々に言葉を与える。

姫「略奪や暴行は一切してはなりません。歯向かう者は仕方ありませんが領主の一族は国賊とはいえ丁重に扱ってください。わが部隊からも兵は同行します。略奪暴行があった場合はたとえ兵のしでかした事でも領主の罪になります」

翁「暴行略奪を行ったものは死罪、その者を抱える領主は財産と領地の一部を没収。領主が行った場合は財産、領地、爵位を没収の上で一族も同罪。国賊の一門を逃がした場合は国王軍に組したとして国賊と同じ扱い。匿った場合も同じく国賊と同じ扱い。」

領主達が顔を青くして聞く。

翁「逃亡した国賊の一味を捕まえた者には誰でも褒章を取らせる。ただし過剰な暴行略奪を行っていたり、不正があった場合は死罪。これに関しては国中に触れを出す」

元国王軍の領主達は各領地へ行き今回の小砦に関わった9割近い国王軍の一族を捕らえてきた。
接収した領地には反国王軍の兵士が強盗などが入らないように警備に立った。

集めた国王軍の領主の一族は成人男性と子供の3つに分けられ、大人の男は砦の牢屋に入れ、大人の女と乳幼児、子供はそれぞれ後方の別の館に軟禁されて元国王軍派の領主の兵士に守られる事となった。

―――――――――――

領主の一族を拘留するのが一通り終わった頃には翌日の昼になっていた。

一睡も出来ず顔を真っ青にしながら報告を聞いていた。

「少し休みます」の声とともにみんなが下がる。

だが休めるわけが無い。

今はそれなりの対応、軟禁は仕方ないとしても人として最低限が守られていたとしても、彼ら彼女らに待っているのは戦後の断頭台である。

幼い子供は助けれるかもしれないが、それでも親兄弟が殺されるというのは幼心にどれだけの傷を与えるか分からない。

せめてその日まで酷い目にあわないようにと思い「略奪暴行を絶対させないで下さい」と翁に頼んだ結果があの厳しい厳罰だ。

だが逆に言えばあそこまでしないとそういう事が行われる可能性が高いという事だ。

しなくてはいけない事だとしても罪の気持ちに押し潰されそうになる。

椅子から立ち上がることも出来ずに俯いていた視線の端に足が見えて顔を上げた。

一睡も出来なかっただろう事は顔色を見たらわかる。
報告を聞いた後に「休みます」と呟いた姫の顔は見えなかったが国王派の領主の一族の今後の事で胸が張り裂ける思いをしているのだろう。
敵の一族のみまで案じて「略奪暴行禁止の徹底」を姫は熱望していた。
これは何とか守られたようだが、処刑は免れない。

今も立ち上がることも出来ず項垂れている姫が心配で近づいて行った。

姫が顔を上げる。
いつもは白い肌も今は血の気が失せた様に真っ白だ。

姫「大丈夫ですっ」

僕が声を掛ける前に姫が口に出す。

僕「全然、大丈夫そうに見えません」

姫「分かってます。仕方ない事なんです。大丈夫です」

自分に言い聞かせるようににいう姫。

座る椅子の手すりを硬く握り締める姫のに手を添える。

僕「姫はどうしたいですか？」

姫「私がどうしたいかじゃありません。しなくてはいけない事で―」

僕「しなくてはいけないのは分かりました。姫はどうしたいですか？」

姫の目が泳ぐ

僕「ここには僕の他には誰も居ません。心の内を吐き出しても誰も文句は言いませんし言わせません。」

姫「―っ」

僕は姫の言葉を待つ。

姫「――たい―す」

唇が震える。

姫「助けたいです」

その一言を吐き出すと堰を切ったように言葉が溢れる。

姫「みんなを助けたいです。殺したくない死んで欲しくない。小さな子に家族全員が殺される思いもさせたくない。一緒に暮らせるようにしてあげたい。でもどうしてもできない―」

僕「やりましょう」

姫が止まる。

僕「出来る限り助かるよう一緒に考えましょう」

姫「え―」

僕「国王軍に加担した者は基本的に助ける事はできません」

呆然と聞く姫

僕「ですので国王軍に参加した人を助命できる方法を一緒に考えましょう」

姫「……」

僕「もしかしたら状況的に仕方なく国王軍に付いた人で、復興に必要な人材もいるかもしれません」

姫「そう、ですね」

僕「状況を見て助けましょう」

姫の目に色が戻る。

僕「でも状況なんて曖昧ですね」

姫「え、ええ」

僕「基準も曖昧で線引きが難しい」

探るように僕を見る姫

僕「なのでいっそ、全員助けましょう」

姫「は？」

何を言ってるのか分からないと止まる。

僕「国王派への加担は領地と財産と爵位の没収です」

姫「そうです」

僕「ではそこまでして命を取る必要はありません」

姫「でも状況がそれを許さないのです―」

僕「そうですよね。なので処刑しなければならない人だけ処刑します。」

どういうことか分からない姫に説明する。

僕「まず全員、領地と財産と爵位の没収を行います。これは決定です。」

姫「はい」

僕「その後、彼ら一族には最低限の家と畑を元領地のどこかに用意し一領民として今後は生活してもらいます。」

姫「……」

僕「新しい領主は今回の戦で貢献した人の中から信頼の置ける人をつければ言いと思います。そうすれば褒章の問題も一挙解決しますしね」

そんな事でいいのかな?と考える姫。

僕「領民から搾取や圧政を行っていた元領主は、元領主と…一族の成人男性は処刑をするしか無いでしょう他の女性と成人前の男子はその場での生活は危険なので離れた他の領主の土地で一領民として生活してもらう事になります。」

姫「成人男子もだめですか」

僕「本来なら子供以外全員と言われるのです。仕方ありません」

姫「―ッ」

僕「圧政を敷くことなく領民を守っていた元領主は、自分の元土地で数年間の開墾を行い、その後に何かしら理由をつけて領主に復帰してもらう。処刑も無し」

姫「！」

僕「ただし復帰の事は言わない。領地は代理で誰かが治める…と後々揉めるかな？」

姫「―皇帝の直轄地という扱いなら問題ないと思います」

僕「じゃあそれでいきましょう。いい領主だったかは領民が判断してくれます。これで殆ど処刑せずに済むかも知れません」

そういうと姫は大きく見開いた目から涙を流した。
力が抜けて縋って来る姫を受け止めながら言う。

僕「まだです。まだ現実ではありません。これから翁を納得させないと。それが出来ないと実現しません。一緒に頑張って説得しましょう」

姫は何度も頷きながらも涙を流し続ける。

魔王『黙って聞いていたが、面白い事を考えるな』

―どう思う？

魔王『後々の事を考えると一族郎党皆殺しが良いと思う』

―それは姫には出来ない

魔王『だろうな』

―無理だと思う？

魔王『するんだろう？』

―そうだね

少ししたら姫が寝てしまった。
疲労に緊張感が切れたせいだと思うけど、困った。
と思っていたらドアが開いて美女さんがと爺と翁が入ってきた。
僕が寝ている姫を抱えているのを見て爺が「よかった」と言う。
姫を部屋に運んで寝かせる。
心配そうに姫を覗き込んでいるの妖精少女の頭を「大丈夫だよ」と撫でる。
僕が部屋を出た後に美女さんが寝やすいように衣服を緩めて寝やすいようにしてくれる手はずになっている。
「姫を見てあげていてね」と妖精少女に言うと僕は部屋を後にした。

部屋を移して先ほど姫と話していた内容を話す。
大体は聞こえていたようで翁は険しい顔をした。

―説得は難航しそうだな

翁「わかった」

僕「はや！」

翁「姫のたっての要望だしの。出来ない事でも無いしの」

「少し詰めて考えてみよう。」と翁は言うと部屋を出て行った。

どうやら翁の説得はうまく行ったらしい。
後は王子だが、王子なら賛同してくれる気がする。
確証は無いけど。

とりあえず僕も寝てないので一眠りしようと部屋へと向かった。

―――――――――

夕方に国王軍の領主の兵、約２５００が現れる。
小砦を見下ろす小高い丘の上で陣を敷いていた。

小砦を攻めるには兵力が足りないが何もせずに引き返すのも癪で、
一体どうしようといった所か。
長い間そうしていた国王軍の領主はとりあえず一戦交えて撤退しよ
うという判断になったのか兵を２つに分け城を包囲しようとした。

だが決断に時間を掛けすぎた。

僕と美女さんは１００騎程連れて小砦を気が付かれない様に出てい
た。
離れた場所で国王軍派の領主が２つに兵を分けるのを見て小さな集

団の方の背後に回りこむ。

国王軍が小砦を両方から包囲を狭めて行くのを見ながら時期を計る。

小砦からの弓が届く範囲に近づく直前に、流れ矢に当たるのを嫌った領主と取り巻きが動きを止め、兵の隊列から分かれる。

兵士が盾で矢を受けながらじいじりと小砦に近づき別のものが矢を射返す。

領主達と兵が少しは離れた所で僕達は声を出さずに飛び出した。

無言で馬を駆る。

領主達は幾つかに集まっているようで、その一番外側の集団に僕は５０名ほど引いて突っ込む。

美女さんも反対側の端の集団に５０人で襲い掛かって居る所だろう。

相手は２０ほどの集団でこちらに気付いておらず、気が付いた時には肉薄していた。

すれ違いざまに兵士３人ほどを切り倒し領主らしい人物を１人馬から叩き落す。

振り返ると２０名は制圧されていた。

生き残りは５人。

素早く周りを見渡し、１０人の兵に死んだ領主の遺体を一人の兵に馬に乗せるようにいい、生き残り５人を武装解除と捕縛して連れ去るように指示をし、残りの兵を伴って少しは離れた場所の領主の集団に襲い掛かった。

恐慌に陥った一人の領主の撤退指示により小砦を包囲していた半分の兵が連鎖的に撤退しだす。

その撤退の音を聞いた反対側の領主達も体制を崩したところに小砦から飛び出した２０００の兵が襲い掛かった。

すでい崩れていた国王軍側の領主軍派支えきれずに数を半数以下にしながら撤退していった。

討ち取った領主とその一門の人間は１５名。２０名近い者達を捕らえた。

捕らえられた者たちは身代金を払うので釈放しろと騒ぎ立てた。
しかし元々国王軍に組した領主は戦後に財産と土地と爵位は没収だと通達しているという話をすると、顔を顔を真っ青にして心を入れ替えて反国王軍に下ると言い出した。
その嘆願に翁は「状況も読めない愚か者は必要ない」と縛られたままの領主達を牢屋へ入れるように命じた。
今回捕まえたり討ち取った領主達は国王軍派の支配地の領主が多く一族を抑える事は出来ていないが、領主も兵も居なくなりよっぽどのことが無い限りもう出ては来ないだろう。

国王派領主軍を圧倒的に撃退した事は瞬く間に伝わった。
国王派で近くまで来ていたが心変わりをしてこちらに付く領主も出てきて、数は５０００程に膨れ上がった。

斥候に出ていた兵から続々と「大砦に領主軍が集まっている」という情報がは入る。
大砦のもともとの人数は焼く１０００。
集まった国王軍派の領主たちは約６０００。

７０００近い兵が集まっているようだ。
日が落ち辺りが暗くなる頃に赤と白の騎士団が大砦に入ったと知らせが届いた。
その内の一人の斥候が周りに気が付かれない様に翁に言葉を伝え何かを手渡す。

部屋に姫と爺と翁と領主と僕と美女さんが残る。
「姫宛に預かったようです」と手紙を差し出した。
聞けば斥候途中に騎士団の斥候と出会い戦闘になって取り押さえられたらしい。
どこの所属かと聞かれ黙っていると、その騎士団は姫に必ず渡して欲しいと手紙を渡し開放してくれた。

姫が封を開けるとさらに封筒が入っていた。
短く「若殿へ。人定前（２１時頃）あの場所からで待つ」と描かれていた。

相手は赤の騎士団中隊長で「あの場所」と言うのは話をした場所だと思われる。
みんなに説明する。
「一人で行くのは危険だ」と言う意見が出たが相手も少数だろうし、他の領主に悟られても面倒なのでからこちらも少数で行くと伝えた。
一番「危険です」と言っていたのは姫だったが、美女さんと爺が付き添うという話で納得してもらった。

黄昏（こうしん、２２時頃に）美女さんと爺と翁の兵士隊長のほかに３名ほどの兵を連れ立って斥候の為という建前で小砦を出た。

第１４話　憧れ

約束の時間より早かったが、約束の場所に着くとすぐに一人の人物が近づいてきた。
赤の騎士団中隊長である。
彼は僕達を見ると一言「こちらへ」と言い、歩き出した。

少し離れた場所に案内され、そこで数人の人物と落ち合う。
赤の騎士団中隊長が「連れてまいりました」というと相手は頷く。
こちらを見るとまずは爺に挨拶して僕の方へ向くと「赤の騎士団副団長です」と挨拶した。
思ったより若く３０代といったで赤の騎士団中隊長の方が年上かもしれないというのに驚いた。
僕も名を名乗る。

赤の騎士団副団長「話は伺いました。」

魔王『なかなの手馴れだな。』

赤の騎士団副団長「本来ならこの場に白の騎士団副団長も来る予定だったのですが、さすがに両騎士団副団長が大砦を出るのは不自然であった為に断念しました。」

代わりに白の騎士団からは連隊長２人がきていた。
魔王が『今回もどの様に話を転がして楽しませてくれるか傍観させてもらう』とうれしそうに言う。人事だと思って！

赤の騎士団副団長「貴方の話は突飛無く、とても正気は思えない。」

僕「―そうでしょうか？」

赤の騎士団副団長「敵を前に手を拱(こまね)いているのは騎士団の規律に反する」

白の騎士団連隊長をみやる。
どうやら話は赤の騎士団副団長が担当するらしい。
その赤の騎士団副団長の目をしっかり見ながら告げる。

僕「敵と言うのは誰のことでしょう？」

赤の騎士団副団長「もちろん、貴方達反逆軍です」

僕達は反逆軍らしい。

僕「僕達は反逆軍ではないですよ？」

赤の騎士団副団長「では何だと？」

僕「国と民を憂いて奸臣を打つべく立ち上がった、いわば王国軍ですね。」

相手が国王の地位、突き詰めればその周りの甘い汁を好き放題吸っている者達の地位を守る為の国王軍だとしたら、僕達は国や民の将来を思い立ち上がった王国軍である。

僕「まぁただの言い方の違いでしかないのでどうでもいいですけどね。それほどまでに僕の意見は実現不可能ですか？」

赤の騎士団副団長「可能不可能の話ではなく、騎士団の規律に反する言っている」

僕「規律とは？敵前逃亡や戦闘放棄がですか？」

赤の騎士団副団長「そうですね」

僕「敵とはなんでしょう？」

赤の騎士団副団長「……」

僕「いえ、この話はいいでしょう。時間もありません」

本当の敵は団長を捕らえている王国軍側という話をしても意味が無い。
そんな事はとうに理解しているはずだ。
それでも彼らはそれでも団長を案じ今の状況に身を置いているのだ。

僕「このままでは遠く無い未来に団長が処刑される可能性は？」

赤の騎士団副団長「…そのような事が無いよう行動しています」

僕「どのように？」

赤の騎士団副団長「戦で功績を立て、我らの存在意義を示し続ける事です」

僕「その結果、騎士団は疲弊していき脅威と看做(みな)されなくなり、結果団長は処刑される事になると」

僕の言葉に赤の騎士団副団長が口を閉ざす。

僕「どうせ黒の騎士団長辺りからも無理難題を押し付けて貴方方の戦力をそごうとしているんではありませんか？」

赤の騎士団副団長は微動だにしない為に何を考えているのか分からない。

僕「もし両騎士団が僕の案に乗ってくれたら、騎士団長を取り戻せるかもしれません。」

赤の騎士団副団長が「案に乗った前提での作戦」に興味をしめす。

僕「まず聞きたいのは幽閉されている場所はわかりますか？」

赤の騎士団副団長「王宮の一の郭の館に軟禁されています。」

僕「城の地下の牢だったり高い塔の上ではないんですね？」

赤の騎士団副団長「兵は多く配備され我々は一切近寄る事は出来ないが、さすがに我々を刺激しないように配慮はされています」

僕「そんなに多くの兵を配備されているのですか？」

赤の騎士団副団長「せいぜい５０といった所で騎士団長は一の郭内だったらある程度の外出も許されているが、その場合は護衛と称した見張りが大人数付いて回るようですね」

僕「もし騎士団団長を助け出すとなると、相手は見張りの５０人程度だけですか？」

赤の騎士団副団長「館の周りは５０名しか居なくても何かあれば周りから倍以上の数が集まってくるので、場外に逃げるまでに取り囲まれてしまうでしょう。」

僕「一の郭に騎士団は上がれますか？」

赤の騎士団副団長「騎士団本部は二の郭にあり、日中は門が開いているので騎士団なら通れますが必要なければ行く事は無いですね。」

僕「すでに騎士団長が処刑されている可能性は？」

赤の騎士団副団長「月に何度か、騎士団長の家の者が騎士団長の状

況を報告してくれてます。その者は騎士団長の家に古くから仕える者なので信用できる人物です。」

僕「ならよかった」

もし近寄れない場所だったり騎士団長が衰弱してると難しかったが何とかなりそうだ。
僕は騎士団長救出作戦の方法を伝える。

僕「大砦は王宮から物資を運んでいると思います。多くの国王軍派の領主が集まったので、これは当たり前の事です」

頷く赤の騎士団副団長。

僕「しかも黒の騎士団も出てくるとなると大砦の蓄えではすぐに備蓄がなくなってしまうでしょう。」

赤の騎士団副団長「それが？兵糧攻めでもするのですか？そちらにもそれほどの蓄えはあるとは思えませんが」

僕「ああ、大砦は両騎士団が手を結んでくれれば半日で落とせるので問題ありません」

赤の騎士団副団長「何ですって？いくら我らが手を結んで参加しなくても黒の騎士団４０００と国王派領主軍で１万近い数が居るんですよ？」

僕「その話は後にして順番に話しましょう。まずは団長救出の話です。」

赤の騎士団副団長「……」

僕「補給物資は大切です。奪われる事も考慮して騎士団が受け持っているのでは？」

赤の騎士団副団長「そうですね。」

僕「それを使います」

赤の騎士団副団長「物資を送るなと？無理です」

僕「いえ、違います」

赤の騎士団副団長「では何を」

僕「王宮に戻る補給部隊に紛れて両騎士団の騎士を王宮にひそかに戻すのです。」

赤の騎士団副団長「どうやって？」

僕「戦力を殺ぐ為に、きっと両騎士団は不利な状況で前線へと送られます。」

赤の騎士団副団長「……」

棒「その戦いで一部の人は死んでもらいます」

赤の騎士団副団長「！」

僕「そうして死んだ人たちは隠れて潜み、補給部隊が帰るところに合流して王宮に隠れます。王宮にも騎士団の詰め所などで隠れれる場所はありますよね？」

赤の騎士団副団長「え、ええ」

僕「数は１００名程度、できれば２００名居れば大丈夫だと思います。数日隠れる場所はありますか？」

考えて頷く赤の騎士団副団長。

僕「僕達は騎士団が兵を王宮に送り込んで準備が出来たら大砦を攻め落とします。」

赤の騎士団副団長「どうやって」

僕「そこでまた両騎士団に手を貸してもらいます。」

訝しそうに繭を潜める赤の騎士団副団長。

僕「黒の騎士団のメンバーも元は両騎士団の団員だった聞きます。」

赤の騎士団副団長「ええ」

僕「取り込んでください」

赤の騎士団副団長「何？」

僕「一斉放棄の仲間に取り込んでください。大砦攻略の際に黒の騎士団の一部と両騎士団にやってもらいたいことがあります。」

赤の騎士団副団長「あからさまな裏切りは団長の身を危なくするので無理です」

僕「伝わらなければ大丈夫ではないですか？」

赤の騎士団副団長「というと？」

僕「大砦を攻める際は両騎士団は外からの大砦との挟撃を進言し出てください。」

赤の騎士団副団長「進言しても無視されるかもしれない。」

僕「黒の騎士団と国王派領主軍あわせて１００００近くいます。その上で大砦に守られています。両騎士団が疲弊するのを望むので問題なく通るでしょう」

赤の騎士団副団長「……」

僕「両騎士団はそのまま大砦と王宮の道と僕達が包囲していない方面に隠れてください」

無言で先を促す赤の騎士団副団長。

僕「次に僕達が大砦を攻めだして幾許(いくばく)かした時に黒の騎士団達には騒ぎを起こして貰います。」

赤の騎士団副団長「騒ぎ?そんなのすぐに取り押さえられてしまうでしょう」

僕「数人ならそうですが、黒の騎士団の大半は両騎士団の団員と聞きました。それにも関わらず少数しか取り込めませんか?」

赤の騎士団副団長「……そんな事は」

僕「では成功するでしょう。内容は『裏切りだ!領主が逆賊に内通しているぞ。』です。そうして周りを煽りながら言いまわってもらいます。」

赤の騎士団副団長「それでもすぐにばれてしまう」

僕「一時の混乱で構いません。そうして混乱した中で門の警備は自分達が行うと言い張り門を制圧してもらいます」

赤の騎士団副団長「……」

僕「その後。門を開けてもらい我々が突入して制圧します」

赤の騎士団副団長「黒の騎士団にいる我々の仲間の身の保障は?」

僕「大砦の一部、3箇所程度に安全箇所を設け、そこにいる黒の騎

士団には手を出さないという方針で行きましょう」

赤の騎士団副団長「その事に対しての信頼は？」

僕「信じてもらうしかありません。我々も攻撃されないと信じて放置します。もし安全地帯の黒の騎士団の中に黒の騎士団長派が居た場合はそちらで制圧してもらえると助かります。立ちはだかる黒の騎士団は黒の騎士団長側として討ち取らせて貰いますが。」

赤の騎士団副団長「戦場です。仕方ありません」

僕「門が開いて両騎士団と黒の騎士団の一部が放棄すれば、残りは国王派領主６０００と黒の騎士団の残り。我々の軍は王子が合流すればそれ以上になる。しかも相手は混乱している。半日も持たずに大砦は落ちます。落ち延びる領主達は両騎士団で誘導して我々の軍隊にまで引っ張ってきてください。」

赤の騎士団副団長「それで？」

僕「取り囲んで武装解除の後に捕らえます。両騎士団が味方のところまで送ります。といえば信じるでしょう」

赤の騎士団副団長「…騎士団長救出の方法は？」

僕の話を聞いていた赤の騎士団副団長は、大砦の話が一段落したら聞いてきた。

僕「それは両騎士団に行ってもらいます」

赤の騎士団副団長「方法は？」

僕「大砦から王宮の間の道を塞ぎ、大砦と王宮からの伝令をは全て捕まえてください」

赤の騎士団副団長「それで？」

僕「騎士団から伝令に扮して偽の情報を伝えます。それは大砦が伝令を送らなくてもです」

赤の騎士団副団長「ほう」

僕「内容は増援を求める伝令といった所でしょうか。」

赤の騎士団副団長「それでは兵が来てしまって大砦が落とせないのでは？」

僕「来るまでに十分落とせます。」

赤の騎士団副団長「……」

僕「大砦を取られると喉元にナイフを突きつけられるのと同じなので、王宮から慌しく出兵の準備に入ると思います。その混乱を狙って団長を守る警備の兵に入れ替わって団長達を連れ出してください。その際に危険ですが身代わりで残る人物が必要です。」

赤の騎士団副団長「……団長の身代わりなら喜んでなるでしょう」

僕「連れ出してもすぐに外に出るのは危険です。ですので団長は隠

れていてください。」

赤の騎士団副団長「すぐに城を抜けた方がいいのでは？」

僕「出来そうならいいですが城を抜け出せない場合もあるかも知れません。もしもの為に、その後の脱出の機会は我々が作ります。」

赤の騎士団副団長「どのように？」

僕「大砦を奪った僕達は大砦の先の領地を攻め、王国軍に加担した領主の一族の身柄を拘束します。殆どの者が領地には家族を残し兵は少ししか居ないでしょう。そこに2～3000の兵で攻めます。もちろんわが軍派略奪暴行は死罪としてますので行いませんが、手向かう場合は切り捨てていいと伝えます」

赤の騎士団副団長「自分の領地を守る為の兵に紛れて城を脱出するという事ですね」

赤の騎士団副団長の言葉に頷く。

僕「はっきり言ってザルと言っても良い程の作戦です。殆どを両騎士団にお願いしている上に、方針は伝えましたが細かい『隠れる場所』や『どうやって警備兵と入れ替わる』など、色々な部分を丸投げしてます」

赤の騎士団副団長「……」

僕「そもそも両騎士団が拒否したら一つも実行できない辺りがもう

ダメですね」

赤の騎士団副団長「……」

僕「だからお願いするしかありません。一緒に手伝ってください。」

赤の騎士団副団長「……」

僕「団長を取り戻すついでで構いません。」

僕を見つめていた赤の騎士団副団長が「いいですか？」と呟く。

僕「なんでしょう？」

赤の騎士団副団長「この国の者では無い貴殿がここまでする理由は？」

僕「姫に出会ったから、ですかね？」

赤の騎士団副団長「？」

僕「偶然なんですけどね。でも姫と友達になったんです。」

赤の騎士団副団長「……」

僕「……」

赤の騎士団副団長「…それだけ、ですか？」

僕「え?すですけど?」

他にどう言えばいいんだろう?
何か言わなきゃと思い、考えて思いついた事を言う。

僕「姫の手を取って国を救う為に戦うって、囚われの姫を救う事の次ぐらいに子供の頃に憧れた状況じゃないですか?」

白の騎士団連隊長が「確かに―」と呟いたのが意外と大きく響いた。
その声に騎士団のメンバーが笑う。

赤の騎士団副団長「確かに!私も昔は憧れたものです!」

豪快に笑うと赤の騎士団副団長の張り詰めていた気配が和らいだ。

赤の騎士団副団長「実は貴方の案に乗る事は決定していました」

―なんという驚きの事実!今までの緊張感を返せ!!

赤の騎士団副団長「だが私自身も貴方の人となりを見たかったためにああいう態度をとらせてもらいました。」

失礼な態度で申し訳ありません。という赤の騎士団副団長。

赤の騎士団副団長「それがまさか団長救出まで考えているとは」

僕「穴だらけの計画ですけどね」

赤の騎士団副団長「確かにそうですが、我々の用意していた方法と組み合わせれば実現可能だと思います」

僕「では―！」

「手を組みましょう」と頷く赤の騎士団副団長。
あまりのうれしさに差し出された手を飛びつかんばかりに掴んでいた。

その後、連絡の取り方や決行日を決めると互いの陣に向けて戻った。

第１４話　憧れ（後書き）

サブタイトル付けてみました。

第15話　新兵器

赤の騎士団服隊長との密会の帰り。

僕「これで大砦はなんとかなりそうだけど、問題は王都か―」

爺「そうですな」

僕の呟きに爺が答える。
まだ大砦攻略を攻略していない状態で別の事を考えるのは良くないとだとは分かっている。
でも次の展開を考えておかないと行き詰ってしまう。

僕「王都を攻めるこれと言う手が思いつかないんですよね」

爺「手ですか―」

僕「このままだと兵力では相手に勝る事が出来るだろうけど、王都に篭もられて攻めあぐねてしまう」

爺「そうなると長期戦になりますな」

僕「王都はどれくらいの間、篭城できると思いますか?」

爺「そうですな、月の満ち欠けが2周するくらいは持つやも知れません」

約2ヶ月と言ったところか。

僕「それだけ時間を掛けるのは気厳しい？」

爺「こちらの兵糧の問題などはどうにかなるとして兵の士気の維持と隣国の状況がどうなるか―」

僕「隣国が攻めてくる可能性が高い？」

爺「さすがにそれだけ時間を掛けると来られても防ぎようがありませんからな」

僕「出来るだけ短期で決着をつけないとダメなのか」

王都の状況を知らない状態で考えても何も思いつかない。

―戻ったら情報を集めよう

そう決めると帰路を急いだ。

―――――――――――

翌日の夕方に王子達の軍勢約６０００が小砦に合流し、これで合計１１０００程になった。
すぐに王子と騎士団長を含めて現状と明日以降の確認が始まった。

王子「お待たせしました」

姫「道中大丈夫でしたか？」

王子「途中、白の騎士団に阻まれましたが、途中で撤退していったので大した被害も出ずに済みました」

みんなと挨拶をした王子と騎士隊長に赤白両騎士団との密約と大砦の攻略に付いて説明すると「なるほど、それでですか」と納得が行った様だ。

大砦の今の戦力は黒の騎士団が到着して１５０００程になっていた。
現状は大きな戦闘は起きておらず、小康状態となっている。
赤白騎士団の戦死偽装は順当に進み王都にある程度送る事は出来ているようだ。

王子「では大砦攻略は明後日決行という事でいいでしょうか？」

翁「そうですな。あまり時間を掛けると相手が攻めてくるやも知れませんしな」

やれる事はある程度やった。
後は実行するのみである。
話し合いは手短に終わり解散となる。

皆が席を立つ中、疑問に思った事を爺に聞く。

僕「明後日の大砦の編成を聞いて思ったのですが、攻城兵器の話は無かったのですがどれくらいあるんですか？」

騎兵や槍兵などは記載されているが攻城兵器の話は出なかった。

爺「こうじょうせんへいき、ですか？何でしょうかそれは」

僕「城を落とす為の武器と言うか道具です」

爺「そういうのとなりましと、丸太は予備も含めて2本、大槌は数本、後は梯子を数十台という所ですね。」

僕「それだけですか？」

爺「少ないですかな？大体こんなものですが」

僕「数ではなく、他に何か無いんですか。」

爺「他と言われましても―」

どうやら他には無いらしい。
それならもし作れば戦を優位に進める事が出来るかもしれない。
出て行こうとする王子と王を呼び止める。

僕「攻城戦の兵器などは無いと伺いました。作って使えば王都の攻略が有利に進むかも知れません。」

王子「へいき？」

僕「城を落とす為の武器です」

王子「落とすと言うと？」

僕「門や壁を壊すようなものです」

翁「丸太や大槌のようなものですかな」

僕「いえ、大きな岩を飛ばしてぶつける道具です」

翁「大きな岩を？」

僕「応用すれば油の入った樽などを投げる事も出来きますね」

翁「それはどういったものですかな」

僕は木のスプーンに小石を乗せ、スプーンをしならせて小石を飛ばす。

僕「原理はこれです。これを大きく作れば子供くらいの岩なら飛ばせるようになると思います」

それを聞いた爺は工兵長と数名の工兵を呼び出した。
工兵長達が来るまでの間に魔王に確認をする。

―この世界には伸び縮みする素材と言うのはある？

魔王『どんなものだ？』

―強度があり、引っ張ると急激な勢いで元に戻るような奴

魔王『そういうのは無いな』

―そうか、ありがとう。

現れた工兵長達に「今から若の話を聞いて作れるか言ってくれ」と言うと話を促した。
僕は先ほどと同じようにスプーンで小石を飛ばす。

僕「これを大きなサイズで作ります。」

工兵長「大きくとはどれくらい？」

僕「スプーンの部分だけでも人の2倍」

工兵長「そんなに？」

僕「それくらい無いと大きなものは飛ばせません」

工兵長「大きいのはいいとして、飛ばす勢いはどうやって作るんですか？」

僕「錘（おもり）でつけます」

工兵長「錘をどうするのですか？」

僕「スプーンの柄の部分の下の方に棒を通します。」

僕は説明をしながらスプーンの柄に木の枝をあてる。

僕「これで木の枝を持てばスプーンは回ります。木の枝を左右から支え、自由にスプーンが自由に回転するようにします。」

工兵長「ふむふむ」

僕「スプーンの柄の部分の方に錘をつけます。錘の重さは飛ばすものの2倍はいるでしょう」

工兵長「なるほど！それで物を載せた後に錘の重さで飛ばすんですね。」

僕「ええ、柄と錘のが床に付かない様にするといいかもですね。」

古兵長「ふむ」

僕「それとスプーンの物を乗せる方は紐で引けるようにしてください」

工兵長「そうですね、。そうしないとなかなかスプーンをおろせません」

僕「そうして紐を引く方法は巻き取り式にしましょう」

工兵長「巻き取り式ですか」

僕「その方が人の手で引くより力強くひけるしね。小砦の跳ね上げ式門と同じ構造でいいと思います。あれに少し手を加えれば」

工兵長「手とは？」

僕「あのままでは引いた後に元に戻らないようにしないといけません。それを勝手になるように細工が必要です。」

工兵長「ほう」

僕「歯車を2つ重ねて一方は逆に回らないように細工します。そうすれば勝手に戻る事も無いでしょう」

工兵長「その状態だと飛ばす事も出来ないのでは？」

僕「逆にしか魔わらに歯車を横に滑らせる事が出来るようにして、発射のときに横に移動させればいいんです。」

工兵長「なるほど！」

僕「横に滑らせたり戻す方法も考えないと手をはさむと危ないですけどね。そこら辺は無ければ無いでしかたありません」

工兵長は「考えてみます！」というと他の工兵たちとあれこれ話し出した。
翁が「どれくらいでできる？」と聞くと「試作品は今晩中にと」工兵長は言った。

工兵長「でも試し打ちをしたり改良したりで数日は必要です」

翁「明日の大砦攻略には間に合わないか」

工兵長「はい」

僕「大砦は攻略法があるので必要ないでしょう。王都攻略までに間に合えば」

工兵長「それまでにはいくつか作るようにします。とりあずは今から製作にとりかかります」

そういうと工兵たちは部屋を飛び出した。
明日の朝には試作機が出来るらしいので、とりあえずは明日にその

出来を確かめようと言う事になった。

―――――――――――

翌朝、兵器の試作品が出来ていた。
すぐに小砦のすぐ横の広場から平野に向けて試し打ちが始まる。
岩は小砦に常備している岩を飛ばす。
飛んだ距離にさほどの誤差が無い事を確認をした後に棒を取り外す。
どうやら長さの違う棒が何種類かあるようだ。
その後何個か飛ばした後に一番飛んだ長さを選ぶ。

次は距離を測り大きな岩に向かって飛ばす。
何回か外した後に直撃した岩を確認。
岩にヒビが入っているのを見て工兵長が頷く。

工兵長「数を作って同じ場所に何発も打ち込めば壁も崩せそうです」

翁「距離は最大どれくらいだ」

工兵長「岩が転がる範囲で良いなら弓の範囲外からでもいけますが、
壁に当てるとしたら弓の射程内に入るしかありません。」

翁「射程は変えれるのか？」

工兵長「距離を伸ばす事は無視でも引く長さを変える事で短めに飛ばす事も可能です」

翁「なるほど。王都攻略までにどれくらい作れる」

工兵長「作り自体はさほど難しくありませんので慣れれば一日十何機かは作れるでしょう。持ち運び用に組み立て式にします。これにより数も運べるでしょう」

翁「そうか。それに平行して飛ばす為の岩も用意するようにしよう。すぐに作成に取り掛かってくれ」

工兵長「はい！」

今日中だけでも数機は作れるので試しに大砦に持っていくか？という話も出たが、出来るだけ敵に新兵器の情報を知られないほうが良いという話になった。

僕は弓の範囲から出れないと聞いて岩を取り付けたり発射したりする人が矢から身を出来るだけ守れるように盾を付けるようにお願いした。

この案に工兵長は「わかりました」と頷いてくれた。

―――――――

大砦の攻略を明日に控え小砦内は忙しくなる。
忙しくなっているのに全然忙しくない僕。

―なんで皆あんなに忙しそうなんだろう

魔王『明日の戦に向けて準備があるからだろう』

―なんで僕は忙しくないんだろう

魔王『ああいう者の殆どがああやって準備をしている雰囲気を出しているんだ。実際には戦の準備などする必要が無い者ばかりだ』

―何の為にそんな事を?

魔王『不安だからだ。ああやって明日への心構えなり諦めを付けていくのだ』

―やっぱりみんな不安なんだね

魔王『まあ上に立つものは本当に色々忙しいんだがな』

―うん、僕は上に立つものじゃないからいいんだ

魔王『美女も色々急ぎそうだな』

―…うん、僕は上に立つものじゃないからいいんだ

その時、美女さんが部屋に入ってきた

美女さん「若、ちょっと手伝ってもらっていいですか？」

僕「もちろん！」

美女さんに連れられて廊下を歩く。

―やっぱりやる事があるっていいよね！

魔王『そうだな―』

廊下を進み扉の前に立つとノックをし「若をお連れしました」と言葉を掛けるする美女さん。

中から「どうぞ」という声と共に中に入る。

あれ？ここは―姫の部屋？

中に入ると王子と爺と翁がいた。

どうやら姫に何かを言っているようだ。

妖精少女が姫の横に腰掛けて姫を心配そうに見ている。

何でこんな所に呼ばれたのだろう？

爺「おお若、忙しい中わざわざ済みませんな」

魔王『忙しくないがな（うるさいよ！）』

僕「いえ、どうしたんですか？」

爺「姫が今回の大砦攻略に参加すると言い出されまして。」

今回のというより今後の戦は姫は出陣しない事になっていた。
出陣する兵士達に激励を送った後は後方で待っていてもらう事になっていたのだ。
それが何故か前日になって自分も行くと言い出して聞かないらしい。

王子「姫姉さまの説得をお願いします」

僕「は？」

王子「姫姉さまの説得をお願いしたいんです」

翁「ワシらは準備があるでな」

爺「また来ますのでその間、説得をお願いします」

美女さん「さ、妖精少女も一緒に手伝ってください」

妖精少女「うん」

そういうと子狼を抱いて皆出て行ってしまった。

―あるぅえ？

魔王『はめられたな』

―だよね！

腰を下ろして俯く姫を見る。
とりあえず向かいにある椅子に腰を掛ける。

僕「姫」

ビクッとする姫。
なんで怯えてるんだろう？

僕「姫、何で今更行くと言い出したんですか？」

姫「……」

僕「前に話し合ったときには残る事に納得してくれたじゃないですか？」

姫「……」

僕「姫、（友達の）僕にも言えない理由ですか？」

姫「…大砦攻略で多くの兵が危険に見舞われ帰らぬ事もあると思うと、私だけが安全な場所に居られません！」

僕「そうか―でもね、姫。姫が戦場に出るとその分だけ守る為に兵が裂かれる。そうなるとどうなるか分かりますか？」

姫「―」

僕「大砦を守る人間が減ります。その分、戦が伸びて傷つき倒れるものが増えます」

魔王『極論だな』

―そうだけどね。仕方ないよ。

姫「それでも―」

僕「それを分からない姫じゃ無いと思うんだ。」

姫「でも―」

僕「その上で我侭を言う本当の理由は何なんですか？」

その言葉に姫が声を詰まらせる。

僕「本当の所が分からないと僕は賛成も反対も出来ません」

姫が言いよどむ。

僕「僕は姫の味方で居たいと思う。でも危ない目にもあって欲しくないと思う」

姫「…みんなが心配だからです」

姫が話すのをゆっくり待つ。

姫「王子が、爺が、翁が、美女さんが、わ、若が―」

―そうか、優しいからこそ心を痛めて悩むのか。

「姫」と呼ぶと顔を真っ赤にして俯く肩がピクッとゆれる。

僕「大丈夫です。（僕達は）必ず貴方の元に帰ってきます」

姫「えっ？」

僕「貴方を悲しませるような事が無いよう、必ず（みんなで）！」

そう伝えると顔を真っ赤にしながら「―待ってます」と姫は呟いた。

僕「姫が無事を祈ってくれるだけで（兵士達は）それを励みに戦えるのです。笑顔で送って笑顔で出迎えてください」

魔王『またか？またなのか？』

魔王が何か言っているが良く分からない。
姫は「――」言葉に出来ない声を出しコクコクと頷く。
分かってくれた姫に一安心をし「爺たちを呼んできましょうか」と席を立とうとした時に姫が「あっ」と呟く。

―ん？何か言いたいのかな？

魔王『……』

魔王の呆れる雰囲気を感じ立ち上がるのを辞める。
きっと「僕が気が付いていない何か」を見落としているはずだ。
今ここで立ち去るのは良くないらしい。

―でも見落としているんだろう。姫の何かかな？

姫を見ると俯いてはいるがこちらをちらちら見ている。
でも決して真っ赤な顔を合わせようとはしない。

―どういう意味の態度なんだろう。

深く注目する。

―顔が真っ赤で恥ずかしそうにこっちを盗み見てる。そして僕が出て行こうとすると何か言おうとした？

そこで僕はひらめいた！

―そ、そうなのか？

僕「と、思いましたが爺も準備に忙しいといってましたし、後で来るといってましたので急ぐ必要は無いですね」

その言葉に姫が顔を上げる。

僕「時間もありそうですし、よければお話しませんか？最近姫と殆ど話す機会も無くて残念に思っていたんです」

真っ赤な顔をこくこくと頷く姫。

―やぱりそうか！うれしいな！

魔王『一応、何に気が付いたか聞いてみようではないか』

―姫は待つと決め手も怖いし不安なんだ

魔王『…それで？』

―だから独りになりたくないんだ！

魔王『……そこから導かれた答えは？』

―僕を友人としてた頼ってくれている！！

魔王『ナンダッテー！』

本当にうれしい！

うれしさが溢れた僕は笑顔があふれ出してにやけ顔が止まらない。

「話そう」と言っても話題が見付からないのか視線を泳がせる姫

僕「姫、別に何でもいいんです。時間はあります。」

姫「は、はい」

僕「僕は（爺たちが来るまで）ここに居ます。話す言葉を無理に捜

す必要尾ありません。無言でもいいじゃないですか。ゆったりした時間を過ごしましょう。思いついたら何でも話せばいいんですよ」

僕は出来るだけ姫がリラックス出来るように話しかける。
本当はここでいろんな話題で話を盛り上げることが出来たらいいんだけど、現実世界で女の子と話した事が皆無に近い僕には引き出しの中が空っぽだ。
実際は僕自身が沈黙に耐えれないからああ言っただけだ。

―こういう時はどういう話をしたらいいんだ！

魔王『だから何でもいいんだろう？』

―そうだけど取っ掛かりが無いよ。

沈黙が部屋を包む。気まずい。
容量の少ない脳味噌をフル回転させて思いついた事を口に出してしまう

僕「妖精少女は―」

―なんで用事も無いのに部屋から連れ出されたんだろう？

魔王『…馬鹿か？』

この質問はダメらしい。
別のを、と思ったら姫が「え?」と反応した。
えーと。

僕「―最近どうですか?」

姫「最近?」

僕「あ、え、姫に任せきりになってるので元気にしてるかな?とか迷惑あけてないかな?とか」

姫「迷惑なんて事は全然ありません。妖精少女と居ると心が暖かな気持ちになります。逆に一緒に居れて嬉しいです」

「私、昔に妹が欲しかったんです」と微笑んだ。
姫の笑顔に選択が間違えてなかったと思ってほっとした。

その後はものすごく弾むという訳でもないけど会話が長時間途切れる事も無く、ゆったりとした時間は爺たちが来るまで続いた。

第１６話　大砦攻防戦

「―みなさん、無事帰ってきてください」
姫の演説が終わった。
本来なら１万近い人物に肉声が届くはずは無いが、妖精少女が風の精霊にお願いをして声を遠くまで届けてくれているらしい。
各所で敬礼の合図が係り兵士が敬礼をする。

次に妖精少女が呼ばれる。
いつの間にか殆どの兵が「妖精族は幸運を運ぶ」と言う噂を信じている。

最初は翁の妖精少女の立場を守る為の粋な嘘だった。
次に姫と王子の無事は妖精少女と出会ったお陰だという噂がたった。
そこから小さな噂が聞こえて来るようになった。
「出陣前に妖精少女に会った斥候部隊が敵陣深くまで入り込んだにもにも関わらず損耗０で帰還した」
「翁の部隊が当初から妖精少女を熱烈に崇めているらしい」
「妖精少女を馬鹿にした部隊が部隊を維持出来ない状態になったらしい」
「妖精少女に『頑張って』と言われた部隊が赤や白の騎士団と何回も出会っても死者０で戦果を上げている」

最初の斥候はたまたまだと思う。
翁の部隊は妖精少女へと言うより美女さんへの信仰だと思うけどね。
妖精少女を馬鹿にした部隊は不和を警戒した翁に解散させられバラ

バラの部隊に配置されただけ。
最後のは僕達の部隊で、両騎士団とヤラセを行ってるだけです。ありがとうございました。

こういう偶然と勘違いとこじ付けが殆どの兵士が信じだしていた。
もちろんずっと姫と一緒にいる事や人見知りする性質などから人目に滅多に出ないのも噂に拍車を掛けているらしい。

台に上がった妖精少女は王女の後ろに隠れながら「…頑張って」と一言小さく言った。
その小さな声が風に乗って端まで届く。
その声を聞いた兵士達が号令も無く敬礼をしていく。

魔王『新たな宗教が生まれるかもしれないな』

―ありえそうだから怖いよね。

その後、王子の挨拶があり「出陣」の掛け声と共に先発隊から随時出発していく。
僕達は遊撃なのでいつ出発とかは無いが、とりあえず王子の部隊と一緒に行くことにした。
さすがに万を越える数になると出陣も一苦労である。

続々と出発する部隊を見ながら王子と会話していると姫と妖精少女が来た。

2人の足元を転がるように子狼も一緒にくる。
周りの兵が敬礼する。

姫「気をつけてくださいね」

王子「はい。大砦で会いましょう」

姫は僕の方を向く。

姫「ご武運を」

僕「ありがとうございます」

妖精少女「頑張って！」

僕「ありがとう。妖精少女も子狼と一緒に姫をお願いね」

妖精少女「うん！」

妖精少女の頭をなでて言うと笑顔で頷いた。
すると近くの部隊から「出陣！」と聞こえてきた。
そろそろ僕達も出る時間だ。

僕「では行ってきます」

姫「…どうかご無事で」

僕「はい、必ず無事に戻ってきます」

見送る姫と妖精少女に手を振り、僕達は小砦を後にした。

――――――――――

？時（ほじ、１６時ごろ）、日が傾きだした頃に小高い丘に立つ大砦が視界の先に見える。
進軍を一度止めて隊列を組む。

反国王軍　総数約１１０００

大砦攻略　約１００００
本隊、王子、騎士隊長、兵数約４０００
右翼、翁、兵士隊長、兵数約３０００
左翼、現領主、領主息子、兵数３０００
遊撃、僕、美女さん、兵数約２００

小砦待機
姫、爺、妖精少女、兵数約１０００

対する国王運は大砦に篭るつもりらしい。
斥候の話では赤と白の騎士団は首尾よく大砦を離れたようだ。

国王軍、総数約１４２００

大砦内　兵士計、約１００００
黒の騎士団、兵数約４０００（殆どが強戦闘放棄予定）
国王派領主軍、兵数約６０００

大砦外、兵士計、約４２００
赤の騎士団、兵数約１９００（戦闘放棄予定）
白の騎士団、兵数約２３００（戦闘放棄予定）

大砦の側でも塀の上に人が並ぶのが見える。

続々と編隊完了の知らせが届き王子の「前進！」と言う言葉にラッパが鳴り響き、至る所から「前進！」と聞こえ全軍がゆっくり進みだす。
四方に斥候隊が走り回り伏兵が居ないかを探し回る。
前進を続ける隊列の先頭に大砦からの弓が届くが、盾を掲げながら

も前進を続ける。
ある程度進んだ所でこちら側からも弓が届く範囲に入り弓を打ち出した。
弓矢の応酬が続く中、右翼と左翼がそれぞれ展開をしだし大砦を包囲する。

数刻が過ぎても敵の応酬は激しく兵が大砦に貼り付けない。
兵の損害も決して少なくない。
このままでは消耗戦で負けてしまうために一度引く事にする。
もし敵が追撃に出てきたらすぐに反転し野戦に持ち込もうというのだ。
後退のラッパが鳴り響き兵をじりじりと下げさせる。
そのまま矢の範囲外に出ても敵は追ってこない為に一度大きく後退をして態勢を立て直す。

反国王軍（死者、怪我人で先頭離脱を引いた数）
本隊、王子、騎士隊長、兵数約３９００
右翼、翁、兵士隊長、兵数約２８５０
左翼、現領主、領主息子、兵数２８００
遊撃、僕、美女さん、兵数１９５

隊列の立て直し、矢などを補充すると、すぐに再度進軍する。

矢の応酬が再開されて数刻、日は陰り大砦の兵に数え切れないほどのかがり火が炊かれる。
大砦の上の兵は倒しても倒しても次々と沸き壁に張り付く事は出来ず、どれくらいのダメージを相手に与えているかが全く見えない。

日が陰って少しして変化が起きる。
大砦の塀の上が慌しくなり兵の補充に隙が出来る。

―きたか！

偶々（たまたま）かもしれない。
はやる気持ちを抑え門の上の敵兵に弓を射る。
門の周りが騒がしくなったと思った瞬間に巻き上げ式の橋が倒れてきて門が開きだされる。

僕「突撃！城門を確保しろ！！」

僕の号令に遊撃部隊が弓を捨て剣を抜き盾を掲げて門へと馬を走らせる。

僕「仲間が来るまで門を死守しろ！」

門を閉じようと来る敵兵を切りつけながら叫ぶと半数の兵を連れて奥へと進む。
あっという間に敵が押し寄せてくるが敵は混乱しているようで統制が取れていないようだ。
部隊毎に向かってくる敵を切り奥へと進んでいると後ろでひときわ

多いな鬨の声が上がった。
騎士隊長が２０００程引いて門へ突撃してきた。

騎士隊長「若と美女殿に遅れるな！」

兵士「応！」

押し寄せる騎士隊長率いる兵隊で門の中は溢れかえる。

騎士隊長「無抵抗の者は武装解除だけして無視しろ！歯向かう者には容赦はいらない！」

元々、兵力的に無抵抗な人間を全員相手にする余裕は無い。
もし無抵抗な敵を無駄に切ってまた完全に敵に回られると数で負けるので武装解除だけして最低限の兵で見張る事に決まっており通達はしている。
だが戦場で興奮して忘れる兵も居るかもしれないので念を押しているのだろう。

騎士隊長「旗を持っている奴は塀の上の弓兵を処理しろ！」

門が先に敗れた場合など城壁などに上って敵を倒すが、その際に日が落ちた後などは味方に弓で射られないように合図を送る為に旗を用意したりする。

すぐに左右の壁へ２００ずつくらいの兵が登っていく。
混乱の為に立ち向かう敵は少なく2枚目の門の向こうに逃げようとする者が殆どだった。
だがその門も半分近くが閉まりかけている。
その門へ向かって走りながら僕は力の限り叫んだ。

僕「このままでは我らの味方が門の中に閉じ込められてやられてしまう！門が閉じる前に味方と合流するんだ！」

門を閉めようとしていた相手がぎょっとしたように後ろを振り返って身構える。
その男は何かを叫ぶと近くの男に切りかかった。
どうやら僕が叫んだ言葉に疑心暗鬼になって、たまたま目に付いた相手を敵だと認識したようだ。
その相手も自分が切りかかった相手が敵と内通していると勘違いをし、お互いの仲間同士で仲たがいを始めたようだ。
その間に距離を詰めた僕は半分閉まった門に無理やり突入した。

周りの敵を切り伏せながら３０名の兵にを守るように伝えさらに置くに進む。
しかし砦の建物の門は硬く閉ざされてしまっている為に仕方なく広場の敵の排除を行っているとすぐに後続の兵が雪崩込んできた。

すぐに砦の上の兵へ弓が雨のように打たれ、門を破壊する丸太が届く。

門は何回か丸太が当たると切れ目を大きくしていった。
そこに向かって丸太を打ちつけながら周りから大槌で門を叩く。
壊れた門の間から槍を突き出して応戦しようとしてくるがある程度隙間が大きくなった時に勢いをつけて丸太が門にぶち当たると片方の門が壊れて開いた。

すぐに敵が門からの侵入を防ごうと門へ殺到してくるのを見て弓矢を門へ向かって一斉に放つと臆したのか敵の足が竦んだ。
その間に突撃を命じると兵士達が門の間から内部へとなだれ込む。

僕「一般人と投降するものは傷つけるな！歯向かう者は一般人だろうと兵士だろうと容赦する必要は無い！」

僕は建物内部に入り、内部の人間に聞こえるように叫ぶ。
周りで部隊長が同じように周りの敵兵に聞こえるように叫んだ。

僕は美女さんと数十名の兵をつれて上の階へと上がる。
上に上がると数人の兵が廊下を塞ぐように立っていた。

僕「今、投降するなら命はとらないが？」

そう言うと頷き指示通り剣を鞘に収め床に置くと壁に向かって膝立ちになり手を頭に載せた。
兵士に剣を回収させて後から来た兵に階下へ連れて行くように指示する。

さらに上の階に上ると階下とは構造が違う広いフロアに黒の騎士団と思われる騎士が３０名ほど待ち構えていた。
投降を呼びかけたが無視したまま何も言わずにこちらに剣を向ける。

僕「投降しないと？」

無言のままこちらを見つめる黒の騎士団団員達。

僕「では交渉決裂ですね。行きます」

そういった瞬間に美女さんが黒の騎士団の中に飛び込んで１人切り倒す。
僕もすぐに飛び出して２人きりつけるとそのまま先に抜けて振り返る。
美女さんも同じ考えだったようで、これで黒の騎士団は僕・美女さんと他の兵に挟まれた状態になる。
あまりの事に呆然としたままの黒の騎士団が「投降する！」と剣を床に落として手を上げる。

僕「は？」

黒の騎士団Ａ「投降する」

僕「何故今更？」

そういうと彼は美女さんに切り倒された奴を指差して「…黒の騎士団副団長だ」と言った。

―弱！副団長弱！！

決して弱い訳ではないんだろうけど美女さんの相手では無かっただけという事か。

僕「では全員、武器から離れて頭で手を組んで床にうつ伏せになるんだ」

兵士達が武装解除を行うのを横目に見ながら黒の騎士団Ａに話しかける。

僕「黒の騎士団長と他の領主は上か？」

黒の騎士団長Ａ「…そうだ」

僕「この騒ぎに降りても来ないが、逃げた後か？」

僕の質問に首を振る。

黒の騎士団Ａ「…上に居る」

僕「どれくらい？」

黒の騎士団Ａ「黒の騎士団長と領主のお気に入りが合わせて２０名といった所だ」

僕「待ち伏せか」

黒の騎士団Ａ「―い――ている」

僕「は？」

黒の騎士団Ａの言っている意味が分からず聞き返す。

黒の騎士団Ａ「酔い潰れているッ！」

吐き捨てるように言う黒の騎士団Ａ。

どうやら黒の騎士団団長は来てからずっと酒を飲んで居たらしく、反国王軍との戦闘が始まった時も「ヤツラの足掻く様を見ながら飲むのも一興と」と領主達とお気に入りの部下を呼んで酒盛りを始めたらしい。

そうして今はもう皆酔いが回って剣も十分に振れない状態のようだ。

すぐに兵を上に上がらせて確認をさせると証言通り黒の騎士団団長と領主達が酔い潰れて居た為に苦も無く全員を拘束した。

それを確認して黒の騎士団長と領主達の身柄の拘束と戦闘の終了を告げる。
すると兵が窓に駆け寄り反国王派の旗を掲げると先頭終了のラッパを鳴らす。
すぐに至る所から勝利の歓声が聞こえて来た。

――――――――――

戦闘が終わって時間は深夜になったが大砦は慌しく人が動いている。
戦闘終了後、主だった人物が砦最上階に集まった。
どうやら全員無事だったようだ。

大砦攻略後戦力

反国王軍　総数約１００００　→　総数約８，２００（重傷者約３００名、軽症者多数。）
死者約１８００

それに対する大砦防衛だった国王軍は

国王軍、総数約１４２００　→　総数約１０５５０（重傷者１６００、軽症者多数）
死者２５５０、逃走者１１００
戦闘放棄者約８０００名

大砦内　兵士計、約１００００　→　約６３５０

黒の騎士団、兵数約４０００　→　兵数約３８５０（内、約３８００が元赤白騎士団）
国王派領主軍、兵数約６０００　→　兵数約２５００

大砦外、兵士計、約４２００

赤の騎士団、兵数約１９００（戦闘放棄）
白の騎士団、兵数約２３００（戦闘放棄）

投降拘束した兵だけでも約６３５０名。
全員を国王派領主軍と黒の騎士団と黒の騎士団（元赤白騎士団員）で別々に１０名ほどに分けて兵舎（６人部屋）に監禁した。

翌日の朝に美女さんと領主息子が兵２０００を率いて姫と妖精少女を迎えに大砦を出る。
兵数が重傷者を抜いて５９００ちょっとと厳しくなるが、姫をいつまでも兵数の少ない小砦に居てもらうのは心許ないので仕方ない。

昼過ぎに元国王派の領主が大砦より王宮側の領地を総兵数１５００程の兵で落とし、国王派の領主達の身内の身柄を確保して回る。
もちろん、前のときと同じく暴行略奪に対する刑は重くしている。
ただ今回は王宮から兵が来たらすぐに逃げるようには言っている。
赤白両騎士団団長が王都から逃げる為の牽制はしっかりしないといけない。
もちろん国王軍派の領主への脅しもあるけど。

翌日の昼前に大砦のバルコニーに立つ。

―やっと大砦攻略か

魔王『やっとだな』

―まだ王都があるのにこの兵数でどうにかなるんだろうか

魔王『そなたの言っていた新兵器もある。やるしかあるまい』

―そうだね

遠くをぼんやりと眺めながら魔王と取り留めない会話をしていた。
ここで姫達の軍勢が見えるのを待っているのだ。

どれくらい時間が経っただろうか。

大砦内部の広場が騒がしくなる。。

眼下に3騎の馬が大砦に飛び込んでくるのが見える。

入り口で兵士達に止められた3騎は下りるももどかししそうに兵士と何かを言い争っている様だ。

そこに兵を連れた騎士隊長が現れて3騎の兵に話を聞いていたが、周りの兵に幾つか指示を出すと何人かの兵が厩(うまや)へ走っていく。

3騎の兵は馬から下りると騎士隊長と兵達に囲まれて砦の中へと足早に入って行った。

騎士隊長と3騎の兵が砦内に消え、厩へ走った数名の兵が騎乗して大砦の外へ飛び出していくのを確認すると僕は状況を確認する為に翁の元へと向かった。

第17話　影響

翁「国王軍が来るらしい」

現れた僕に翁が言う。
先ほどの3騎はその事を知らせる為に来た斥候だったようだ。

翁「出兵した兵数はまだ不明だが、１０００や２０００じゃきかない数のようじゃ。」

王子「こんなに早くに兵を出してくるとは」

騎士隊長「赤白両騎士団の出した偽の伝令に載せられたのか。はたまた大砦攻略後の疲弊した我らを一気に倒してしまう算段でしょうか。」

翁「ただ単に領地を攻められて頭に血が昇っているだけなのかも知れないがな」

そういうと翁は笑った。

だが実際は笑っていられる状況ではない。
こちらの兵力は４４００程しか居ない。
姫を迎えに行ってる兵が戻っても６５００にしかならない。
国王派領主の土地を回っている１５００の兵は元々国王派の領主の兵の為に、大砦が劣勢に陥ると裏切りかねない。

３騎の兵によると国王軍到着予測はは明日の朝か遅くとも夕方だ。

騎士隊長「唯一の救いは外壁の門を壊さなかった事ですね。そのお陰で大砦に篭城してもある程度は持ちそうです。」

篭城したからといって援軍はない。
だからと言って撃って出るのは危険すぎる。
どの様な状況にせよ篭城しか取る策は無い。

皆、その事を理解しており、すぐに篭城に向けて動き出した。

―――――――――――

姫を迎えに行っていた兵たちが戻る。

大砦内の広場に降り立った姫は周りを見渡していたが、妖精少女の「お兄ちゃんだ」と言う言葉に反応してこちらに駆け寄ってきた。

姫「良くぞ…ご無事で」

僕「（皆で）無事に、と姫と約束しましたから。姫との約束は何があっても破れません」

笑顔で答えた僕の言葉に姫が嬉しそうに頬を染め俯く姫。
やはり皆が無事で嬉しいらしい。

美女さんに手を惹かれていた妖精少女は僕を見ると膝に抱きついてきた。（可愛い！）

すぐに今まであった事を色々報告してくれている。
「昨日何を食べた」とか「大砦に来る途中に狐の親子を見た」「子狼がどうしたこうした」「お兄ちゃんたちが出た後は小砦が静かで少し寂しかった」などの内容だったけど、逆にそういう何気ない事を一生懸命に話す妖精少女が可愛くて仕方ないので頭を撫でながら話を聞く。

その様子を美女さんも姫もにこやかに見ていたのに妖精少女が「お姉ちゃんが迎えに来た時に姫お姉ちゃんが一番最初に聞いたのはおに―」と言った所で「王子にも挨拶に行きましょうね」と連れて行ってしまった。

真っ先に王子に会わないと行けないのに僕を見かけて来てくれたらしい。

姫は本当に優しい。
妖精少女の手を引いて遠ざかっていく姫の後姿を見ていると爺がにこやかに話しかけてきた。

爺「無事で何よりです。」

僕「爺こそ」

爺「姫は若達が出撃した後は心配で寝ていられなかったようで、姫殿が迎えに来た時もすぐに大砦に向かおうと言うのをお止めしなければならないくらいでした。」

僕「それほど心配なさっていたんですね」

爺「美女殿に無事を聞いても自分の目で無事を確かめたくて仕方無い様でした。いえ、逆に無事だったからこそすぐに合いたかったのかもしれませんね」

いつの間にか戻ってきていた姫に「爺！早く！！」と姫には珍しい大きな声で呼ばれていた。
爺はその姿に笑みを一層濃くすると「それではまた」と姫に付いていった。
「勝手な事を言わないで！」と真っ赤に怒る姫ににこやかに「申し訳ありません」という爺を見送る。

―よっぽど王子の無事が心配だったようだ。

姫と爺を見送る僕に『逆にここで教えたら我の負けのような気がする』とか何とか魔王が言ってたが意味を尋ねてもその後は『何でも無い』と答えてくれない。
まあ本当に大切な事ならちゃんと伝えてくれるだろう。
それくらいは無条件に思える程度には僕は魔王を信用していた。

魔王『ニヤリ』

―信用しているからね！

―――――――――――

篭城の準備は夜を徹して行われる。
結構な数の投石器が届いたので投石器を急いで塀の上に配置する。
夜が深ける頃には何とか全方位の塀に十何機かずつ配置できた。

だが数がまだ足りない。

工兵長が大砦の工兵に作詞柄方法を教えるのには実際に作り方を見てもらい一緒に作り、その後に実際に作って貰わないと難しいらしい。

この世界の物作りは一人、もしくは数人の集団で完成までを作る。
完成品に対する職人の自負なのだろうか？
作業の一部を誰かに投げるというやり方はしない。
だからこそ教えるのに時間がかかる。

だから僕は部品毎に作る人間を分けて作成する方法を工兵長に言う。
最初は戸惑い否定的だった工兵長も、一つの作業に特化する事がどれだけ作業が単純化し作業が楽になるかを説く僕の話を真剣に聞いていた。

僕のいう事を理解した工兵長はすぐに投石器の工程を7つに分ける。
そして工兵達と大砦の工兵も7つに分けると作業を指示した。

―――――――――――――

翌朝、主だったメンバーが集まって朝食を取っていた。
本来なら他にも色々な領主を呼ばないとダメらしいが、誰を呼んだ呼んでないの話になってしまい煩わしい事この上ない。
だから領主達は誰も食事に呼ばないようにしたそうだ。

卓を王子、姫、爺、翁、現領主、領主息子、僕、美女さん、妖精少女で囲む。
当初はテーブルの一番遠くに座っていた姫が、昨日の晩から隣で食事を取るようになっていた。
余りにも自然と隣に座られたので反応も出来なかった。
特に場所など決まって無いが、通常の王族は上手（かみて）に座るものなのではないのだろうか？

―上手下手（かみてしもて）なんて分からないけど。もしかしたら僕が間違えたのかな？

王子を見ると僕の対面に座っているし誰も何も言わない。
ただの食事の席順の話だし深く考える必要も無いか。

食事の後はそのまま今後の方針を話し合う。

斥候の情報をまとめると国王軍は約１００００。
それだけの兵を出せるという事は国王軍はもっと多くの兵が居るの

かもしれない。
それを考えると鬱積したものを感じる。

とりあえずは目の前の敵をどうにかするのが必要である。
少数による奇襲なども出たが、防衛を考えるとそれ程の兵を割ける訳でもなく、数百程度の兵では無理なので却下となった。

王子と姫を逃がすという話も出たがこちらは当人2人が猛反対した。
王子の「自分はこの軍の旗頭だから逃げる訳にはいかない」という言い分に爺と翁が「ご立派です」頭を垂れる。
だが姫も同く「自分も王族で逃げる訳には行かない」という言い分は誰にも受け入れられなかった。

姫には一度、国外へ出てもらった方が安全だという話で纏まりそうになった。
まだ反撃しようとする姫に美女さんが笑顔で立ち塞がる。

美女さん「姫様、今の状況は把握されていますか?」

姫「はい」

美女さん「それでも残ると?」

姫「はい」

美女さん「この国の為に戦う兵を置いていけないと?」

姫「そうです。私は―」

何かいいたそうな姫をそっと制し

美女さん「それなら国を出るべきです」

姫「何故！」

美女さん「わかりませんか？旗頭になれる人物が同じ場所に居るのは不都合があります。しかもその場所は戦火に巻き込まれるんです」

姫「……」

美女さん「国を思うなら今後を考えて一時的に国を出るべきです」

姫「それならせめて小砦に―」

美女さん「そうすると今度は姫を守る兵を裂かないといけません」

姫「―っ！」

「他に残るべき理由はありますか？」という美女さんに俯く姫。
少しの間、姫を待っていた美女さんはこちらを見て「姫と2人で話をさせてください」と僕達を部屋から追い出した。

そう長くない時間で部屋の扉を開き、美女さんと姫と妖精少女が出

てくる。
どういう話し合いが行われたのかわからないが美女さんはいつもの笑顔で姫は俯いており、妖精少女は姫を心配そうに見ている。
美女さんは僕を見ると頷いた。
何とか美女さんがちゃんと説得してくれたようだ。

美女さん「お待たせしました」

爺「姫は納得いただけましたか？」

美女さん「その前に、若」

僕「はい？」

急に呼ばれて驚く。

美女さん「若はどう思います？姫を国外へ、という話は」

僕「寂しいですが姫の安全を考えると仕方ないと思います」

美女さん「寂しいんですか？」

僕「もちろんです。出来ればこのまま（皆と）一緒に居たいくらいですよ。」

僕の言葉に姫がふらつくのを妖精少女が支える。

やはり美女さんの説得で納得していたとしても悲しいのだろう。
僕は出来るだけ姫の気持ちを和らげてあげようと思った。

僕「僕は姫に元気に笑っていて欲しいからこの戦争に加担しているんです。だから―」

美女さん「だから？」

僕「だからその姫を出来るだけ危険な目に合わせたくない」

美女さん「『僕が守る』くらい言えばいいのでは？」

僕「今の状況はそれだけじゃ済まないくらい危険なんです。とても言えません」

美女さん「言えるなら言うと？」

僕「もちろんです。（友達の）姫の笑顔を守る為なら！」

美女さんは笑顔で頷いた。
姫はもう座り込んで両手で顔を覆ってしまっている。
妖精少女が「よしよし」と姫の頭を撫でていた。
自分だけ逃げるように言われる状況に涙が止まらないのかもしれない。
美女さんは翁と爺を見た。

美女さん「姫と話をしまし、納得しました」

翁「では―」

美女さん「はい。姫には残ってもらいます」

―寂しいけど仕方ないよえええええええ！

美女さんの言葉に翁が「は？」と言う。

美女さん「私も国の為なら出るべきだと諭しました」

爺「では何故！？」

美女さん「国の為ではなく一人の人間として大切な人を残して自分だけ安全な場所に居るのは嫌だ、と言われ私が納得しました」

確かに王子や付き合いの長い爺を残していくのは本当に心苦しいだろう。

「姫…」と爺が諭すような声を出すが姫は顔を覆ったまま首を振る。

それを見た爺が僕を見る。

―え？何で僕？

よく見ると姫以外の人が僕を見ていた。

―何なの？

魔王『…何か言えば良いのでは？』

僕が口を開く前に「先ほど、若の意見を聞きました」と美女さんが言う。

美女さん「若が姫の笑顔を守るというなら、従者の私はそれに従うだけです」

そうか、だから美女さんは僕に話を聞いたのか。

顔を覆ったままの姫を見る。

顔を覆い俯いて座り込む姫は本当に小さく弱々しい。

美女さん「若」

美女さんを見ると笑顔で僕の言葉を促した。

僕「―姫にこのままいてもらう事は出来ないでしょうか？」

一同が僕を見る。

僕「姫の脱出に多くの兵は避けません。でも少数だと無事脱出できるかも分かりません」

爺「それで？」

僕「姫が大砦を出るとなると士気にも関わります」

翁「だから残るべきだと？」

頷く僕。無理やりなこじ付けだ。
小砦に行けば少しは兵が居るので、そこから出せば問題は無い。
姫が残ると士気が上がるのは確かだが、王子がいればそれほど問題は無い。
それを承知でこじ付けたのだ。
翁もそれを理解の上で首を振り否定的な事を言おうとしたのを制して僕が先に口を開く。

僕「姫の望む事を叶えたい」

翁「それが危険だとしても？」

僕「姫の笑顔に為なら」

翁「なぜそこまで？」

僕「姫は（友達として）大切な人だからです」

翁と視線を外さずに言う。
ここは目を逸らしたらだめだ。

後ろで姫の「はうわあ」という良く分からない台詞と、妖精少女の「ひ、姫お姉ちゃん！」という声が聞こえてくる。
どうなってるのか物凄く見たいけど翁から視線を逸らすわけにはいかない。

翁「それでもだめじゃ」

翁はどうしても譲らない。

僕「では僕もここまでです」

王子「なんですって？」

僕「姫と一緒に国外に出ます」

翁「何をいてるのか判っておるのか？」

僕「はい」

翁「今、この大事な時に？」

翁の言葉に怒気が孕む。
それを僕は無表情に見る。

僕「ええ」

翁「とち狂ったか！」

僕「僕はずっと正常ですよ」

翁「この状況で投げ出す事など許されん！」

僕「誰の指図も受けない」

翁「何？」

僕「先程も言ったとおり、僕は姫の笑顔を守る為にここにいます」

翁が「だからどうした」と言わんばかりに僕を睨む。

僕「はっきり言ってそれ以外興味が無い」

翁が眉をひそめる。

僕「この国なんか知ったことではない」

僕の言葉に翁が一喝しようとする前に

僕「姫がこの国と民をを守る事を望むから僕はここにいる」

爺「……」

僕「もし姫が逃げる事を望めば連れて逃げるし、国を潰す事を望むなら潰す」

翁「な、に？」

僕「僕は自分のしたいようにする。その『したい事』に『姫の笑顔を守る』というのが当てはまったから反国王軍にいるだけだ。他人に指図される覚えは無い」

僕の言葉に翁が黙る。

僕「邪魔立てするなら―」

僕は楽しくて仕方なくなり冷笑を浮かべる。

僕「―全員敵だ」

その雰囲気に周りの何人かが腰の柄に手をやる。
それを見ながら「やるならやるよ」とばかりに冷笑を強くする。
一気に緊張が高まる中、翁が「まて」と周りを制する。

翁「―美女殿の意見は？」

美女さん「若の意のままに」

美女さんが笑顔で言う。

翁「ここには６０００以上の兵が居ても？」

美女さん「若が望むなら」

迷いも無く言う美女さんに翁は何も言う事が無く僕を見る。

翁「若、本気か？」

僕「それはこっちが聞きたい。」

翁「……」

僕「時間は無いので今すぐ決めてくれ。国王軍が来る前に姫を連れて出ないといけないのでね」

翁「姫も連れて行くと？」

僕「元々国外に逃がすのだろう？俺が第一王女とやらの所まで連れて行ってやる」

翁「ならんと言ったら？」

僕「仕方ない」

僕は全然「仕方ない」感じを出さずに腰の剣を隠すように半身立ちになる。
実際にどうでも良かった。
邪魔するなら排除するだけだ。

俺が出るより一瞬早く「わかった」と翁が言った。
半身立ちのまま翁を見る。

翁「姫には残って頂く」

それを聞いても俺は動かない。

翁「だからここは収めてくれ」

俺は翁を見たまま「姫」と呼びかけた。

姫「は、はい」

僕「姫はどうしたい？」

姫の言葉を待つが反応は無い。

僕「ここに残り今まで通り国王軍を倒す為に戦うか―俺と来るか」

姫「え、あ…」

僕「笑顔になれる方を選べば、俺はそれを手伝うさ」

姫「…戦います」

僕「そうか―」

それを聞いた僕は半身立ちから体を戻し姫に振り向く。

僕「姫がそう望むなら俺は国王軍を倒そう」

姫「！」

驚きで顔を真っ赤にする姫を見て面白い事を思いついた。

僕「姫、立って」

俺は姫の手を引き立ち上がらせる。

俺「今から俺が言う事に納得できたら剣を取って何か言え。気に入らなければ剣を取らずに何か言え」

姫「え？」

俺「それでいい。『はい』でも『いいえ』でも『あ』でも『え』でも何でもいい。最初に発した言葉で判断する」

立っている姫と向かい合い、一歩下がると片膝をついた。
剣を鞘ごと抜き取り葉の部分を自分に、柄の部分を姫に向ける。

僕「我が剣を姫に捧げる。」

姫が声を出しそうになり無理や飲み込む気配を感じ顔に出さないようにほそく笑む。
姫が震える指で剣を受け取り「はい」とか細く言う。
俺は立ち上がると姫を真っ直ぐに見つめ

僕「敵を打ち滅ぼすまで貴方の剣となり戦いましょう。剣を―」

呆けている姫に「剣を」と再度言うとあわてて渡してきた。

僕「貴方の笑顔を守る事をこの剣に誓う」

そう言うと振り返り翁を見た。

翁「どういうことじゃ？」

僕「見ての通り」

翁「今までどおり戦ってくれると？」

僕「国王軍を倒すまでは、。それに―」

翁「それに？」

僕「今まで通りじゃないですよ」

翁「？」

僕「僕は姫にのみ忠誠を誓いました。他の誰の指図を受けるつもりもありません」

翁「姫の騎士だと？」

僕「そうですね」

「国王軍を倒すまでですが」と言うと翁が「わかった。お願いする」と笑い出した。

「わらしの―」という姫の声と「姫お姉ちゃんがまた！」という妖精少女の声が聞こえて振り返ろうとした時に爺が声を掛けた。

翁「先程の誓いの作法はなんじゃ？」

僕「昔見たとある騎士の叙任式を自分なりにアレンジしてやりました」

翁「なるほどのう」

美女さんが「とりあえずお部屋に戻りましょう」と姫と妖精少女を連れて部屋に戻る。

王子「しかし先程の若殿はすごい迫力でしたね」

爺「全くです。危うく腰の剣を抜くところでした」

僕「そうですか？」

―そんなに酷かったかな？

爺「普段はどちらかと言えば温厚に見えたのに、いやはや全く見かけによりませんな」

翁「なぜ美女ほどの者が従者として付いているのかと若干不思議に思っていたのじゃが、あれを見ると納得じゃな」

皆が驚きをあらわすが、実は自分自身が一番驚いている。
普段の自分からは想像も出来ない態度と口調だった。

―もしかして魔王が体を乗っ取った?

魔王『乗っ取っておるのはお主だろう』

―そうだけど!

魔王『別に入れ替わったりしたわけではない。やり方もわからんし、出来るならとうにしている』

―確かに、じゃあ何だったのだろう?

魔王『眠っていたお主の本性では?』

―まさか!

魔王『あの状況で女に告白とは、見下げた性根だ』

―ぼ、僕はそんな奴じゃない!それに告白違う!!

魔王『だろうな。冗談はさて置き、あれは我の意識と長い期間いる事による影響だな』

―どういう事？

魔王『一つの体に二つの精神があるのだ。本来ならどちらか弱い方が吸収されて消えるがが、それが起こらずに長い間一緒の器に居るんだ。互いに影響しあっても可笑しくあるまい』

―じゃああれは魔王の性格の所為じゃ無いか！このエロ！！

魔王『子供のお主と違って我は大人だからな。あれくらい何とも無い』

―くっ、もういいよ。で、このままずっとこの状態だと僕達はどうなるの？

魔王『分からん』

―わからんって

魔王『今まで聞いた事も見たことも無い状況だ。今言った事も所詮は状況から見た推測でしかない。先の事はわからん』

確かにそうだ。

―魔王も僕に影響されているの？

魔王『かもな』

―かもなって

魔王『先程みたいに変化が顕著ならわかるが、徐々になら気がつかないだろうしな』

―そうか

魔王『だからこそ怖いのかもしれないな』

これ以上魔王に悪影響を受けないように、この戦いが終わって妖精少女を送ったら元に戻る方法を探そうと心の中で思った。

第１８話　夜襲

翌日の夕方。
大砦の周りには国王軍が犇き今にも怒号を上げて襲い掛からん状態だった。

なんて事は一切無かった。

本来なら夕方には大砦に到着するはずの国王派領主軍はまだ姿を見せてなかった。

何かの作戦で到着を遅らせているのかと探らせた。
もしかしたらまだ援軍が来るのかもしれない。
別働隊が回り込むのを待っているのかもしれない。

斥候を四方に飛ばし色々確認したが、どうやらただ単に進軍速度が遅いだけのようだ。
もしかしたらこちらを焦らして不安感や焦燥感を煽る為なのかもしれない。

―逆にそうであってくれ！

相手の意味の分からなさに良く分からない事を願う。
斥候から国王軍の到着が朝以降になるだろうという報告が入った。

爺「なんというか―」

翁「やはり奴らは無能じゃな。」

僕「え？」

翁「時間を開ければ開ける程、こちらが準備を進めるというのが理解できておらん」

僕「何かの作戦とかでは？」

騎士隊長「その可能性は無いと思われます」

翁「ただの馬鹿なのじゃ。どうせ有力貴族の誰かが疲れただの何だの言って遅らせているのじゃろう」

僕「それなら一部の兵だけ置いて他は先に行かせるべきでは？」

翁「そこら辺が無能の極みなんじゃ。」

爺「怖くて１００００の軍勢を分けることが出来ないんでしょう」

魔王『そんな俗物を相手にしなくてはならんのか』

王子「有力貴族は国内でも屈指の兵数を持っているが戦闘自体はし

た事が無いものばかりです」

翁「だから戦の何たるかを知らん。逆に言えばこそが我々の付け入る隙となろう」

防衛の準備は夜通し行われたお陰でかなり充実した。
これも国王軍が夕方には現れると思われていたからである。

それがまだ来ない。

兵士の緊張感が肩透かしによって若干緩んでいる。

僕「もしかしてコレを狙ったとか！」

翁「現実をみよ。ただ遅いだけじゃ」

僕「ソウデスカ」

爺「でも兵士の緊張感が切れてしまったのはまずいですね」

王子「どうにか士気を上げる事が出来たらいいんですが…」

うむむ、と皆が考え込む。

僕「姫と美女さんと妖精少女が部署周りしながら『頑張って』って

言ったら上がりすぎてヤバイ事になりそう」

王子・爺・翁・騎士隊長・現領主「「「「「それです（じゃ）！」」」」」

僕の冗談で呟いた言葉に一斉に反応する。

―マジですか？

魔王『いや、士気を上げる策としては最善だろう』

すぐに姫と美女さんと妖精少女へ行ってくれる様にお願いをした。
姫は軍隊の指揮を上げる必要があると聞かされ2つ返事で了解した。
美女さんは笑顔で「それくらいなら構いませんよ」と答え、妖精少女は「お兄ちゃんが一緒なら」と頷いてくれた（可愛い！）

魔王『王子にも行かせろ』

―王子？

魔王『少なからず女の兵士も居る。その為だ』

―なるほど

僕はすぐにその事を伝えると王子も一瞬困惑したが納得した。

部隊への激励は功を奏している。
というよりは上がり具合が過剰すぎて怖い。

幾つか部署を回って兵士達の上がり具合を見ると、何となく分類が見えてきた。
美女さんと妖精少女のファンの色の違いが凄すぎて際立っている。
多くは語らない。

さらに幾つか回って疑問に感じる。
兵士達が腕に付けている紐が気になる。
最初は気にも留めていなかったが、途中で気になたものの元の部隊の目印か何かだと思っていた。
だが殆どの兵が何かしろの色を付けている。
しかも数種類を付けている人も居る。
謎だ。

幾つか回った時に気が付いた。
色は全部で5種類のようだ。
もしかしたらまだあるのかも知れないが、今のところは見てない。

一時半（約3時間）程たって半分ほど回った。
残り半分である。

とある女性部隊で謎が深まった。
女性兵士と話をしていた所に王子が近づいてきた。
王子の笑顔にテンションが上がる水色をつけた女性兵士達。

王子「もうしわけありませんが、そろそろ次へ行かないといけません」

僕「もうそんな時間ですか」

女性兵士達に別れの挨拶をしその場を去ろうとして王子が木材の破片に足を取られる。
とっさに腕を掴んで倒れるのを防ぐ。

僕「大丈夫ですか？」

王子「ありがとうございました」

女性兵士水・女性兵士黒・女性兵士水黒「「「「「「――――――――!!」」」」」」

ものすごい超音波が飛んできて驚いて後ろを振り返ると女性兵士達

が発狂してた。
なんか怖い。

と、良く分からないテンションのまま女性兵士水黒の一人が女性兵士水に黒い紐を手渡し、女性兵士水がそれを受け取り腕につけて女性兵士水黒にクラスチェンジした。
握手を交わす女性兵士水黒と新たに水黒になった女性兵士。
「水黒？黒水？」などとどちらでもいいような良く分からない事を話し合っている。

―何の儀式なの？というかいつも紐を持って歩いてるの！？

他の色の紐をつけていた女性兵士達も次々と水色と黒色の紐を受け取って付けている。
周りの部隊でも同じようなやり取りがなされている。
謎は深まる。

次の部隊に行く為に部隊を離れるときに注意深く兵士を見ていたら、どこの部隊でも激励の後に新たな紐の交換会が行われていた。
あれは兵士間のコミュニケーション手段なのだろうか？
この世界の流儀はまだよくわからない。

とある部隊では男性全員が黒だった。
姫や美女さん、妖精少女の激励も物静かに聞いている。
今までと違い落ち着いた部隊だ。

王子が挨拶し僕も「頑張ってください」と言い終わった後に「はっ！！」と全員が一斉に敬礼した。
全員話終わったからと言っていきなりそういう事されると焦る。
正直ビックリした。

騎士隊長の部隊は全員が赤だった。
美女さんの挨拶に全員直立不動で聞いている。
ますます反応が信仰っぽくなてきた。

全ての部隊を回り終わった。
どこの部隊でもやはり紐の受け渡しと握手が行われていた。

気になるのは姫がいつの間にか黒の紐をしていた事だ。
どうしたのか聞いたら「女性兵士の部隊で貰いました」としどろもどろに答えた。
どういう意味か聞いたら物凄く目が泳いでいた。
「お守りみたいなものですよ」と美女さんがいい「そ、そうなんでう！」と姫が噛んでいた。

僕「お守りですか。どういう意味があるんですか？」

美女さん「紐によって違うようですよ」

僕「そうなんですか。僕も何かつけようかな」

姫「！」

僕「何色がいいかな。黒が一番付けやすい色かな」

美女さん「願掛けのような物ですから色で選ばず内容で選ぶべきかと」

僕「何色が何かわからないですから」

姫「も、桃色なんてどうでしょうかっ！」

僕「どういう意味があるんですか？」

姫「え、えっと―」

美女さん「幸運を呼ぶんです」

姫「そ、そうなんです」

僕「姫のつけてる黒は？」

姫「――っ！」

美女さん「大切な人の無事を祈る、ですよ」

僕「なるほど、じゃあ桃色でいいか。後で誰かに貰おう」

美女さん「どうぞ」

「なんで持ってるの？」と思ったら姫が貰った女性部隊で貰っていたらしい。
それを腕につける。ミサンガみたいだ。
美女さんは妖精少女に「私達は姫と同じ黒にしましょうか」といい、嬉しそうに頷く妖精少女に付けていた。
子狼の首にも巻いていたが、危なくないのだろうか？

姫が後ろを向いて小さくガッツポーズをしていた。
妖精少女と一緒がうれしいらしい。

その夜にいつもの面々で食事を取っていた時の事。

翁「若は桃色をつけているんですか」

翁が僕の腕の紐を見ていう。
隣で姫が「カチャ」と食器を鳴らす。めずらしい。

僕「ええ幸運の色だと聞いたので」

翁「ほう。幸運ですか」

僕「はい」

翁「黒は？」

僕「たしか、無事を祈る？」

美女さん「大事な人の無事を祈る、ですよ、若」

僕「それです」

翁は姫を見て「なるほどのう」と言った後は、別の事を話し出しこの話題には触れなかった。

――――――――――

翌日の日入前（17時頃）になって国王軍が現れた。

国王軍は大砦の横を流れる小さな川のあたりに集まると陣を引き出した。

爺「あんな所に陣を引くとは」

爺「おおかた水欲しさでしょうな」

場所としては悪くないが大砦から近すぎる。
自分達の数が圧倒的に多い事と大砦から弓が届かない距離という事を考慮しているらしいが、本来ならありえない距離である。

僕「舐められてますね」

翁「それもあるが、やはり馬鹿なのじゃろう」

僕「届きますね」

翁「届くな」

僕「夜にでもやりましょうか」

翁「今じゃなく夜とは人が悪い」

翁が「それがいい」と笑った。
すぐに主だったメンバーが呼ばれる。
国王軍の居場所を確認し投石器が届く距離なので夜中に打ち込むと言う話をする。

翁「夜なら敵も何が起こったかわかりにくく混乱するじゃろう」

僕「ついでに夜襲も掛けましょう」

騎士隊長「しかしそれはこの前、無謀という結論に至ったのでは？」

僕「この前と状況は変わりました。投石器の混乱に紛れれば十分可能だと思います」

一同が考え込む。

爺「しかし投石器で石が飛んでくる状態では味方も危ないのでは？」

僕「撃つ数を決めたらいいんですよ。各2発撃ったら突入等とね」

爺「ふむ」

僕「一撃離脱で離れたら砦に合図をし投石をまた始める、という感じで」

この方法なら投石器にやられる危険はある程度は危険は減る。

王子「確かに今のうちに出来るだけ削っておいた方がいいと思います」

翁「これで崩れてくれれば、万の兵が一夜でやられたという情報で我が方に乗り換えるヤツラも出てくるかも知れんな」

王子の「やりましょう」の一言で夜襲決行が決まった。

夜襲は僕と美女さんと領主息子、騎士団長が行く事になった。
兵は多すぎてもばれる可能性がある。
僕、美女さんと領主息子、兵士隊長の2組に分かれて各200名ずつ兵を率いる事になった。

夜中の間に小分けにして兵と大砦外に出る。
そのまま2手に分かれて国王派領主軍の左右に陣取る。

鶏鳴（けいめい、2時頃）、予定の時間に差し掛かる。
後は混乱し出したら突入するだけである。

じりじりと時間が過ぎるのを待つ。
見付からないように少し距離をあけて待機しているのでもしかしたら声が聞こえないかも?などと思っていたら「どん」という鈍い音と共に人の悲鳴が聞こえてきた。

それを合図に僕達は馬を駆る。

無言で馬を走らせ国王軍の陣に乗り込むと、そのまま声を出さずに手当たり次第に切り倒しながら陣を進む。
人もテントもかがり火も。
何でもかんでも剣でなぎ払いながら無言で走り、そのまま国王軍の陣を通り抜け追いつかれないように遠くへ逃げる。

合流地点に向かうと領主息子の部隊は先に居た。
ドンという鈍い音が聞こえてくる。
どうやら投石を再開したようだ。

領主息子が再度の夜襲を提案してきた。
2回も来るとは思っていないはずで今なら混乱もしているので大打撃を与えるはずだ、と言うのが言い分である。
確かに理屈は分かるけど僕は否定した。

領主息子「なぜですか？」

僕「投石中で石が飛んでくる中に突っ込むのは危険です」

領主息子「大砦に伝令を送り止めてもらえばいい」

僕「伝令を送り戻ってくるのを待っている間に敵は撤退するよ」

領主息子「伝令を送ってすぐに出ればいいではないか！」

僕「それはタイミングが不確定すぎる。」

領主息子「投石が止まったタイミングで行けばいい」

僕「それだけでは止まったのが夜襲の為なのかたまたまなのかが分からない。」

領主息子「削れるうちに削らないと！」

僕「それは分かります」

領主息子「なら！」

僕「でももう遅いです」

領主息子「何と？」

僕「今から向かっても敵は移動してしまってますよ」

領主息子「何故分かるんです？」

僕「領主息子は岩が飛んでくる所にいつまでもいますか？」

領主息子「だからこそ急ぐのです」

僕「だから間に合いませんよ。もう投石も止まってますし」

そういう話をしている間に石の落ちる鈍い音がなくなっている。

領主息子「なぜ止まった？」

僕「暗闇で国王軍の撤退は分かりにくいですが、明日の篭城戦もあります。石を無駄撃ちしない為にちょっと早いかなくらいで止めたんでしょう」

領主息子「美女殿はどう思われる」

美女さん「若の意見に賛成です」

領主息子に無言で指名された兵士隊長も「同じです」と短く答えた。
その意見を聞いて「やはり自分はまだまだ思慮が足りないな」と言うと「わかりました。戻りましょう」と領主息子は笑顔で言って帰路についた。

夜襲メンバー総勢４００名のうち未帰還者２５名、負傷者１４名。
一万の陣営に飛び込んでこの結果なら上場だと言えるだろう。
後は日が昇った後の相手の損害予測だけだ。

斥候から国王軍の現在の位置が伝えられる。
どうやらある程度大砦から離れたようだが未だに撤退せずに残っているようだ。

日が昇り国王軍の陣営後が見えてくる。
意外と陣営は天幕などが綺麗に残っていた。
確かに石が押しつぶした場所や夜襲で通り抜けたであろうあたりは

無残な状況だが、それ以外の場所は天幕などが綺麗に残っている状態である。
どうやら投石と夜襲の混乱が恐怖を呼んで連鎖的に撤退していったようだ。

国王軍の場所を確認しすぐに兵を出して国王軍が置いていった補給物資をある程度大砦に運び込む。
本当は全部回収したいが国王軍が戻ってきては元も子もないのでもっていけない分は火を放つ。
これで国王軍の物資は大幅に減り短期決戦を挑むか撤退しか無くなるだろう。

陣営に残っていた死体から夜襲と投石で１０００～２０００くらいは死んだようだ。
国王軍の残りは多くて９０００。
対する僕達は６５００。
まだまだ厳しい状況は変わらない。

昼前に国王軍が来た。
機能見たときより若干、みすぼらしく感じるのは昨日の夜襲のイメージの為だろうか。
一部の兵が陣営後の中を回っていたがすぐに国王軍本隊へと戻っていった。
もしかしたら置きっ放しの物資を期待していたのかもしれない。

すぐに国王軍から前進のラッパが聞こえていた。
やはり短期決戦しか無いという判断だろう。

翁「やはりすぐに来たか」

爺「諦めればいいものを」

翁「さすがに何もせずに逃げ帰るとまずいという頭が働いたのかの」

爺「頭に血が上ってるだけで無いといいが」

国王軍が隊列を組んで向かってくる。
こちらの矢が届くかどうかあたりで盾を掲げて一気に走ってくる。

翁「頭に血が上っていたようじゃ」

兵士隊長の「撃て！」の合図と主に矢と投石を撃ち始める。
矢は前に走る雑兵に降り注いだ。
しかし投石は雑兵を飛び越えて少し置くに落ちると敵を巻き込みながら小坂を転がって止まった。

どうやら国王派領主軍の正規兵の一部に当たったらしく明らかに距離を取り出した。
雑兵と正規兵の間が開く。

数刻がたった。
矢と投石で国王軍は未だに塀に近づけないでいる。

―このままなら行けるかもしれない！

誰もがそう思った瞬間に物見やぐらの兵が「敵影発見！」と叫ぶ。
仰ぎ見ると物見やぐらの兵が領主軍の方を指差していた。

「領主軍右後方より接近する部隊があります。数不明、１０００以上はいる模様！」

ここに来ての敵への増援は大砦にいる者に大きな衝撃を与えた。

第１８話　夜襲（後書き）

第19話　死亡フラグ

「―3000以上はいる模様！」

その声を聞いて僕は塀の上に掛け昇った。
軍勢は遠くてよく分からないが騎兵が多いようだ。
敵の援軍だと知り兵の士気が下がるのを感じる。

魔王『このままでは崩れるぞ！』

目は振り返り大きな声で叫んだ。

僕「手を止めるな！撃て！」

僕も弓を打ちながら叫ぶ。

―このままでは

僕「たかが数千増えるだけだ！やることは一緒だ！！」

周りの兵を叱咤する。

―敵に押しつぶされる

僕「ここでやらなきゃ押し込まれるぞ！」

士気の低下が止まらない。

―そうしたら姫と妖精少女が

僕「打たなきゃ死ぬぞ！姫や妖精少女が死ぬぞ！僕はそんなのは嫌だ！！」

必死で弓を打つ僕の言葉に弾かれたように周りの兵が弓を打ち出す

―嫌だ嫌だ嫌だ

僕「嫌だ嫌だ嫌だ！そんな目には合わせたくないんだ！！！！」

必死で弓を打つ僕を「出すぎです」と数人の兵が僕を羽交い絞めにして物陰引きずり倒す。

どうやら必死すぎて塀から身を乗り出さんばかりだったようだ。

気がつくと周りの兵が「姫を守れ！」「妖精少女の為に！！」と声を出しながら弓を射ていた。

砦の広場でも同じように叫んでいる。

魔王『何とか耐えたな』

―何か疲れた

まだ始まったばかりなのに物凄く疲れた。

隙間から先ほどの軍勢を探す。

国王軍の後方から来た軍勢はほぼ騎兵で国王軍に合流しようとしているようだった。

―どこの軍勢だろう。

そう思った瞬間にその軍勢が牙を剥いた。

ゆっくりと国王軍に接近した軍勢はいきなり鬨の声を上げると国王軍の側面に突撃した。

その光景を見ていた兵の一人が「赤と白の騎士団の旗だ！」と叫ぶ。

それを聞いた僕は塀を飛ぶように降りて騎乗すると近くの王子の所に駆け寄る。

僕「来たのは赤と白の騎士団で国王軍に攻撃してます。今がチャンスです」

「撃って出ましょう」と僕が言うと王子は僕を見つめて「分かりま

した」というと「撃って出る！開門！！」と叫んだ。
それに合わせて僕は「赤白両騎士団がこちらに付いた！今こそ国王軍を打ちのめすぞ！」と叫んだ。

門前の弓がやむ。
それを好機と見て門に突っ込もうとしていた敵集団は、開いた門から出てきた騎兵に浮き足立った。
「蹴散らせ！」と叫びながら突っ込んでいく騎士隊長。
そのまま一部の塀を連れて回り込むように塀に張り付こうとしていた敵兵に当たっていく。
僕達はそのまま真っ直ぐ国王派領主軍の正規兵集団に向かっていく。

乱戦になる。
このままでは犠牲が増えてしまう。
ふと見ると乱戦の輪の外に巻き込まれるのを避けるように退避する集団が見えた。

僕「目の前の敵だけに掛かりきりになるな！敵の指揮官が逃げるぞ！近くの者は優先的にあいつを狙え！！」

剣を突きつけて叫ぶ。

そんな事は無理なのは分かりきっている。
ただ相手の頭が逃げる事を敵に教えているだけだ。

そこからの決着は早かった。

僕に剣を突きつけられた相手は剣が届く距離でもないのに「ひっ！」と声を出すと「早く逃げるぞ！」と乱戦から離脱して行った。
それを見た兵たちが次々と後を追うように逃げていく。
その動きが連鎖的に加速してあっという間に国王軍は撤退をしていた。

僕は兵に追わない様に伝え大砦に引き返した。

３刻ほどして大砦に赤と白の両騎士団が現れた。
両騎士団から４名の人物だけが砦の門の前に進み出る。
その内の一人が自分は赤の騎士団長でもう一人が試論騎士団長、残りの２人が両騎士団の副団長である、と言った。

赤の騎士団長「反国王派への帰順を求める。王子に面会を！」

すぐに騎士団長と爺が門の上に立ち確認する。
爺の「確かに両騎士団団長ですな」という言葉に門を開いた。

広場で出迎えた王子と姫に騎士団全員が跪く。

赤の騎士団団長「赤の騎士団総勢１９００名、王子に忠誠を誓いま

す」

白の騎士団団長「白の騎士団総勢２３００名、同じく王子に忠誠を誓います」

王子「感謝します」

王子が「ありあとう」と再度言うと騎士団は立ち上がる。
そんなにすぐに信じて大丈夫かなと思ったら、元々両騎士団団長は王子派らしく、それで危険視されて幽閉されてしまっていたらしい。
それに姫も小さな頃からしているらしく、妹のように感じでいるようだ。

すぐに３８００名の元両騎士団出身の騎士のことを伝えると両騎士団副団長が再編入する為に何人かの騎士を連れて走っていった。

赤の騎士団団長「遅くなって申し訳ありません」

王子「いえ、無事で何よりでした」

白の騎士団団長「王子達が騎士団員達に策を授けてくれたお陰です」

王子「その策を考えたのはこちらの若です」

急に話を振られて驚く。

僕「どうも」

両騎士団団長が僕を見る。
どちらも団長という割には若く見える。
３０代後半といったところか。
両騎士団副団長の方が年上のような気がする。

赤の騎士団団長「貴殿が若殿か」

僕「はい」

赤の騎士団団長「貴殿のお陰で我々もこうして自由になれた。感謝する」

僕「いえ、そんな」

白の騎士団団長「全くその通りだよ。憎い有力貴族に一泡吹かせてやることも出来たし、本当に感謝してるよ」

白の騎士団団長が笑う。
どうやら両騎士団の団長は少し毛並みが違うようだ。

赤の騎士団団長「騎士団を再編成したらすぐに追撃に出撃します」

王子「少しは休んだ方がいいのでは？」

赤の騎士団団長「いえ、今が好機です。ここで攻め込まないと！」

白の騎士団団長「敵は削っておくに越した事も無いですしね」

翁「そうじゃな。こちらも一部の兵を出そう」

王子「全軍で向かうべきでは？」

翁「物資なども運ばなくてはなりませんからな。」

すぐに大砦の兵から２０００の騎兵が出兵の準備を行う。
同時に物資を運ぶ後発隊の準備も始まり、両騎士団の編成と合わせて大砦内が慌しくなる。

両騎士団団長と何かを話し合っていた翁と王子に呼ばれる。

王子「若に追撃部隊の指揮をお願いします」

僕「はい？」

王子「追撃部隊の、指揮です」

僕「僕が？」

翁「今までの事情を鑑みて適任と判断したのじゃ」

王子「お願いします」

僕「は、はい」

王子の気迫に押されて頷く。

王子「今までの事でかなり若の評価は高いですが、ここでもう一押しして置きたいんです」

いつの間にか僕の評価が高くなっているらしい。

魔王『方針の決定、敵の取り込み、投石兵器の発明…中々の戦果だろう』

―そうかな

評価されるのは単純にうれしい。

王子「姫姉さまの為にも」

―姫？

確かに敵を減らして王都に向かう事は姫の願い一歩も二歩も近づく。

爺「そうですな。チャンスがあればどんどん行かないと行けません」

翁「周りを黙らせるくらいにな」

うんうんと頷く爺と悪そうに笑う翁。
やはり相手が弱っている時にはがっつりと行かないとダメだね！

僕「分かりました」

王子「よろしくお願いします」

僕と一緒に美女さんと領主息子、兵士隊長が行く事になった。
赤白両騎士団団長にも挨拶をする。

赤の騎士団団長「よろしくお願いする」

白の騎士団団長「お手並み拝見ですね」

どちらの騎士団団長も僕が行く事には特に不満は無いようである。
気になって赤の騎士団団長に聞くと「赤の副団長から話は聞いた」と言っていた。
初めってあったときの事だろうけど、特に大した事をした記憶は無い。

白の騎士団団長は美女さんに笑顔で挨拶していた。

白の騎士団団長「初めましてお嬢さん。白の騎士団長と申します。お見知りおきを」

美女さん「若の従者をしている美女と申します。」

白の騎士団団長「若殿はこんな美人を従者にしているなんてうらやましい」

僕「はあ、どうも」

白の騎士団団長「どうですか?戦が終わった後に食事でも」

美女さん「私は若の従者ですので」

白の騎士団団長「つれないですね。貴方に食事を頼むのに若殿に決闘を申し込まないとダメですかね」

―なんでそんな話に

白の騎士団団長「今のうちに約束でも取り付けておきましょうか」

そう言うと白の騎士団団長が僕の方を見て笑う。

美女さん「若に危害を加えようというのなら私がお相手しますよ?」

白の騎士団団長「ダンスのお誘いならうれしいのですが」

美女さん「それなら他を当たってください」

白の騎士団団長「ではお願いしましょうか」

そう言うと美女さんに向き直る。
剣の柄に手を当て立つ白の騎士団団長。
数歩踏み込むと一瞬で剣を抜き美女さんにせまる。
美女さんは笑顔でそれを眺めたままピクリとも動かない。
剣先を美女さんの首に当てた状態で止まる。
少しして剣をしまう白の騎士団団長。

白の騎士団団長「ご無礼をお許しください」

美女さん「もうよろしいのですか？」

白の騎士団団長「大体分かりました。ありがとうございます」

美女さん「そうですか」

白の騎士団団長は僕にも向き直り「急に申し訳ありませんでした」
と笑顔で謝罪した。

僕「いえ、切られなくて良かったです」

どちらが、とは言わなかった。
それで白の騎士団団長も分かったらしく、笑顔で「まったく」と頷いた。
ああの騎士団団長も「聞きしに勝る」と言っていた。
いつどこで美女さんの噂を着たのか知らないが自分で噂を確かめてみたらしい。

姫と妖精少女が現れた！

普通に妖精少女の手を引いた姫が王子と翁達と来ただけだけど。
2人は激励に来てくれたようだ。
赤の騎士団長がこれまたどこで聞きつけたのか「あれが幸運の少女か」と妖精少女を見て呟いた。
「彼は迷信やまじないを信じる性質（たち）なんだよ」と白の騎士団長が小声で教えてくれる。
まじないと聞いて花占いを想像し、花占いをする赤の騎士団団長を想像して笑ってしまった。

妖精少女「おにいちゃん、気をつけてね」

僕「うん。美女さんも領主息子もいるし大丈夫だよ。」

妖精少女「うん」

姫「若…」

姫が真剣な表情でこちらを見ている。
やはり戦は不安なんだろう。

僕「必ず勝ちますよ」

姫「どうか、ご無事で―」

僕「次に会うときは姫を王都へ迎える時です。僕が迎えに来ますので待っていてください」

姫「は、はい！」

そう言って自分の馬のところに戻る。
それを見ていた赤白両騎士団団長が近づいてきた。

白の騎士団長「中々いい感じですね」

―何がいい感じなんだろう？

首を傾げようとして思い立つ。
姫と妖精少女が来て兵の士気がかなり上がっている、その事だろう。

僕「そうですね」

白の騎士団団長「これは頑張って姫を早く迎えないといけませんね」

僕「ええ、最後まで気を抜かないようにしないと」

白の騎士団団長「この戦が終わったらあの子に―ですか」

―何？その死亡フラグ

魔王『死亡フラグ？なんだそれは』

魔王に手短に説明をしながら今度こそ首を傾げる。

僕「ああ、姫を迎えに行くと言う話ですか」

白の騎士団団長「そうそれです」

僕「早く姫を安心させてあげたいですからね」

白の騎士団団長「この戦が終わった後も色々あると思いますが、姫を支えてあげてください」

僕「出来る限りの事はしますが、いつまでもこの国に居る事は出来ませんので」

赤白両騎士団団長「「は？」」

今まで黙って聞いていた赤の騎士団団長も白の騎士団団長と声を合わせる。

僕「妖精少女も早く故郷に連れて行ってあげたいですし、僕もやることがありますから」

白の騎士団団長「ちょ、ちょっと待ってください」

僕「はい？」

白の騎士団団長「戦が終わったら国を出るつもりですか？」

僕「つもりも何も最初からその予定ですが？」

赤の騎士団団長「姫を支えるのではなかったのか？」

僕「ここには姫を支えるたくさんの仲間がいます。戦が終われば後は皆さんの仕事です」

僕の言う事に言葉をなくし王子達を見る両騎士団団長。

白の騎士団団長「ま、さか？」

王子・翁・美女さん「そのまさか、です（じゃ）」

3人が唱和する。

白の騎士団軟調「赤の騎士団団長を超える御仁が居たとは」

赤の騎士団団長「その物言いは納得行かないが、さすがにこれは俺でもわかる」

僕達を見つめる姫と妖精少女に手を振っていると「若殿」と赤の騎士団団長が声を掛けた。

赤の騎士団団長「用事はどれくらいかかるんだ?」

どれくらいだろうか?
想像も付かない。

僕「いつ終わるかわかりません。」

赤の騎士団団長「それまで待たせると?」

僕「待たせる?」

赤の騎士団団長「もちろん―」

そういった所で翁と白の騎士団団長が赤の騎士団団長を止める。

翁「できれば戦が終わった後も姫を助けて欲しいんだがな」

僕「妖精少女を早く連れて帰ってあげたいんです」

白の騎士団団長「本人に聞いてみましょう」

そういうと姫と妖精少女を呼ぶ。

白の騎士団団長「妖精少女は戦が終わった後も姫を助けてくれるかな？」

白の騎士団団長を警戒するように姫の後ろに隠れていたがコクリと頷いた。

白の騎士団団長「でもそうすると故郷に戻るのが遅くなるよ？」

妖精少女「…姫お姉ちゃんと居たいからいい」

白の騎士団団長「だ、そうです」

僕「妖精少女、いいの？」

妖精少女「うん」

白の騎士団団長「もちろん、その間も我ら我が妖精少女の故郷と連絡を取る手配をしますよ。ねえ翁殿」

翁「もちろんじゃ」

妖精少女が良いと言うなら良いのだが、問題はもう一つある。

―魔王

魔王『なんだ』

―魔王の方はどうなの？

魔王『どうもこうも無い。我にはどうしようもないしな』

―僕は魔王の問題を放置するつもりは無い

魔王『我も無い』

―なら

魔王『だがそれほど急いでもおらん』

―いいの？

魔王『良いも悪いも無い。まだ力が足りない。今戻っても何も出来ない』

―そうか

魔王『そうだ』

―ありがとう

白の騎士団団長「どうですか？もし良ければ戦が終わっても姫を支えてもらえないでしょうか」

僕は考えて美女さんに話しかける。

僕「美女さんはどうですか？」

美女さん「ご随意に」

美女さんを見つめるもいつも通りの笑顔は変わらない。
僕は頷くと翁と白の騎士団団長の方を向いた。

僕「…いつまでも、とは行きませんが」

白の騎士団団長「それでかまいません」

僕「時期が来たら旅立ちますからね」

翁「それはかまわんよ」

僕「最後に地位も名誉も不要です。それが条件です」

翁「いらないと？」

僕「いりません。土地も何もかもいりません」

翁「じゃが姫のそばに居る為にはある程度の地位についてもらわんといかん」

僕「じゃあこの話はもう終わりですね」

白の騎士団団長「まあまって。」

僕「なんですか？交渉は決裂したじゃないですか」

白の騎士団団長「まだだよ。まだお互いの意見のすり合わせの段階じゃないか」

僕「…なるほど」

白の騎士団団長「姫のそばに居ても周りから文句が出ないようにする為にはある程度の地位を得てもらうのが一番簡単なんだけど、それでもダメかい？」

僕「なるほど」

白の騎士団団長「理解してもらえたかい？」

僕「ええ、話し合っても無駄だと判りました」

赤の騎士団団長「地位をくれると言うのに何が不満だ!?」

僕「何もかもが不満ですね」

白の騎士団団長が赤の騎士団団長に「話がややこしくなるから黙っててね」と言うと僕に「何でそう思うの?」と聞いた。

僕「話の起点から食い違ってるんですよね」

白の騎士団団長「どういう風に」

僕「僕は別に『この国に残りたい』なんていってません」

白の騎士団団長「そうだね」

僕「でもみんなが『姫を支えてあげて』と言うので条件付で条件を受け入れるつもりでした」

白の騎士団団長「そこまではお互い認識があってるね」

僕「なのに『姫と居るのに地位が居る』と言う」

白の騎士団団長「おかしいかい?」

僕「おかしくないですか?」

白の騎士団団長「どこが?」

僕「…僕は『居たい』んじゃなく『居るようにお願い』されたんです。なのに『居る為に地位が居る』というのはおかしいと思いませんか？」

白の騎士団団長「なるほど、『お願い』されているのに『押し付け』られるのは不快だと言う事だね」

僕「そうですね。」

翁「じゃが姫のそば居る為には仕方ないんじゃ」

僕「だから無理を言わずに話を流そうとしてるんです」

翁「むう―」

白の騎士団団長「どういう状態なら受けてくれるんだい？」

僕「地位など不要な状態で『姫の騎士』として近くにいれるのなら」

白の騎士団団長「それは騎士団などにも所属しないと言う事かい？」

僕「そうです」

僕は正直、このやり取りに面倒くさくなってきていた。
だから働かない宣言をしてさっさと諦めてもらうことにした。
白の騎士団団長は「ちょと待ってもらえるかい」と言うと王子と翁と赤の騎士団団長とで話し出す。

―はやく出陣準備が終わらないかな

魔王『やさぐれておるな』

―正直、面倒になってきたよ

魔王『地位くらい受ければいいではないか』

―だめだよ、いずれ出て行くのにそんなのを受けると、それを理由に引きとめられる事が予想される。だから面倒事は事前に避けないと。

魔王『…そうか』

話し合いが終わったようでまたこちらに来た。

翁「話は了承した」

僕「では？」

翁「地位等無くても姫のそばに居る事ができるようにする」

僕「そうですか」

翁「『姫の騎士』という地位を新たに作る」

僕「はい？」

翁「『姫の騎士』じゃ」

僕「だから地位とかは―」

翁「安心せい。姫のそばに居れるだけで他には何も無い名誉職のようなものじゃ。姫の命のみに従えばいい地位じゃ」

僕「他の誰にも？貴族や王族にも」

翁「そうじゃな…おぬしなら王の命でも納得できん場合は従わんじゃろうしな。地位的には執政と同じ地位にしよう」

魔王『執政は国王の次に偉いな』

僕「物凄い地位じゃないですか」

翁「実権は何も無いよ。王に礼を尽くさなくて良いわけではない。それくらいはしてくれるじゃろう？」

僕「ええ。でもそんな地位を作ると後々、拡大解釈されて大変な事になるのでは？」

翁「まあそこら辺は追々詰めるとして、実権は無いが立場は執政と同じ位にしとくか」

僕「大丈夫なんですか？」

翁「大丈夫じゃろう」

本当に大丈夫か不安だ。

僕「とりあえず実権の無い『姫の騎士』という地位は受け入れます。でもそれ以外の地位も土地も何も要りません。」

翁「うむ」

僕「後々、どんな理由でも押し付けられる場合は出て行きます。時期が来たら出て行きますけどね」

翁「わかった」

僕「ここにいる面々が証人です。後で証文が無いとかは聞きません。いいですね」

王子「は、はい」

僕は疲れてため息を吐く。

僕「何でまだ戦も終わってないのに終わった後の話をしてるんだろう」

翁「終わった後では話をする前に居なくなってるかも知れないではないか」

白の騎士団団長「まあまずは邪魔な敵を倒しに行きますか」

話している間も準備は刻々と進んでおり出陣の時間が迫っていた。

第２０話　独断専行

追撃が始まった。

追撃部隊は総数約９９００
僕、美女さん、領主息子、兵数約２０００
赤の医師団　兵数約３９００
白の騎士団　兵数約４０００

斥候の情報では敗走した国王軍は１００００の軍勢を大幅に減らしながらも何とか体裁を保って王都への帰路についているようだ。
戦闘後半刻（約1時間）程は死に物狂いで進んでいた様だが追撃が無いと判断したのか、今は速度は遅い。
一時（約2時間）程で追いつく予定だ。

斥候が王都へ戻る国王軍を見つけた。
悟られないように距離を開けて一旦停止する。

赤の騎士団団長「このまま行くか？」

白の騎士団団長「そうですね」

僕「今のスピードで行けば野営地はここ（地図上を刺す）あたりでしょうか？」

赤の騎士団団長「通常で考えたらそうだが、そこよりこの辺り（僕が指した場所より王都方面）だりうな」

僕「そこになると着くのは夜中では？」

赤の騎士団団長「それでもここまでは確実に行くだろう」

白の騎士団団長「そうだね。ここから先は有力貴族の土地だからね」

「自分達の勢力圏まで戻らねば安心して休むことも出来まい」と赤の騎士団団長が言うことに白の騎士団団長も頷く。
僕はその有力領主の領地の直前にある箇所を指を刺して聞く。

僕「ここは？」

白の騎士団団長「そこは小さな渓谷ですね」

僕「渓谷？」

白の騎士団団長「ええ、徒歩でも2～3刻も掛からずに抜けることが出来ます。」

僕「幅は？」

白の騎士団団長「そこそこの広さがありますね。馬車がすれ違う程度には」

僕「有力領主の土地に入るにはここを通った方が早い？」

白の騎士団団長「早いですね。迂回だと一時（約2時間）は掛かります。」

僕「じゃあここを通りますね」

赤の騎士団団長「通るな。確実に」

僕「では回りこんでここで待ち受けましょう」

赤の騎士団団長「何？」

僕は地図を指しながら説明する。

国王軍は渓谷に掛かるまでまだ時間はかかりそうである。
その間に両騎士団には回りこんで渓谷の出口に布陣してもらう。
そうして国王軍が渓谷に半ば入った辺りで僕達が国王軍の最後尾に奇襲を掛けるので、出口側から出てきた国王軍を両騎士団で襲ってください。

赤の騎士団団長「両騎士団が出口に行くよりは、分かれて挟んだほうがよいのでは？」

僕「いえ、確実にたして行くには出口に多く配置するべきです」

赤の騎士団団長「どういうことだ？」

今の国王軍は予想しなかった大敗で士気が下がっている。
そんな状況では渓谷を抜けたら自分達の勢力圏だという事で気も緩みだすだろう。
そこに杯背後から敵が迫れば恐怖で「渓谷を抜ければ安全」という幻想に向かって我先にと入って行くことが予想される。
その恐怖の一押しには員人数はそれ程必要ではない。

僕「精神的に弱っているその恐怖の一押しをするのにはそれ程の人数は必要ありません」

赤の騎士団団長「確かに」

僕「本当に怖いのは出口です。相手は死に死に物狂いで出てきますので」

白の騎士団団長「それでも渓谷に押し入るには少なく無いか？」

僕「すぐには渓谷内の敵には突入しません」

赤の騎士団団長「何？」

僕「狭い渓谷内は逃げ惑う敵で阿鼻叫喚でしょ。危険ですので相手の最後尾がわかる程度の距離を保ち進入します」

白の騎士団団長「それで？」

僕「敵が渓谷を抜けたら弓で攻撃してください」

赤の騎士団団長「それ程多くの弓は持ってきてないが」

僕「構いません。出口の敵を弓で射って出口を封鎖してください。そうすれば渓谷内で足が止まるでしょう。」

赤の騎士団団長「なるほどな」

白の騎士団団長「中々辛辣な手を思いつきますね」

僕「そうですか？『獲物を前に舌なめずりは三流のすることだ』ってとある人が言ってました。その通りだと思います。」

「手加減する余裕も無いですしね」と言う僕に両騎士団団長が頷く。

僕「そこを今度は僕達が背後から弓を射ってさらに混乱させます。その後に降伏を勧告します」

白の騎士団団長「今の状態で捕虜を取っても困るだけでは？」

僕「捕虜にしませんよ？大多数は武装解除の後に逃がします」

赤の騎士団団長「なに？」大多数という事は、領主などだけ捕まえるのか」

僕「正確には領主と領主の正規兵の指揮官クラスですね」

白の騎士団団長「それでも５００近い人数になるのではないか？」

僕「そうですか。それは多いですね」

赤の騎士団団長「なら領主だけに抑えればよいのではないか？」

僕「出来るだけ兵がまとまる可能性を下げたいんですよね」

白の騎士団団長「いっその事全部切るかい？」

僕「それが楽でいいんですが」

両騎士団団長が黙る。

僕「戦後、民衆を味方につけるにはちゃんとした処刑でないとダメだと思うんですよね。姫も望まないでしょうし」

赤の騎士団団長「ならどうする？」

僕「いっその事、全部の敵を渓谷に封じ込めましょうか」

渓谷は出入り口を塞げば逃げ道の無い牢獄になる。
武装解除し武器を取り上げた後に領主と指揮官は騎士団が身柄確保。
他の兵士達は渓谷内に監禁する。

僕「ここなら半日くらいで大砦から後発隊が来るでしょう。来たら領主達を受け渡して補給物資を受けて王都へ行きましょう。」

これなら残存兵が王都に逃げ込むのを防ぐことが出来る。
すぐに両騎士団は敵に悟られないように迂回しながら目的地に向かった。

――――――――――

本隊は敵から少し離れた場所を進み、少数で敵の背後を追尾する。
やっと渓谷が見えてきた。
あそこを通過せずに回り込まれると作戦は失敗するのだが、どうやら通過しそうで一安心である。

領主息子「そろそろ行くか？」

僕「いえ、もう少し待ちましょう」

領主息子「何故？」

僕「渓谷にある程度入らないと、反撃される恐れが高くなります。」

領主息子「なるほど」

僕「ある程度入ったら突撃します。当初の作戦目的は渓谷に敵を押し込める事です。深追いに注意を」

そう言い敵を見る。
まだこちらには気が付いていない。
どの兵士も疲労困憊という感じで俯き加減にたまに進んでは立ち止まるを繰り返していた。
「そろそろ―」そう告げたときに敵兵の一人が何気なくこちらを見ようとするのが見えた。
それを察して「突撃！」と叫ぶと敵の集団に襲い掛かった。

大声を張り上げ半包囲状態で敵に牙をむく。
２０００の兵が扇状に突撃してくるのだ。
本来そのような事をすれば厚みが減りすぐに包囲を突破されてしまうが、相手は士気が下がり放心している所への襲撃で正常な判断も出来ない。

魔王『まあ、元々正常な判断が出来ていないようだったがな』

我先にと渓谷へ逃げ込もうとする敵兵を背後から切りつける。
反撃しようとするものなど殆ど居ない。
一方的な虐殺の後に敵が渓谷に逃げ込んだのを確認し停止の号令を掛ける。

隊列を組みなおす。
前から兵士隊長、僕、領主息子、美女さんの部隊の順に各５００で

隊列を組む。

領主息子「是非、我を先発隊に！」

誰が先発になろうが作戦通りに動くのであれば問題は無い。
唯一あるとすれば敵に仕掛けるタイミングを間違えると大打撃を受けかねないという事くらいだが、それも敵が戻ってこようとするタイミングでいいのでさほど難しくない。

だが―と考える。
先日の夜襲の際の領主息子を思い出すと、任せるのには2の足を踏む。
状況判断が出来ないわけじゃないが、若干、目の前の事に囚われてる感がある。

領主息子「是非！」

僕「…作戦のタイミングを間違えるとこちらが崩れる可能性が高いですよ」

領主息子「理解している」

僕「何があっても敵がこっちに来るまで手を出したらダメですよ？」

頷く領主息子に再度念を押し任せる。

美女さん「大丈夫でしょうか？」

僕「大丈夫だと信じたいです。ただ用心はしておきましょう」

領主息子の部隊が渓谷にゆっくり侵入していく。
渓谷の入り口を僕の部隊を中心に左右に美女さんと兵士隊長の部隊で包囲する。
後は結果を待つだけだ。

程なくして渓谷から伝令が飛んでくる。
確認すると領主息子の軍勢が敵と交戦を始めたそうだ、

僕「交戦？どういうことだ？」

聞くと領主息子は予定通り敵に近づき過ぎないように渓谷に入って行ったそうだ。
そうして駅軍の最後尾の動向を見張っていたらしいが、その内に敵兵が同士討ちを始めたらしく、それを見ていた領主息子は攻撃を始めたらしい。

美女さんに伝令を送り状況の説明と内部への突入を命じた。
兵士隊長にも状況を知らせる伝令を走らせる。
すぐに美女さんの部隊いくのを見やってため息をついた。

兵の集団が飛び出してくる。領主息子の部隊だ。
やはりと言うか何と言うか、かなりの被害が出たようだ。
すぐにこちらに来た領主息子は悔しそうに「申し訳ない」と一言いう。
傷だらけの姿が惨状を物語っている。
ざっと見る限りでは深い傷は無い様だが後方で手当てを受けるように指示する。

美女さんの部隊が迫り来る敵を受けながら渓谷から出てきた。
後退する美女さんの部隊が左右に分かれた所に僕と兵士隊長の兵が弓を降らせる。
敵が怯んだところに兵士隊長の部隊が突っ込み、程度敵と交戦するとすぐに離脱した。
そこに僕の部隊と美女さんの部隊が弓を射かけ僕の部隊が突撃し、兵士隊長と同じくすぐに離脱し敵兵と距離を取る。
その攻撃は敵の勢いを削いだがすぐに渓谷から飛び出してきた。

僕「無理に当たる必要は無い！」

そういい向かってくる敵に当たる。
正面から受けずに部隊を少し左に寄せて敵の退路を作る。
そこに向かって逃走していく敵を見ながら向かってくる敵だけを倒す。

数刻で敵が方々へ逃走していく。
それを確認した後、すぐに兵を集め被害状況を確認する。

僕と兵士隊長の部隊はそれぞれ合わせて十数名の犠牲者で済んだ。
美女さんの部隊は領主息子を逃がした後に敵の猛撃を防ぎながら渓谷を撤退したために２０名近い被害が出た。
そして領主息子の部隊である。
敵に突っ込みすぎたようで一時は囲まれてしまったようだ。
８０名近い死者とそれに倍する重傷者を出した。

両騎士団が渓谷を抜けて合流した。
敵が居なくなったのでおかしいと感じたようだ。
状況を説明する。

赤の騎士団団長「何故計画を守らずに突っ込んだのだ?」

領主息子「敵が混乱で同士討ちを始めたので…」

赤の騎士団団長「それで好機だと思ったのか?タイミングが大事だと言われなかったか?」

領主息子「言われておりました」

赤の騎士団団長「それなのに突っ込んだと?」

領主息子「…はい」

赤の騎士団団長「その結果、敵を逃し味方に損害を与えたのか」

悔しさに震える領主息子から視線を外した赤の騎士団団長が今度の方針を聞いてくる。

赤の騎士団団長「どうする？」

白の騎士団団長「捕虜はいないし、先に進みますか？」

僕「ここは一旦戻りましょう」

赤の騎士団団長「何？」

僕「当初の目的では王都まで行く予定でしたが、状況がかわりました」

白の騎士団団長「状況ですか」

僕「大砦から後発部隊が向かってきていると思います」

白の騎士団団長「そうですね」

僕「本来ならそれを前線で待てばいいのですが、先程多くの敵を取り逃がしました」

赤の騎士団団長「それが補給部隊を襲うと？」

僕「可能性の話ですが」

白の騎士団団長「しかし補給部隊とはいえ護衛の兵もついてますが

？」

僕「そうなんでしょうが、今回は急遽出撃したので準備が整ってません。僕達に出来るだけ早く物資を届ける為に随時出発している状態です。そうなると一隊毎の人数が少ない可能性が高いですね」

白の騎士団団長「確かに」

僕「補給部隊の安全の確保もありますが、敗走する国王軍を一応は壊滅させました。ここは一度大砦に戻ってしっかりと攻城戦の準備をして出たほうが、王都攻略が少しは有利に運べるでしょう」

赤の騎士団団長「そうすると1日から2日程王都へ行くのが遅れるが？」

僕「今更遅れても王都の戦力が大幅に増える事は無いと思います。逆にこちらに降る領主等出てくるのでは無いかと」

白の騎士団団長「確かに、国王軍が一方的にやられて残るは王都のみですしね」

赤の騎士団団長「領主息子の件はどうする？」

領主息子は静かに話を聴いていた。

僕「そうですね。翁に委ねましょう。翁ならまさか命までは取らないでしょう」

白の騎士団団長「命令違反と独断専行、それによる危機存亡と。」

赤の騎士団団長「その場の現場指揮官による採決で死罪になってもおかしくないな」

皆の言葉に領主息子が反応した。
そこまでとは考えてなかったのかもしれない。

赤の騎士団団長「軍隊における命令違反はそれ程重いものだとやっと気がついたのか?」

領主息子「状況により判断するのはいけないのですか?」

赤の騎士団団長「状況判断を読み間違えて勝手に行動したのがいけないと言っている」

領主息子「それは…今回は結果的にそうなったのであって、状況的に判断は間違ってなかったと思います」

赤の騎士団団長「そんなこともわからない愚か者なのか!!」

領主息子の言葉に赤の騎士団団長が叫ぶ。

赤の騎士団団長「誰の目から見てもこの結果になる事は予想できるだろう!」

白の騎士団団長「そうだね。だからこそ最初から作戦を組んでいたんだし。」

領主息子「なぜそう言えるのですか！」

白の騎士団団長「まず立地。両脇を渓谷に囲まれて逃げ場が無い空間である事」

赤の騎士団団長「そこを襲われたら死に物狂いで逃げようとするに決まっている。しかも片方の出口は我々両騎士団が抑えているのだ。暴発する方は反対側に決まっている」

領主息子「では作戦通りにしても同じ結果だったのでは無いですか！」

赤の騎士団団長が「起きなかった事について言うのも馬鹿馬鹿しいが」とため息をついて

赤の騎士団団長「暴発が予想されたからこそ近づかずに追撃し、敵が戻る気配を感じたら弓を撃てと言っていたのだ！」

白の騎士団団長「そうすれば敵との距離も保てるし「相手に近づく前に殺される」という事実から気力も削げるからね。そこに投降を呼びかける手はずだったんだよ」

赤の騎士団団長「どちらが被害が少ないか想像できるか？」

無言で俯く領主息子。

赤の騎士団団長「若の作戦に誰も異を唱えなかったのは、それが効果的で味方の損害も少ないと予想されたからだ」

「他に言いたい事があれば大砦で聞こう」そう言うと赤の騎士団団長は「一時的に領主息子の指揮権剥奪が必要でしょう」と僕に言う。僕は頷いて領主息子の軍勢を美女さんの指揮下に置く事と、領主息子も美女さんの下に付く事を伝えた。

僕「では戻りましょう。今から戻れば夜中には大砦に戻れるでしょうから」

魔王『今回の領主息子の独断は今までの戦果が状況が生んだのかもしれないな』

―どういう事？

魔王『勝ちすぎなのだ。小砦も、大砦も、防衛線も』

―勝ちすぎ…

魔王『本来ならもっと苦労している戦いばかりだ。小砦では騎士団の攻撃は無かった。大砦は内通者が門を開けた。防衛線は相手が戦を知らない馬鹿だった』

―その勝ちすぎて気が緩んでいると？

魔王『緩んでいると言うよりは相手を安く見すぎているな』

―その結果が無謀な独断専行

魔王『逆にこの程度で済んでよかったとも言えるな』

―もっと酷い状況も予想された?

魔王『それこそ大きな戦で全軍が崩れるくらいの事はあったかもな』

―そうなると、この件を気を引き締める事に利用するしかないね

魔王『処刑するか?』

―それは…したくない

魔王『出来ないのではなく?』

―そうだね。出来ないと言ってもいいかもしれない。命は助けたい。

魔王『甘いな。甘すぎる。いつか痛い目を見るぞ?』

―そうかもしれないね

魔王『かもではない。確実だ』

―出来るだけ気をつけるよ。とりあえずはこの件については翁に任せるよ。

魔王『責任転嫁では無いか？』

―そう言われても仕方ないけど、でもここで切るのは良くない気がする

魔王『どういうことだ？』

―旨くいえない。ただ切るのが嫌なだけかもしれないしね

魔王『ふむ―』

それっきり魔王は黙ってしまった。

僕はそっとため息をついて空を仰いだ。

勝ち戦が続いているにも関わらず、気分は敗戦者だった。

第２１話　ルール違反

途中で補給部隊を回収しながら夜半（やはん、０時頃）に大砦に入る。
前もって状況と帰還を伝えていたので大砦では受け入れ準備が行われていたようだ。
王子と翁と爺が僕達を迎える。

王子「状況はある程度把握しております。領主息子」

領主息子「はい」

王子「処分を検討します。それまで自室で待機を」

領主息子「はい」

領主息子が自室へと２人の兵士をに連れられて行く。
大砦への帰還の帰路の途中で領主息子と両騎士団を交えて少し話をした。
酷い内容だが領主息子は快くと言っては変だが引き受けてくれた。
翁が「申し訳ない」と頭を下げるのを止めて「その件で処遇にお話があります」と伝える。
翁はすぐに頷くと僕と両騎士団団長、美女さんを会議室に案内する。
「食事を作らせておるが？」という申し出に「まずはこの話を終わらせてから」と伝えた。

翁「領主息子の処遇だが、厳しい処分が必要だとワシは思っておる」

王子「翁!?」

翁が処刑もありえると言葉に含むのを王子が止める。

翁「王子、事は反国王軍の士気に関わる問題じゃ。身内だからと甘い処罰では反国王軍の結束を乱しかねん」

赤の騎士団団長「ここで甘い処罰をすると、独断専行をしても許される。結果、戦果を上げればよし、という風潮を生みかねない」

白の騎士団団長「その結果、反国王軍は内部から瓦解する」

僕「そうですね。ですが余り厳しすぎるのもどうかと思います」

翁「でもそれでは他のものに示しがつかん!」

僕「領主息子はここまで来れた功労者の一人です。その戦功と差し引いて0にしましょう。」

赤の騎士団団長「それでは周りが納得せんだろう?」

だから厳しく処罰するべきだと言うのだ。

僕「後から来たものより確実に戦功があるのですから、それが無か

った事になるのは厳しいといえると思いますが」

白の騎士団団長「それでも、そういう事を理解出来ないものは多いんだよ」

僕「そうですか。では、財産を献上してもらいましょう」

翁「財産だと？」

僕「そうです。領主息子はどれくらい持ってますか？」

翁「領主息子本人のとなると、殆ど無いのではないだろうか」

僕「では翁と現領主に泣いてもらうしかありません」

翁「…それで領主息子が助かるなら安いものじゃ」

僕「どれくらいが妥当でしょうか？出来ればそこらの領主ではそう出せないぐらいが良いのですが」

翁「そうじゃな…領地の年収の半分と領地を幾つか…か」

僕「領地の年収は高い方？」

翁「中堅領主なみじゃな。有力貴族の４分の１程度じゃ」

白の騎士団団長「有力貴族は搾取してますからね」

僕「では土地はいいので年収の２倍としましょう。４年の分割で払ってもらいましょう」

翁「わかった」

僕「本来なら幾つかの土地と翁の領地の年収４倍の財産を没収の所を、今までの戦功を差し引いて年収４倍のみ。その上で領主息子は後方支援部隊への配属を言い渡す。と言う事でどうでしょう」

王子「それではもう戦功は立てれませんが？」

僕「そうですね」

王子「厳し過ぎませんか？領主息子の面子を潰しすぎの気もします」

白の騎士団団長「すでに領主息子には納得してもらってます」

翁「何と？」

僕「今回の件については今までの戦の勝利が起因していると思います」

王子「戦の勝利？」

僕「勝ちすぎました。それも殆どの被害を出さずと言っていいほどの」

赤の騎士団団長「それによる楽勝ムードが気の緩みを生み、相手を低くみるようになっている可能性がある、と言う事です」

僕「ですので、今回の件を逆に利用して気を引き締めます。『翁の所の領主息子ですらミスをすれば罰を受け、今後の功績を立てるチ

ャンスをなくされる』とね」

王子「なるほど」

僕「当初から参加をし戦果を上げてても独断専行をしたらこれだけの罰を受けるんです」

白の騎士団団長「そうですね。言い方は悪いですが、本来ならそこまでの失敗ではありません。」

赤の騎士団団長「そうだな。兵を無駄に死なせた罪はあるが、本来なら今後の戦で取り戻せ、という所だな」

それを分かっていて領主息子に「処刑もありえる」と言い切る赤の騎士団団長も人が悪い。

僕「これは他の領主への警告と、今後降る領主達への警告です」

翁「今後降る?」

僕「今回の防衛と追撃で国王軍に対して圧勝を収めたと言えます。この状況を見たら降る領主もいるでしょう」

王子「それに対する警告とは?」

僕「今まで傍観してた者に対しては、今更来る事に対しての精神的重圧になるでしょう」

白の騎士団団長「一番の功労者である翁一族にもミスに対する処罰で財産の没収があるんです。今まで傍観していた者は焦るでしょうね。最初に『傍観している者には財産没収』と通達してますし」

僕「国王軍に付いていたものに対しても財産を差し出させ安くなりますね」

赤の騎士団団長「翁であれだからな。敵対してた者は我が身の命を守るために土地も財産もある程度出すだろう」

僕「そういう事です。領主息子を処刑してしまうと、逆に彼らに『今更行っても処刑されるだけかもしれない』という想いを抱かせかねません」

王子「なるほど」

僕「翁と現領主に関しては、戦後の功績で今回の件以上の物を得てもらえばいいでしょう」

王子「そうですね」

僕「そして僕に対する処遇ですが」

翁「そなたにもか？」

僕「指揮官としての責任は問いませんと。部下に行わせて―と言うのもありえますしね」

翁「むう」

僕「今までの戦功剥奪と、土地や財産の無い僕には戦後の土地の分配無し、でいいのでは？」

翁「なんと！？」

僕「元々、土地は貰わない約束ですし、痛くも痒くもないですね」

翁が唸るのを見て笑う。

僕「何かしらの理由を付けて押し付けるつもりだったでしょう。そうは行きませんよ」

爺「厳しすぎませんか？」

僕「厳しいくらいがいいんです。その分、良い働きには十分に報いてあげてください。信賞必罰です」

処遇については概ね決まった。
後は出撃の時期だ。
ずっと準備を行っていたお陰で明日の昼には準備が終わるらしい。
だが兵に休息を取らせないとまずい為に出発は明後日以降となった。

僕「そうだ、王都に降伏勧告を行ってみましょうか？」

爺「何？」

僕「勝手に暴走して処刑されても困るので、王子と有力貴族のトップの2人の身柄の引渡しと王都の無血開城で他の者の土地と財産の一部を認めると」

爺「土地と財産の？」

僕「土地と財産の、です」

翁「馬鹿でもさすがに自分の命に関しては気がつくだろう」

僕「では命も助けると言いましょう」

翁「だがヤツラに財産を残したら、また何をしでかすかわからんだろう」

僕「そうですね。ですので戦後に責任を取らせて没収しましょう」

翁「は？」

王子「待ってください。財産は一部認めるのでは？」

僕「はい。王都攻略時の接収は行いません。ですが、戦後の敗戦処理では罪を償う為に差し出してもらいます」

赤の騎士団団長「何と悪辣な…」

白の騎士団団長「言葉遊びではないですか」

僕「何か問題が？今の王都にいる顔触れで惜しむ人物でもいますか？」

翁「…おらんな」

僕「では良いではないですか。命は助けるのですから。財産を全て没収されても命が残るだけマシでしょう。それでも財産を残したい人は死んでもらって遺族に一部財産を渡しましょう」

赤の騎士団団長「一部？」

僕「ええ、女性と子供が一般家庭で1～2年間生きていくのに困らない程度に渡します。後は前に決めたように土地を耕して生活してもらえばいい」

赤の騎士団団長「男は？」

僕「え？拒否の場合は全員、処刑されているのでは？」

翁「確かにそうじゃが…」

僕「なら考えなくても良いじゃないですか」

王子「若…急に雰囲気が変わりましたね？」

僕「そうです―か？そうかも知れませんね。姫の騎士と決めた時から、この戦は他人事じゃなくなりましたから」

翁「ふむ」

僕「今後、姫に害する可能性がある存在は潰しておきたいんですよ」

「頼りになると言うか恐ろしいと言うか」と呟く翁。

僕「領主達から接収した土地で今回の戦功に答えて、財産で国の復興に当たる。いい事尽くめじゃないですか」

王子「そうなのでしょうか―？」

本当の所はそうでもないとは思う。
でもそれは王子や翁達が戦後の状況を見ながらやっていけば良いと思う。

赤の騎士団団長「無血開城を受けない場合は？」

僕「通常通り王都を攻めるしかないでしょう。投石器を使って外壁一枚壊した後にさらに厳しい条件で再度呼びかけましょう」

赤の騎士団団長「厳しいとは？」

僕「そうですね。身柄の引渡しに有力貴族のトップとその３等身までの男子の身柄の引渡しにしましょう。そしてその他の者は土地は没収で財産の一部と命の保障で。それで受け無い場合は―」

翁「場合は？」

僕「城壁をさらに一枚壊してもっと厳しい条件を突きつけます。前の条件に身柄確保は有力貴族の何名かも追加します。これは今の国

の要職に付いている人物などで良いでしょう。王達が5名ほど選んでください」

翁「わかった」

僕「そして他の者は財産を全て没収。これに応じない場合は以後の降伏は受け入れないものとして女子供も含めた一族郎党処刑」

僕の物言いに一同言葉を無くす。
それを見て僕は笑いながら言う。

僕「これまで言えば相手も折れると見込んでの事です。別に女性や子供を殺したいとは思ってません」

王子「よかった…」

僕「でも仕方ない場合は処刑しかありませんけどね」

王子「……」

僕「王子、僕は姫との約束で命を守れる人は守ると言いました。でもそれは『守れる人』です。相手がそれを拒否した場合は仕方ありません。」

王子を真っ直ぐ見る。

僕「戦の旗頭として、王族として決断しなければならない時もあります。その時に躊躇した結果、大切な人や多くの者が死ぬかもしれません。」

王子「国の為に多少の犠牲は仕方ないと？」

僕「仕方ないと言うのではなく、やるんです。時間を掛ける余裕があり、全員助けるいい方法があるらなそれを選べばいいだけです。戦後、貴方が国を背負うのでしょう？」

王子「僕が…」

―あれ？違うの？

てっきり王子が国王になると思って居たので翁に聞く。

僕「戦後は王子が国王になるのでは？」

翁「そうですな」

王子「そんな！第３王子を差し置いて僕なんかが！」

僕「その第３王子が国を荒廃させたんです」

王子「それは周りの有力貴族が―」

翁「それでは国民は納得しません」

王子「では第3王子はどうなるのですか！？」

他の者と一緒に処刑されると思ったのかもしれない。
王子が顔を真っ青にして叫ぶ。

僕「通常は退位の後に幽閉でしょうね」

翁「そうじゃな。国王であった者を処刑はできぬ。生涯幽閉となるじゃろう」

王子「そんな…」

僕「王子が国王に菜穴井方法がありますよ？」

王子「それは！？」

僕「姫に押し付けるのです」

王子「え―？」

僕「姫に押し付けなさい。そうして姫には他国から婿を貰えば国同士のつながりも強化でき一石二鳥です」

僕「そんな事は出来ません！」

僕「何故です？」

僕「―っ！」

僕「王子は王になりたくないと言う。でも姫が婿を取って国を治めるのは出来ないと言う。」

王子「……」

僕「ならいっその事、反国王軍は解散しましょうか」

王子「なんで…」

僕「戦後に誰も治めない国よりは悪政でも今の方がマシでしょう。我々の大儀も無くなりますし」

皆は僕と王子のやり取りを見守る。

翁「他にも方法はあるがな」

呟く翁に皆の視線が集まる。

翁「若が姫と婚姻を結べばよい」

王子「どういう方法ですか?」

何を言っているんだこの爺さんは?
まじめな話をしている状況でそんな茶化す事を言うとは!

爺が「おお」と言いながら手を打つ。

王子「それだ！」

―それだじゃないよ！

僕「何を言ってるんですか。この国の人間でもなく何処の誰かも分からない者を王位に付けてどうするんですか」

翁「それはそれ。今回の戦での最大の功労者はお主であろう。姫の危機を助けたしな」

僕「それならずっと守ってた爺が上でしょう！」

爺「それでも今までの勝利は全て若の作戦のお陰ですからな」

僕「周りが認めませんよ」

翁「そうでもない。『姫の騎士』として十分に名が知れ渡っておる」

王子「頼る先も無い姫の窮地に駆けつけその身を守り通し、軍勢を集め今までの勝利の立役者として認知されてますね」

僕「何で昨日の今日でそんな通り名が通ってるんですか！」

翁「戦後に『姫の騎士』の立場を確立する為にと思い、触れて回ったのじゃ。まさかこうも役に立つとは」

呆然と翁と王子と爺を見る。
何でこの人達はこんなに笑っているんだろう。

僕「…姫を政治の道具にするのは感心できません」

翁「先程、お主は『他国から婿を取れ』と言っていたではないか」

僕「それは王子に発破を掛ける為の方便です。もしその方向に動いたら、そんな事が無いように動くつもりでした」

翁「それは何故じゃ？」

僕「政略結婚などさせれません！」

翁「おかしな事を言う。王族の結婚は政略結婚が基本じゃ。貴族間ですら似たようなものぞ？」

棒「姫には笑顔でいて欲しいのです。姫の意に沿わない結婚はさせれません」

翁「意に沿えばよいのか？」

翁が邪悪に（というしか形容が無い顔で）笑う。
姫は「国のため」と言われれば受けるだろう。
それくらいに責任と優しさの溢れた人だ。

僕「姫なら自分の気持ちを押し殺して受ける可能性が高い」

翁「そう思うなら何故、お主が娶(めと)ろうとしない？」

僕「だから姫の意に沿わない事をさせたくないと言っているでしょう」

翁「意に沿えばいいのじゃな？」

僕「丸め込むのは無しですよ！それじゃ意味が無い」

翁の笑顔の裏にあるものが読み取れない。
だが決して良いものではないような気がして必死で翁の道を塞ぐように言葉を紡ぐ。
元々、なんでこんな話になったのだろう？

魔王『気がついていないのはお主だけだ』

―何か分かってるなら教えてくれ！

魔王『……』

―魔王！

僕と翁が言い合ってると赤の騎士団団長が「まさか―」と呟く

赤の騎士団団長「まさか本気でそこまで姫の気持ちに気がついて無いだと？」

部屋が静かになる。

赤の騎士団団長の方を見ると横で白の騎士団団長が「あちゃ～」という感じで顔を抑えていた。

僕「―はい？」

赤の騎士団団長「本気で姫の好意に気が付いていないのか？と聞いてる」

そういう赤の騎士団団長を白の騎士団団長が押さえつける。

赤の騎士団団長「何をする。一度ちゃんと確認したいと思っていたんだ！皆もそうであろう！！」

白の騎士団団長「例えそうでも、直接聞くのはルール違反です！」

赤の騎士団団長「何故だ！面倒なの好かぬ！」

白の騎士団団長「それでもこの場合はルール違反です。もし貴方が自分の気持ちを他人に勝手に言われたらどう思いますか！」

赤の騎士団団長が「う、うむ…そうか」と言って席に座る。

―姫が好意？誰に？

理解が及ばない。

白の騎士団団長「本当に申し訳ありません。こういう形でお伝えするのは不本意ですが、こうなっては仕方ありません。貴方の意見をお聞かせ願いたい」

僕「―え、あ、その…赤の騎士団団長の勘違いでは？」

何か言おうとする赤の騎士団団長を手で制して言葉を繋ぐ

白の騎士団団長「そんな事はありません。みんなそのように認識しております。気がついていないのは貴方だけだ」

白の騎士団団長の言葉に周りを見る。
王も爺も王子も僕が見ると頷く。
視線を彷徨わせて美女さんに縋る様に見ると笑顔で口を開いた。

美女さん「気がついていないのは若ご本人だけですよ」

魔王『ちなみに我も気がついていたが？』

―えええええええええ

いきなりの展開（おぬしの中だけでな）に僕はどうしていいか分からなかった。

第２１話　ルール違反（後書き）

赤の騎士団団長がやってくれました。
こんな方法で姫の気持ちに気が付く予定ではなかったのですが、若が朴念仁を通り越して植物に成らないように考えたらこのタイミングとなりました。

丁度いい汚れ役もいましたし。いい意味で！

話は元の予定を大幅に超えて行ってます。
何処へ向かうのでしょうか？

そろそろタイトルも決めたいのに何も思いつかない。
終わるまでに決まると…いいね。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8400w/

無題

2011年10月19日05時04分発行